271-168
1200501356625
271
168

著丸清野河

母の爲の教育方法論

始

著　丸清野河

母の爲の教育方法論

叢文閣版

271-168

はしがき

本書の標題は、最初、『母の爲の學習指導法』とする積りで、豫告にもさうしてあつた。從て初めの計畫は、學習全般、卽ち小學校に於ける各教科目の指導法を總て網羅する筈であつた。

此の心組で材料を集めかけたが、綴方だけで以て、最う全卷の豫定頁數を超過してしまふといふ次第であつたので、方針をがらりと改め、綴方材料の、ほんの一部分を採り、之に修身科と體育法とを加へ、書名をも『母の爲の教育方法論』と改めて上梓することになつたのである。

修身の方では、現今、日本精神の作興、國體の明徴、選擧の肅正などが八釜しい問題になつてゐる折柄のこととて、私は本教科目の理論として、以上の三件を略説しつゝ、之と學校及び家庭教育との關係を述ぶることによりて、實際論へ交渉をつけることにした。

就中、日本精神の本質に就いては、異論百出のやうであるが、我國は所謂德治主義であつて、上慈に下忠、上下相愛して情猶父子の如く、一言せば『愛』と、それの極點にまで高じた「犧牲の念」とが日本精神の髓の髓だといふ斷案を下したのである。

はしがき

家庭に於ては明に、愛が唯一主徳であり、愛が愛を呼びて孝となり、友となり、此の愛により
て家が齊ふといふことを力説した。
今此の家庭道徳を擴充することにより國が治り（日本の家族化）、それを更に推し擴げて人
類を一體化し、別言せばこの日本精神を以て全世界を道徳的に統一するのが邦人の使命であるこ
とを述べておいた。
以上の理論を肉づけたものが本著に於ける修身教育の實際編であつて、兒童の母親に對する感
想文一〇三篇を資料とし、それを分類し、組織することによりて、母親が其の子女に對する訓育
方法を、九項二十餘目に細別敍述しておいたのである。

國語科に在りては、それの三分科（讀方・書方・綴方）中、特に困難視されてゐる綴方を、實例
を列擧して之が指導法を述べておいた。只餘白がないので、韻文、對話（學校劇）等に一指を染
むるの餘地なく、單に散文のみに止めたのは遺憾の極であるが、然し又、間口のみ擴げて奥行の
ないのよりは增しだと思つて自ら慰めてゐる。

はしがき

體育方面に於ては、私は從來、體育中心の教育法に注意を拂つてゐるものであるが、元來此の
方面の素養は皆無と言つてよい方であるから、無鐵砲なことを言つては却て人を賊なふものある
ことを恐れて、專ら斯道專門家の意見を紹介布衍することにした。幸に私は最近、獨逸のストラ
ッツ——醫師兼藝術家兼家庭教育の研究者として、彼の地に於て令名嘖々、その著書は忽ち數十
版を重ねるといふ風な、ストラッツの書物を三册だけ讀了してゐたので、大體はそれに基き、更
に米國ものも數册參考しつゝ述べておいたから、大した間違はないと信じてゐる。

私の教育研究方針は、「理論に裏づけられた實際」といふのである。しかし本小著は理論二分
に實際八分といふ位な割合になつてゐることをこゝに告白しておく。

お母様方に取りては主として本著の内容が、教師諸君に對してはその研究方法が、多少とも參
考になるならば、私の本懷とする所である。

昭和十年十月

著者誌

目次

第一章　修身教育……一

第一節　修身教育の理論……一　修身教育に對する家庭の使命……二　家族主義と日本精神……三　日本人の人類全般に對する使命……四　君民同祖の信仰……五　犧牲心と權利思想……一―三一

第二節　修身教育の實際……學習指導……學習助成……送迎……訓育の方法……小結論……教訓……感化……口答……賞罰……修身總括……三一―九四

第二章　國語教育……九五

第一節　一學年の綴り方指導……綴り方と觀察……九五―一一〇

第二節　二年生の綴方指導……一一〇―一二六

第三節　三年生の綴方指導……五分間綴方……一二六―一四一

第四節　四年生の綴方指導……一四一―一五一

目次

第五節　五年生の綴方指導……一五一—一六六
第六節　六年生の綴方指導……一六六—一八九
第三章　體育……一九〇
第一節　姿勢……一　姿勢の規則……二　姿勢の養成法……一九一—一九九
第二節　兒童期（體育の對象としての）……一　兒童期の分類……二　兒童期と運動……三　運動と休養……一九九—二〇八
第三節　成熟期……一　月經……二　成熟期と食物……二〇八—二一五
第四節　食物……一　體育の二目的……二　肉食か菜食か……三　養分と體重……四　減脂法（痩せる法）……五　增脂法（肥る法）……二一五—二三九

母の爲の教育方法論

第一章　修身教育

第一節　修身教育の理論

（小學校に於ける修身科の要旨或は目的は、教育勅語の趣旨に基き、德性即ち道德的性質を涵養し、それの實踐を指導することである。けれども本著の修身教育は、學校のとは異つて、專ら母子の關係を實際調査に基きて細述し、家庭教育上の參考に供したいのである。）

第一章　修身教育

一　修身教育に對する家庭の使命

佛國の有名な社會學者であるコントは、「家庭は愛情が主となつて、人類同胞を一體たらしむる原動力養成の地盤である」と述べてゐるが、誠に名言だと思はれる。家庭は愛情、殊に母性愛を以て終始一貫し、親が子を愛するから、子も亦親を愛慕するといふ風になりて、家庭が愛情の塊となる。此の熱愛を擴張し又擴張しつゝ、遂に人類一體化を圖るのが私共人間の理想であらうが、家庭は實に、この大理想の地盤となることを思へば、家庭の使命も亦大なるかなである。

獨逸の、これも亦有名な社會學者のテンニースは、社會を分ちて、共利社會と共同社會の二つにしてゐる。前者は例へば株式會社の如く、單に營利を目的として團結し、利益がなくなれば解散するやうな、冷たい脆弱な集團であるが、共同社會の方は、愛情を以て結ばれた、切つても切れない一團であつて、家庭は勿論この後者に屬すると言つてゐる。共同社會は又、時々「犧牲社會」とも譯される程で、愛情の極、若し必要ならば、自己の快樂・幸福乃至は身命をも他の爲に捧げて惜しまない集團である。

家庭は要するに、犧牲獻身的熱愛を以て、切つても切れぬ集團を形づくつてゐるのであるが、殊に私共日本人としては、此の熱愛を我國全體はおろか、東洋に及ぼし、全世界に及ぼして、其の極人類一體化の理想實現に邁進すべきものと考へる。家庭は斯くして、人類一體化の苗床である。

二　家族主義と日本精神

日本は由來家族主義の國と言はれてゐる。これにも亦二つの意味があつて、親子・夫婦・兄弟の如き親近者が、小さな殻の中に立て籠つて、專ら家庭的利己主義をこれはかるといふのは小家族主義であるが、國家全體を一家庭と見るのが、大家族主義若くは總合家族主義である。此の後者が我國に於ては餘程迄實現されてゐる。そして私達は益々之が實現を理想とし、憧憬の的と仰がねばならぬ。此の憧憬と、之が實現に對する努力とを、私は日本精神と呼びたいのである。

我國では、國家とは「國といふ家」で、「國」そのものが一つの「大きな家」であつて、其の中心は皇室である。古くは、聖武天皇が施藥院をおかせ給ひし時の詔に、「朕は父母たり」と宣はせられ、雄略天皇は「義は君臣なれども情猶父子のごとし」とのたまひ、孝謙天皇は母ニ臨區宇ニ子ニ育黎民ニと宣はせられた。明治、大正、今上三陛下も此の情父子を詔勅の間に述べさせられたことは、周知の事實である。

古へのふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと　（明治天皇）

日夜私共のことを御軫念遊ばされ、

綾錦取りかされても思ふかな寒さ掩はん袖もなき身を　（昭憲皇太后御歌）

など、君德宏大、世界の何處に斯る實例を見出すことが出來ようか。

表面から言へば、天皇は私共臣民とは、全然で格式の異つた、桁ちがひの（次元を異にする）、嚴めしい、貴い、天ッ日嗣の高御座にるますが現人神にておはしますのであるが、（義は君臣）、然かもこれと同時に、私共は、畏ら甘えても、近ついても見たいやうな氣のする、お父様でもある（情猶父子）。このやうに、聖上が君主であると同時に父上である所に忠孝一本の根本義がある。斯くして、君民は父子、國民相互は兄弟であり、國中が親類行儀で、水臭い他人行儀ではない筈である。

この忠孝一本、四海兄弟にして、愛情の極まる所、君の爲、國の爲、同胞の爲に犧牲となつて悔ゆる所がないといふ氣持が、所謂日本精神に外ならないと思ふ。そして、これは家族主義から必然的に醸成せられた、愛情、犧牲の精神であつて、日本精神の本體はこれに外ならないと私は確信する。

三　日本人の人類全般に對する使命

日本の國家は斯くの如く、文字通りに家族を擴大したものであるが、今一歩を進めて、全世界を一大家族化し、犧牲社會化することは、人類の究竟最後の理想であるまいか。然かも我國は、此の理想が最も多く實現されてゐる國であり、此の點に於て文字通りに、世界に二つとない、理

想的な、少くとも準理想的な國家であり、それだけ又、我等日本人はこの理想の實現に對して、最良の素質と經驗と性格と技倆とを有する筈であるから、我等日本人は全地球上の指導者となつて、宇宙を家族化し、日本精神を以て世界を一統して、地上に天國を實現し行くべき使命を有するのではあるまいか。

こんな口幅つたいことを、こゝ數年前に語つたなら、所謂一片の豪語として、或は又誇大妄想狂として一笑に附せられたかも知れない。併し今日に於ける我國の世界的位置は何うであらう。日本研究熱は世界の隅々まで行亘り、諸外國から留學志願者が殺到して當局者をして轉挺子舞させてゐるではないか。

更に又、世界日本化の第一着歩としての、日滿支三國協調の氣運は着々として進捗されつゝあるのではあるまいか。私共日本人の手で、人類究竟の理想を實現する日も、彌勒出世を待つ程遠いものでないかも知れない？

四　君民同祖の信仰

前項のやうには言つたものゝ、玆に私共は一大難問に逢着する。君民は父子であり、從て又同祖であるといふ考は、荒唐無稽な神話的説明で滿足する時代なら問題ではあるまいが、之を科學的、殊には考古學、人類學の立場からして、このことに證明し得るかといふ疑問がそれである。

我が日本女子大學で、本年春、德富蘇峯先生が、學生の爲に一場の講演をして呉れたことがある。先生は劈頭第一、「日本人の顏は一人々々異つてゐる。私は九州人だから態襲に似てゐるかも知れない」と言つて一堂を洪笑せしめたが、私はひそかに會心の微笑を禁じ得なかつた。私共日本人の中には、熊襲族の外に、アイヌの血を受けたらしいもの、南洋人、滿鮮人の子孫らしいものなど、千差萬態の面相・骨格を有してゐるに相違ない。斯くして、君民同祖が何處にあらうか。邦人は諸冊二尊の直系と說くが如きは、單なる神話的説明に過ぎないからである。

私は又、西洋人が日本及日本精神に就いてどんなことを考へてゐるかを知りたい爲に、米人シヤーラーの「日本の稗史」や、ゴオウエンの「日本歴史綱要」などを、可なり入念に讀んで見た。後者の一節に、「日本人の起源」と題する項目があつて、それには次のやうなことが書いてある。

「日本の民族的起源は非常に複雑であつて、この國の祖先を研究する爲には世界の端々迄遍歴せねばならぬ。……日本群島は數千年の間、混合民族によりて住はれてゐたに相違ない。そして世界中の何れの國も日本國民をつくる爲に貢献しない者は殆どあるまい。コーカス、蒙古、マレー諸民族から、太洋上の黒人に至る迄、何れか然らざるものはない。……」

斯う考へると、君民同祖説は非常に怪しいものと見える。

日本民族の成立を考へて見ると、その初めは、どの道、國外から移住して來られた（天孫降臨）のに相違ない。そしてこの移住の方法に關して二つの説があるらしい。一つは「同時的移住説」とでもいふべく、他は「漸次的移住説」と名けてよいかと思はれる。前者は、日本民族は海外にある故郷（高天ヶ原）から、大群をなしてこの群島に移住し來りて先住民族を歸順せしめたものと見る。後者は、同じく移住したのではあるが、長い〳〵年月の間に、少し宛來り住んだといふのである。中村孝也博士の「我等の國史」二〇頁に、

「……日本群島の住民は、悠久なる年月に亘つて、大陸並に南洋諸島に流れる民族移動の大潮流の中から種々様々な系統の民族が、北より西北より、南より西南より、幾十百回も幾千萬回も繰返し〳〵移住し來りて、……甲は乙を同化し、丙は丁を融合して、群島上に於て、終に新たに『日本民族』が大成された。之が日本民族の光輝ある創生である」と。

かやうにして、長い〳〵月日の間に、日本民族が創生せられて、自然に皇室を中心とする民族國家がつくられたものと考へて來ると、君民同祖説も段々肯かれて來るやうに思はれる。

前掲のゴオウエン亦次の如く言つてゐる。

「ツングース族は、滿鮮から佐渡を經て上陸し、其の附近を攻略したけれども、其の數が少くて、日本民

族構成の重要素をなすに足りなかつた。（素盞嗚尊、大國主命の系統に屬する出雲朝を指すのであらう——大陸說）。」

「最後のものは（一）熊襲族（Kumaso）で、之は南洋から黒潮に乘り、臺灣を經て入國したものゝやうである。併しこの民族は日本入國前（二）、オンドネシヤン（三）、ポリネシヤンの諸要素と混合したやうであるが、兎に角先づ日向を占有した。之を日本民族の主要素とすることは、諸說の大體一致する所である。日本の家屋は滿鮮の如き寒地入には適しない。斯くして南洋說は最も眞理に近いやうである……」と。

（一）天上人種を熊襲族と同一視したのは、道に外人らしい所がある。

（二）Indonesian（インドメシヤン）は馬來半島及同群島民族。

（三）Polynesian（ポリネシアン）は、ハワイ、ニユージーランド等を含む南洋諸島の民族。

同時移住說と漸次移住說（或は民族創生說）、大陸說と南洋說との眞僞如何は、專門家の間にさへ異說のある所であるが、孰れにしても、日本人が單一民族でないことだけは爭はれない事實であつて、德富先生の言も肯かれるし、ゴオウエンの考も外れてはゐない。併し我等の祖先に征服といふことはないと言はれる程で、優秀民族としての天上人種或は高天ケ原民族は、劣等先住民族にして歸順するものは之を愛撫し、却て之を大御寶として慈しみ給ひ、臣民も亦皇恩の偉大なるに感激しつゝ、漸次融合して特殊の一民族となつたものゝやうである。

前揭ゴオウエンは「色々の枝に結つたオレンジも、もぎ取られては同じ籠の中に投げ入れられる。」

Oranges on separate branches grown,
When plucked, are in one basket thrown.

といふ詩を引用して、民族融合の事實を說明してゐる。

奥田寬太郎氏の「比較國體論」六二頁に、

「人種學者の說によると、古代日本人程多くの人種が雜居した國は稀である。從て日本民族は最も多種の混血兒だといふのが定說になつてゐる……後年一國、一民族と纏つてしまつたのは、多くの人種が天孫民族に同化したからである。否同化せしむべき偉大なる力が皇室にあつたからである。」

とある。

「比較國體論」の六三頁以後には又、日本史には殺戮といふ記錄がなく、歸化人を優待せることを、考證的に述べてゐる。嵯峨天皇の御宇に編纂された、「新撰姓氏錄」三十卷中に收むる、當時の名門千百有餘の中、大體三分の一が歸化人を祖先とするものであつて、最初から歸化人を高級技術者、通譯、外交官等の重職に用ひ、それ等の子孫が世々名門に列せられたが爲であつて、我が國民が包容力に富む何よりの證據だと述べてゐる。

我國に征服といふ事實も記錄もない……とは史家のよく主張する所である。これは、考へやうに依て、「イエス」とも「ノー」とも言はれるであらう。征服の爲の征服はなかつたであらうが、獰猛不逞の徒は討伐も殺戮も敢てしたのに相違ない。現代に於ても、臺灣番人征討も、匪賊討伐も行はれてゐる。而かも征討者、討伐者は、之に依りて物質的利益（掠奪等）を得る爲ではなく、止むを得ず、涙を振つて干戈に訴ふるに外ならないのであるから、征服・殺戮といふ事實はあつても、その精神はないのである。

奥田氏は更に進んで（同書六四―五頁）、我國が斯く包容の雅量に富む所以は、結局固有の日本精神、……太陽哲學の歸結と見るべく、山川草木、禽獸虫魚、皆兄弟といふ根本精神から出發して、天地間の凡ゆるものを慈しみ愛するといふ精神で……一切のものが親と仰ぐ、日の神の直系たる、上御一人に服從し、上御一人の御國にあるものは、總て其の子たり臣たるものであるといふ大精神の前には、朝鮮とか支那とかいふ差別はないからである。この大精神こそ總ての人種を同化したのだ……といふ意味のことを述べてゐる。

日本民族が混血的だといふことは、君民同祖といふ信念を害するものではない。天孫民族が中心となつて他を同化しつゝ、長年月の間に結局一系列となつて了つたからである。之を一家に就いて考へて見ても分る。例へば玆にA家（河野家でもよい）があれば、祖先以來B・C・D……家と婚嫁相通ずることによりて、中心はAでもB・C・D樣々の混血になる。にも拘らずA家は依然A家たるの類である。

以上を要約て見ると、家庭はコントの言へる如く、愛を主として人類を一體化する苗床であり テンニイスの言の如く、愛の絶頂として相互に犧牲しあふ團結である。所で我等の日本は、家族の擴大されたもので、君民同祖、忠孝一本、上慈に下順ひ、文字通りに無比の國柄であるから、我等日本人は、進んで全世界を一大家族化し、日本精神化すべき使命を有する、そして此の愛と獻身犧牲の德こそ、日本精神の髓の髓といつてよいといふことに歸着するのである。

日本精神の眞髓たる、愛と犧牲心とが、最も强烈に、又有效に養成されるのは、私共の家庭に如くものはないのではあるまいか。

五　犧牲心と權利思想

犧牲とは、若し必要あらば、個人（又は團體）の所有權或は生存權に至るまで、他の爲に喜捨する精神なるが故に、所謂權利思想なるものと相容れない、或は之を超越して居るといふのが適當であらう。我國民には「權利思想がない」とよく言はれるが、之は犧牲心に伴ふ短所の一でないかと思ふ。昔は「泣く子と地頭には勝てぬ」と言つて、無法極まる壓制にも泣き愚へをし、武士の跋扈をも我慢してゐた。こんなことは文明の今日許すべき所でない。

明治維新後、西洋の個人主義が輸入されるやうになつて、この權利思想の明にせられたことは在來の日本精神或は愛の絶頂（極致）としての犧牲的精神の短所を補ふものとして誠に結構だと思ふ。

家庭に於ても、昔は子供の權利が認められなかつた。所で、こゝ二十年來、漸次それも認められるやうになつたのは、これ又西洋思想の賜であらう。併しそれは甘やかして、我儘をさせてもよいといふのでは決してない。

この權利觀念が始めて輸入された時代には、國體を危くする樣な、所謂危險思想とも稱すべきものさへ流行することを免れなかつたのである。明治十年前後には、佛國モンテスキューの民主主義、同じ流れに屬する、ルソーの民約論などが天下を風靡したものであつて、當時、東京大學總理、加藤弘之先生の如きも、「眞政大意」とか、「國體新論」とかいふ書物を公にして、獨逸流

の民主思想を吹鼓し、之が爲に嚢々たる世人の非難を買ひ、先生も段々考へたと見えて、「斯様な書物が著はしたのは、自分の學問が足らない故だ」と、新聞に廣告して罪を天下に謝し、右の二書が自ら絶版したやうなこともあつた程である。

然し右は過渡期に於ける、殆ど免れ難い現象であるが、文字通りに叡聖文武なる明治天皇は、固有の日本精神と、西洋思想との調和補充を圖らせ給ひ、明治二十二年には欽定憲法の發布となり、翌二十三年、遂に國會の開催となつたのである。

要するに、政治上の立憲思想や議會制度も矢張この個人主義の長所たる權利思想を採用して、一定の國民に參政權を與へ給はれたものであつて、期せずして、我國に於ける家族主義、犧牲的精神の短所を補ふことになつたのではないかと思はれる。

「抑々我が日本の憲法は……歐米諸國の憲法の如く、帝王の壓迫に堪へずして、貴族と人民とが鋒を逆まにして帝王に迫つた結果、出來たものとは違ふ。又歐米諸國の如く、人民が自由民權を主張する爲に、帝王に迫つて帝王に制定せしめたものでもない。全く明治天皇の遠大なる思召に依て欽定せられたるものであるから、外國の憲法と日本の憲法とを併せて、同一の理論を以て解釋することは、抑々誤つてゐると私は確信する（金子伯講演筆記）。

憲法といふものは、帝王の自由が拘束されるといふことは明である。英國ジョン王は暴逆を恣にしたが爲、當時の貴族が、王をラネミードといふ原野に誘ひ出し、國王の施政方針は、このマグナカーター大憲章に依ることを誓はれたいと言つて、自分等の草した憲法を突きつけ、王の調印を強要したが、これは一二一五年のことで、之ぞ英國憲法の始めだと言はれてゐる。其の後、チャールス一世は暴政を行つたが爲、一六四九年一月三十日、議會方の首領コルンウエル等は、國民の暴君、叛逆者、虐殺者と宣告して、王を斬罪に處したのである。

明治天皇は併ら、御みづから求めて、その自由を拘束する筈の憲法を欽定遊ばされたのは、臣民の自由を伸ばさんが爲に、御自らの自由を犧牲にされたものと、私自身は畏れながら拝察する・ことを禁じ得ない。この一事、正に、親のその子に對する慈愛其の儘であつて、文字通りに民の

父母にてあらせられるのではなからうか。斯様な御慈愛を忘れ、憲法によりて與へられた權利を惡用して、私利私慾を圖るが如きは、不忠此の上もないことである。

斯くして國民は、兎に角參政權を與へられたのであるが、國民各自の政見を纏める機關として「政黨」なるものが生れて來た。

所で最近に至り、政黨は眼中黨利黨益のみあつて、國利民福を忘れるやうになり、「政黨がその聲價を失墜し、識者の憫殺の的となつたことは、思ふに今日より甚しい場合はないであらう」（深作博士）。

西洋でも、政黨や議會の信用がなくなつた結果、所謂獨裁政治の行はれる國が出來て來た。獨逸や伊太利がそれである。

併し獨裁政治が國家を危機に顏せしむることの如何に大なるものであるかといふことも段々分りかけてゐる。伊太利が其の好例でないかと思はれる。私共はそれ故、選擧肅正により、人格と識見と技倆とを兼備せる一粒選りの選良を議會に送りて、皇運を扶翼し、國利民福を圖つて貰はねばならぬ。然るに彼の聞くも忌はしい投票賣買の如きに至つては、賣るものは自己の私腹を肥さんが故に、不適當な代議士を送りて、議會を不淨にし、國利民福の損傷を意とせず、買ふものは又自黨や自分一己の利益に眼閒みて、これ亦眼中國家なきに至らずは幸である。

幸にして選擧が肅正され、一粒選りの選良が一堂の下に集つて、法律を議し、豫算を決するにしても、天皇の御裁可がなかつたなら、その議決せる所は全然無效である。結局、日本國民は選良を代表者として、立法や豫算上の下相談をなし、陛下の御參考に供する迄で、採否の權能は依然として御一人の御手に在るといふことを忘れてはならないのである。

ヅローム（De. Lolme）は、「女子を變じて男子となし、男子を變じて女子と爲すの外、英國國會のなし能はざる所はない」と言つたが、それは英國のことで、日本の議會には當嵌らない。

斯くして私共は、選擧肅正と同時に、國體の明徵といふことに、細心の注意を拂はねばならないのである。

昭和十年八月三日政府の公表した國體明徴の聲明は次の通りである。

恭しく惟みるに我國體は天孫降臨の際下し賜へる御神勅により昭示せらるゝ所にして、萬世一系の天皇國を統治し給ひ、寶祚の隆は天地と與に窮なし。されば憲法發布の御上諭に、「國家統治ノ大權ハ朕カ之チ祖宗ニ承ケテ之チ子孫ニ傳フル所ナリ」と宣ひ、憲法第一條に「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と明示し給ふ。即ち大日本帝國統治の大權は嚴として天皇に存すること明かなり。若し夫れ統治權が天皇に存せずして天皇は之を行使するの機關なりと爲すが如きは、是れ全く萬邦無比なる我が國體の本義を愆るものなり。

近時憲法學說を繞り國體の本義に關聯して兎角の論議を見るに至れるは寔に遺憾に堪へず、政府は愈々國體の明徴に力を效し其の精華を發揚せんことを期す。乃ち茲に意のある所を述べて廣く各方面の協力を希望す。

段々と議論が脫線したやうであるが、上來述べた所を約めて言ふと、犧牲心は權利の無視になり易いから、西洋個人主義の長所である權利觀念を採つて、我が日本精神の眞髓たる犧牲心を補はねばならぬ。斯くして政事上には、欽定憲法及び議會制度の制定となつた。私共は選擧肅正に協力して、立憲君主政體の美果を結ばしめねばならない。併ら議會の權能には自ら制限があつて統治萬能の大權は常に天皇の御手に握らせ給ひ、「國家は天皇の國家で」「國家の天皇（機關說）ではない」といふ結論に達した。斯くして議論は「國體の明徴」といふ點に迄進んで來たのである。

天皇機關說を排擊す

「統治の機關とは、自然人（各個人）又は合議體の組織を有す人の集合體（諸官廳等）又は特別の團體（上下兩院等）にして、主權者の有する權力又は權利の行使を掌らしむるものなり」と定義されて居る（法制經濟大資料）。

我が憲法上では、統治の直接機關として、攝政・帝國議會・裁判所・國務大臣・樞密顧問・會計檢査院を擧げてゐる（同書）。

攝政は、主權者の目的と人格とを代理するが故に、猶一つの機關であることが肯かれるが、若

し天皇をも機關だとせば、それ以上の目的と人格とを有する或存在者があつて、天皇の上位に立たねばならぬ。民主主義の國に在りては、それは人民だといふのであらうが、我が國の歴史及び國體と全然一致しないといふのが、私共日本國民の確信である。蓋し

天皇は統治の主體で、國土と人民とはその客體である。今其の客體の一部分たる、人民を以てこれが主體とするが如きは、正にその主客を顚倒せるものなることは、我が國の歴史を大觀せば斷じて疑ふ可らざる所である。

松陰先生が嘗て言はれた通り、「我大八洲は皇祖の肇むる所」で、天孫民族がこの日本群島に降臨し、先住民族の中、敎ふべきは敎へ、度す可らざるものは之を征討するなど、つぶさに辛酸を嘗めて肇め給へるこの國土は、普天の寸地、率土の一民に至るまで、王土、王臣にあらざるものはない。斯くして、上、仁慈に、下、景仰し、上下悠々三千年、皇統連綿以て今日に至りつゝ天壤と共に窮まる所がないのである。

英國憲法の一部分たる大憲章が、所謂民約憲法、詳言せば、貴族が國民を代表して國王に迫り強ひて調印せしめたるものであり、一旦暴君の出づるあらば、之を裁判に附し、國民に對する叛逆者として斬罪に處するなど、空恐しい暴擧に出でるのは、民が本で、帝王はその機關と見るが故に外なるまい。從て我國體とは全然其の軌を一にしないのである。

獨逸の帝王は如何にして出來たのであらうか。其の昔、日耳曼の國民は皆兵士であり、彼等は時を極めて會合し、しかもそれは國政をも議したのである。斯くして軍隊の會合であると同時に政治の討議でもあつた。然るに羅馬人と戰ふに當りては、國民會を召集しその將帥を選擧した。此の將帥はその初め臨時的のもので、戰が終れば其の職を解いたものであるが、團體が漸次膨脹するに連れて、事ある毎に選擧するの不便を避け、その將帥は常設となり、終身の職となり、世襲とさへなつて君主國體をなす樣になつたのであるが、もと〳〵團體の機關であるが故に、世界大戰に於て、一敗地に塗れるや、皇帝は廢せられて、共和政治となり、獨裁政治となつてゐる。

然らば、佛蘭西は何うであらう。

「由來佛蘭西といふ國は、主權、民に在りといふ論を學者も唱へ、人民も之を信じて、之が國論となつてゐる。故に、氣に入らなければ皇帝であらうと何であらうと、忽ち之を廢して共和政府を建てる。共和政府でやつて見ていけなければ又皇帝になるべき人を選んで其の位に卽かせる。皇帝は殆ど人民の選ぶが儘になつてゐる。それで佛蘭西では皇帝も大統領も、只人民が自由勝手にする機關になつてゐる。隨て此の國の憲法の原則は、主權を民に在りとし、皇帝、大統領は機關なりといふ理論の上に組立てられたものであつて、所詮我國に適用すべきものではない……」（金子伯講演速記）。

この外、百耳義、希臘の憲法も亦、國民が先づ之を制定し、外國より君主を迎て、君主は之を守ることを宣誓してなつたものであるから、（「法制經濟大資料」）勿論其の君主は人民の機關であつて、我國の歷史とは全然その趣を異にするのである。

「選擧肅正」、「國體明徵」の二つは、我が國家の運命と國民思想の盛衰消長に關する死活の大問題である。私は憲法も法律も知らないが、斯道權威者の說に據りて大要右の如く述べ、お母樣達の參考に供しておいた。諸姉も亦益深くこれらのことを研究して、修身教育の大本を確立せねばならないと思ふ。

小學校內でも、總代とか級長とかを選擧することが屢行はれ、その際、野心ある兒童は、學友に對して、或は物品を與へたり、腕力に訴へなどして、自己の選擧を强要したりすることは敢て珍らしからぬ現象だと聞いてゐる。若し利益や威嚇の爲に、不當の人物を要地に置くことがあつたら、校風を害し、校名を傷くること、果して幾何であらう。府縣會や帝國議會の議員選擧は學校選擧の大規模に行はれるものに外ならない。從て兒童の生活に卽しつゝ、社會的道德を訓練することも敢て不可能ではないのである。

私共は、政黨や議員の墮落を咎めるけれども、投票賣買などは、選擧者自らが利己を圖ること
であり、自ら利欲漢であり賣國者でありながら、政黨や議員などのそれを責めるのは、誠に汚な
い詞ではあるが、めくそがはなくそを笑ふ所以である。のみならず、候補者に何萬、何十萬の運
動費を使はせるが爲に、彼等はその埋合せとして、利己主義を圖るの必要に迫られ、習ひ性とな
つて彌〻益〻人格を墮落せしむる譯で、其の責任の一半は私共選擧者も亦之を負はねばならない
のである。尚又、親戚關係とか、恩義あるが爲に、技倆も識見も人格もない、惡候補者を選ぶが
如きは、私情の爲に公權を行使する所以であり、國家を個人の犧牲に供する點に於て、前者と何
等擇ぶ所がないと思ふ。

犧牲精神の發揚と利己心の抑壓

私の學校で、本年六月十七―二十二日を「勤儉週間」としたが、勤の方面では、家庭のお手傳
をしたといふのが一番多い。そして私共は、兒童の手に成れる「週間日誌」を調べることに依り
て、お手傳の動機を大體知ることが出來たのである。Mといふ六年生女兒は、その動機として次
の諸箇條を列擧してゐる。

一　弟をお風呂に入れてあげました。
二　お手傳をすることが嬉しかつた。
三　お母樣にほめて頂いて嬉しかつた。
四　一番お手傳ひのしたいのは、臺所のお菓子作りです。

前揭の一は、弟の淸潔の爲、母親の手を省く爲といふ利他的要素が勝つてはゐるが、弟と戲れ
ながら、賑かに共浴するを樂しむといふ利己的要素を混入してゐる。其の他二、三、四は何れも
利己的要素である。（尤も、精密にいへば第三は結果であつて動機ではない）。
前述の第二以下を利己的動機と、私はあつさり言つて了つたが、此の種の利己心は可憐無邪氣
な許りでなく、自己發展（自我實現）への憧憬であつて、其の實、貴重な要素である。斯樣な利
己心が他日利他的行動にまで展開することは想像に難くなく、利他を自らの內に包藏する利己心
と言へるであらう。

名は忘れたが、米國の一學者は、兒童の利己心は未熟な林檎の苦味に比すべきもので、月日が經つと、その同じ要素（苦味）が甘くなるのだと言つてゐる。この意味に於て、この種の利己心は其の實貴い要素であるから、妄りに干渉することなく、事情の許す限り自由を與へて、その發展を助長すべきものだと思ふ。

凡て利己心、殊に子供のそれには二種類あると思ふ。一つは利己に終始するもの（何時迄も利己で終るもの）と、後に發展して堂々たる利他的行爲となるものとがそれである。前者は最も好ましからぬもので次章の終りに述ぶる、口答の第一原因をなす、所謂「我が儘」は之に屬する。

既述の如く、兒童の利己心は林檎の苦味であるが、それが後日の甘味となるが故に貴いので、苦味其のもの、利己心それ自身は何も貴いものではない。そしてこの利己心は、家庭に於ても一般社會に於ても、最高の道德たる犧牲心の强敵であるから、私共は注意して之を抑壓せねばならない所である。

利己心の抑制

利己心は實に、人類一般の最も根强い本能である。收賄・瀆職事件などが演の眞砂と絕えないのを見ても明であらう。

今日獨逸では、フイヒテに返れと絕叫されてゐる。フイヒテは大那翁の軍がイエナに進擊した時、敵軍包圍の眞只中に於て、「獨逸國民に告ぐ」と題して、血の浸むやうな慷慨演說をなしたことは、餘りにも有名な話である。彼の演說內容は次の三項に分つことが出來る。

一　獨逸を滅亡の域に沈めたのは何人であるか。それは獨逸人自身であり、その利己心である。

二　之が救濟は斷じて他力に依つてはならぬ。只恃むべきは汝（獨逸人）自身の自力である。

三　凡ての獨逸人が、獨逸人（眞正の獨逸人）になれ。

といふのがそれである。

フイヒテの語中、「獨逸人」を「日本人」に置き換へてもやはり妥當であらうし、それだけ

又、利己心の跋扈が、古今・中外を通じて、人類の弱點たることを示してゐるやうである。修德を志すものは先づ、利己心の壓抑を圖らねばならぬ。そして、修養は凡て努力の結果であり、次節、口答の研究、第一の終に述べてある、ゼームスの修養法に從つて、少しづゝでも毎日斷えず向上して行かねばならないのである。

以上修身教育の理論を終つた。今之を要約めて見ると、

一　家庭は愛情が主となつて、人類を一體たらしむる原動力養成の地盤である。

二　日本の國家は、家庭の延長であり、擴張であり、事實、又あらしむべきである（理想）。

三　日本精神は前項の理想實現に邁進する努力であり、之が爲には、國民相互が犧牲し合ふといふ覺悟がなくてはならぬ。斯くして、

四　日本精神の精髓は犧牲心である。

五　犧牲心の短所は、歐米に於ける個人主義の權利思想に依りて補はれねばならぬ。

六　立憲君主政治は此の思想の發展を助けた。

七　立憲政治完成の爲に選擧を肅正せねばならぬ。

八　議會や內閣等は、天皇の大權發動を補佐する機關たるに過ぎない。

九　天皇機關說を排擊して國體の明徵を圖らねばならぬ。

一〇　犧牲心の正反對なる、利己心を抑壓すべきである。

第二節　修身教育の實際

前節に於ては、專ら修身教育の理論を述べたのであるが、次にはいよ〳〵その實際論に進入しようと思ふ。

實際論の大要を豫め一言しておく。

1　研究資料として、我が女子大學附屬豐明小學校五年生五十二名、六年生五十一名の手になれる事實の記錄を用ひた。

我校では、地久節（三月六日）を中心として、前後一週間を「母の週間」とし、その間兒童は孝養を勵み、母親は子女を愛撫することになつてゐる。

「お母樣」に關する記錄（本研究の資料たる）は「母の週間」の直前に書かしめたものである。

2　劈頭に、五・六年生の記錄を、各一點つゝ全文を掲げて大體何んなものであるかを示し、あとは記錄全部を分類して、必要な部分だけを摘出した。

3　分類大要

お母樣の子女に對する根本道德な母性愛とし、それを分析することによりて、色々の枝に分れるといふ風に分類排列した。

第一、母性愛が學習指導に現はれて、

1　直接に學科を教授し指導するもの。

2　直接に教へはしないが、間接に學習を容易にし、快適にし、奬勵することによりて之を助成するもの。

第二、子女を送迎して、注意を與へたり痛はつたりするもの。

第三、德育の一方法としての「デー」及週間教育を指導すること。之は一般社會及學校のそれ等に共鳴して行ふことを主とし、各家庭が特別に「何々デー」「何々週間」を定むることも不可能でないことを述べてある。そして此の項の條下には、デー及週間教育の取扱法を詳述しておいた。

第四、感恩。此の項目の條下には、子女に對して如何にせば母の愛を感謝するかの實際的事實をあげてある。

第五、教訓を與へる機會や方法を適當にすると、效果が如何に大なるかを兒童の記錄に基いて述べておいた。

第六、感化の意義及效力を述べてお母樣の注意を喚起してある。

第七、口答（長上に對する抗辯）の研究

其の原因が本人自身にあるものと親・兄弟等の他人にあるものとに分類して、其れの防止法を述べておいた。

第八、賞罰の意義、原理及方法を述べておいた。

以上何れも單なる理論でなく、一つ〳〵、兒童の作製せる、正直な記錄に基いたものである。

（一）お母様

五年生　K・K

お母様のほんとうのありがたさが　この頃になつてつく〳〵胸にしみ込む……勉強のこと、洋服のことから、毎日の食事、おべんとうのことまで氣をつけて下さるのも、お母様だ。家には明けて三つの良子がゐる。親切にしてくれる女中は二人ゐるが、やつぱり一番好きなのはお母様だ。片手で良子を抱つ子しながら、私達のことまで何かと心配して下さる。いくら女中がおいしく詰めてくれるお辨當でも、やつぱりお母様の方が幾倍も〳〵おいしいのも、お母様の溫い〳〵お心がこもつてゐる爲ではなからうか。病氣の時など熱つぽい目にうつるのは、夜中、まんじりともなさらず、私のことを案じて下さるお母様であゐ……。

朝、出がけにきつと「電車の乘り降りに氣をつけて、試驗の時はおちついてしつかりやりなさい。はな紙は、ハンケチは、忘物がないかよくしらべて」と、毎日くりかへし〳〵おつしやつて、玄關まで見送つて下さるお心づかひが、それは〳〵嬉しくつて堪らない。御用にお出掛けの時でも、私が歸へるまでにきつと歸つて下さるお母様に、もう決して我儘を言はないやうにしよう。スカートが長いといつて惡い顏をしたり、お八つが少いことで寢るまで怒つてゐて、お困らせしたりはしないやうにしよう……。

（二）お母様

六年生　N・H

お母様、私に取つては大事な〳〵お母様、貴いお母様。私はこれから死ぬまで一生懸命孝行をつくさうと思つてゐる。朝は早くから起きて學校のことを心配して下さる。朝遲くなると、大變心配して、「早く〳〵」といつて手傳つて下さつたり、急いて出て行かうとすると、「怪我せぬよう氣をつけて」とくりかへしおつしやる。

あとでは私の着物を縫つたり、洗濯して下さつたりして中々お世話しい。そこへ、私、弟などが歸つてくると、お忙しいのも忘れて、「さむかつたでせう」と私達のお話相手になつて下さる。「今朝はお遲刻しなかつたの、よかつたね。明日は早く起きなくては」と、まだ今朝のことを心配してゐて下さるのだ。かう思ふと、ほんとうに私は朝れぼうだ、今度からきつと〳〵早く起きて御心配をおかけしないやうにとつく〴〵思ふ。そしてお話をしながら暖い紅茶にミルクを入れて、私と弟とに下さる。今度は弟が口を出して、「今朝のお辨當、とてもおいしかつた」などと話をすると、お母様はさも嬉しさうに、「そりやよかつたわれ。明日もおいしくしてあげようれ、さア紅茶おのみなさい」お八つがすむともう夕御飯のお支度をお始めになる。おかずをいろ〳〵に變へなくては駄目だしと、色々と毎日のことを、考へて下さるお母

様。その子供としての務めをどうしてもやり通さなくてはならない……。

と述べて、子としての務めは、第一勉強、第二兄弟喧嘩せぬことをあげて文を結んでゐる。

愛が愛を呼ぶ、子供の孝行は無償では買へない。愛すればこそ孝行もするのである。不孝の責任は、一部分（大部分かも知れない）その親にあることを、お互に注意せねばなるまい。

前二兒とも、今後孝養を盡さうと固く決心してゐる。此の決心は頓て弛み、或は忘られてしまふに極つてゐるが。そしてその救濟法は段々述べて行く積りであるが、兎に角、この決心する一刹那は、子女の良心に何等かの好影響を及ぼさないであらうか。親たるものは此の決心を培つて行かねばならない。

（一）の文、子供の出發當時に、毎日々々同じ事を、諄々と言ひ聞かす（鼻紙は？　ハンケチは等々）といふと、却てうるさがるやうにもなるから、（二）の母親のやうに、怪我せぬやう、氣をつけてね……のやうに、アッサリいふのが却てよいやうである。然し、子供等が歸宅する迄は、外出先から必ず歸つてゐるといふ氣掛は實に貴い。

（二）の文、「明日は早く起きなくては」と獨語のやうにいふお母様の一句は、口を酸つぱくして早起を促すよりは遙かに效力がある。

臨立に變化をつけることは、家族の食欲を唆る所以であつて、體育上特に大切である。殊に夏季に於て必要だと思ふ。

學習指導

（母親の子女に對する德目は、母性愛の一語に盡きてゐる。この一大源泉よりして、以下の諸項が流れ出る）

學習指導には、母親が直接に教へるのと、間接に助けるのと二つある。段々上級生、上級學校生徒になつて、母親の直接教授が困難になる場合でも、間接の助勢は、何時までも、大學學生に對しても行ふことが出來る。

（三）お母様は算術の分らないのがあると、すぐ教へて下さいます。……應用問題の一番も直きに出來ました。（六年S・T）

（四）次のお試驗の時は、御自分の勉强のやうに、熱心におさらひをして下さる。（六年K・K）

（五）算術の下手な私を、手を取るやうに、一生懸命教へて下さる。（六年M・Y）

（三）の「すぐ教へて……」は、詞が簡單で分らないが、注入的にアッサリつぎ込んで了つてはいけない。ゆつくり時間と心力とを費して、暗示を與へながら、子供に考へ出させるやうにすべきである。

（六）讀方のわけが分らない所をお問きすると、お母樣は、「字引を引いて御覽なさい」とやさしくおつしやつた。（六年M・T）

此の際にも若し必要ならば字引の引方を指導し、引いた上で、色々な譯語が出て來るに極つてゐるから、何の譯語を取るべきかを、母親自身も一緒に研究するやうな態度で相談的に出るのがよいであらう。「お母さんにはチャンと分つてゐるが、あなたは何れを採るか」といふ風な態度に出ないで、「どれがよいかなァ」といふ風に、一緒に考へると、子供の方では幾分競爭氣分になり、緊張した態度になることと思ふ。

（七）私が何か分らないと、分るまで教へて下さいます。私が餘り分らないと「もう宜しいからおねなさい、そして明日よく考へなさい」（五年T・T）

頭腦の疲れた時には止めさせる方がよい。

二學年の一兒童は次のやうな綴方を書いた。

（番外）コノアイダノ日ヨウ日ニハ　オトウサマト　イツショウニ　ウエノノドウブツエンニイキマシタ　ソシテワタクシタチハ　タヌキノハウエイキマシタ　ソシテ私ハ　オトウサマニカウキキマシタ「ネエオトウサマ　ナゼタヌキハ　イマ　オナカテフクラマセテ　イナイノ　ネエオトウサマ」ト　キキマシタ　スルトオトウサマハ「ソレハ　ヨクカンガヘルトワカルカラ　ヨクカンガヘテゴランナサイ」トオツシヤイマシタ　ワタクシハカンガヘマシタケレドモ　ワカラナイカラ「ワカンナイ

「八」トイヒマシタ。

お父様のこの答は、（學習指導者としてのお父様のこの答は）適當であらうか。お父様は其の實、答に窮したから、よいかげんに胡麻化したのではあるまいか。

問者は恐く、例の「狸の腹鼓」（狂言の一つ）を想ひ出してかう訊いたのであらう。この狂言の筋は、或獵師が狸狩に出た時、女狸が尼に化けて現はれ（雌は女に、雄は男に化けると言ひ傳へられてゐる）て、殺生の罪深きことを說く。獵師は大に悔いて此の殘忍の業を思ひ切らうとしたが、尼と別れ際に、頻りと獵犬が吠えるので、さては此の中狙ふ女狸と感づきて、手取にせんとしたが、切に命乞ひをするので不便になり、狸の腹鼓を聞かせるなら望みに任せると言ふ。狸は拍子面白く打つて聞かせたが、獵師は惜しくなり、矢をつがへて追ひ回はしたけれども、終にその影を見失つたといふのである。

お父様の立場から言へば、若し此の故事を知つてゐるなら、單なる昔話としてこの大要を話し若し知らなかつたのであるなら、狸の腹がふくれるといふのは單なる昔からの傳說であることをアッサリ言つて退ければよいのではあるまいか。兒童の質問を曖昧不得要領に處理すると、相手の不滿を買ふ弊がある。相手が幼年であればある程、非眞理でもよいから、理解し得る程度に說明しておけば澤山だと思ふ。地震と雷の理由を鯰と鬼の太鼓だと說くのは、何時、誰が案出したかは知らないが、巧妙なものだと、私は非常に感服してゐる一人である。

學習助成（間接指導）

（八）夜がふけて寒くなると、綿入を出して下さつたり、火を澤山持つて來て下さつたり、足あぶりに火を入れて下さつたり（六年K・I）

中々圖畫が畫けなくて困つてしまつた時も、お寒いのに、二階からおりていらつしやつたりしては「綿が出來次第お休みなさい」とやさしく詞をかけて下つた。この時から私は勉强を早くするやうになつた。（前同人）

又私達の勉强部屋は、お母樣が私達の爲に、お父樣に御相談して、造つて下さつた結果である。（前

同人）

右の如く、直接に教へないでも、勉強を容易にし、慰撫し、奬勵するのが、間接指導である。

子供室の特設は殊に望ましい。閑靜な勉強室と、自由な勉強時間とを與へられる子供は幸である。私は二十數年前、市内某小學校の一訓導先生と協同して、『子供の口答』問題を研究したことがある。そして「口答」は、子供の勉強最中に、用を命ずる場合に發せられることが隨分多いのを發見した。卽ち、「これが濟んでから」などと言つてなか〳〵立たない。今此のお母様は、子供室迄與へる位だから、無論自由の時間も與へたであらう。從て口答の機會をも餘程減じ得たことと推測される。

人間には『完成欲』といふものがあつて、仕掛けた仕事の一段落をつけたいといふのが人情の常である。此の貴い欲望が遮られると、口答もしたくなる。無論火急の際には、勉強最中にでも使役する必要がないこともない。そんな時には「すまないがこれ〳〵だから急いで行つて頂戴」といふ風に、縱令母子の間でも、相當の禮儀を以て臨むならば、口答も少くなると思ふ。所で、

今、私の學校でも、口答は可なり澤山あるが、勉強妨害に基くものは殆ど皆無で、五・六年生、一〇三名中で、「今、勉強してゐるからいやよ」（五年K・K）といつたのが、只つた一つ見付かつた許りである（我校の家庭では、勉強をして貰ひたがつてゐることが分る）。詰り子供には、自由な勉強時間と、願はくば又、子供向にしつらへた、閑靜な子供部屋が與へられたいものである。此の際注意すべきは、

（九）　やつと机に向つたと思つても、取りかゝるまでののろさ。お机の中をいぢくつたり、外の方をぼんやりと見たりして、やるまでには二十分もかゝる（五年S・T）

といふ風に、時間を徒費するものも少くはないから、監督しない振りをして、警戒を怠らないやうにすることである。

（一〇）　私も、お部屋に行かうとしたら、お茶の間のテーブルの隅に新しい雜誌がのつてゐた。でも勉強してからと思つて、算術のお宿題をし、讀方を始めた。お母様はこちらを見ながら裁縫の針を動かしていらつしやる。

とあり。

母親が勉強する子の側についてゐるには二つの動機があるやうに思はれる。一は、殊に夜間には、子供の辛苦に同情し、之を慰撫する積りでのお附合であり、温い心から來るものであり、他は監督者の格で、冷い動機から來るものである。若し第二であつても、第一の如く裝ふ（語弊があるかも知れないが）必要があらう。

引用文中に雜誌のことがあつた。東京の子供が「御本」といふのは、雜誌とか、課外讀本などを要するに、娯樂的讀物の意味である。之に恥ると、所謂「お勉強」（教科書研究）を害するから、相當に監督を要する。「御本は土曜日になさい」と警告した母もある。

娯樂本の讀破は遊戲の一種で、男兒よりも女子に多く、劣等兒よりも優等兒の方に多いのであるから、方法如何によりては無害有益化し得られるのである。只その選擇を嚴にして、適時に讀ませることにせねばならぬ。

（一一）此の間の地理のお試驗の時、夜、十二時までもおさらひをして下さつた時も、お部屋を暖にしお菓子やコーヒーまでも出して下さいました。（五年Y・O）

右は直接・間接の兩指導を含んでゐる。

（一二）あの楠公展覽會は歷史的のもので、歷史の不得手な私に、少しでも歷史の分る樣にして下さらうとして（お母樣が）見せて下さらうとした事を、本當にありがたいものだと感じてゐます（六年C・A）

右は間接指導の好適例である。

送　迎

寒暑をいとはず、來る日も〳〵學校へ行くのは、子供に取りては唯一の大仕事であるから、十分之を慰撫する積りで、母親は必ず送迎すべきものと思ふ。

（一三）「ただ今」、「おかへりなさい」と、たつたの一言でも、お母樣のお聲を聞ければ、何となく元氣が出て來るのです。（六年H・T）

（一四）おうちへかへりて、お母樣のこしらへて下さつた、燒だてのおいしいお菓子に、温いお茶や林檎

などを頂きながら……私は今日學校であつたこと、途中でのことなど、お母樣にお話するとお母樣は、ニコ〳〵と面白さうに聞いて下さる。又今日のやうに、オートバイとマラソンの人がせうとつしたやうなかはいさうなお話をすると、涙をためて心配していらつしやる。（五年M・Y）

辨當のベコ〳〵腹に先づ茶菓を供して、當日中の出來事に、破顏微笑しつゝ耳傾ける。何たる美しい光景、全然小說のやうである。可哀相な出來事に同情の涙を浮べる、これが又情操教育上に好影響を及ぼすであらう。尤もヒステリーや神經衰弱の爲、常習的に涙脆いお母樣であるならば知れない。

（一五）私はこの大切なお母樣が、嬉しさうなお顏で（學校から歸つた時）私の顏を見て下さる時程嬉しいことはありません。學校や途中で、ちよつとした面白いことがあると、まるで寶でも拾つたやうに持つてかへり、その倍も〳〵大きくして話し、お母樣の面白さうに聞いて下さるお顏を見るのが樂しみですわ……（六年N・I）

（一六）忘れもせぬ三年前の十二月廿三日だつた。私が鼻血を出したとて、耳鼻のお醫者樣へ行つた。雪が降り、北風が吹いてとても寒い日だつた。いつものやうにお醫者樣へ行つたかへり、私は電車をおりた。お腹はすくし寒さはひどい。私はオーバーにくるまりながら、こほつた道を歩いた。北風が首筋をなでる。と、私の方へ近よつて來る人がある。「あつ！　お母樣だ」と私は急にぼーつとあつくなるやうに感じた。この寒いえき（驛）に、どの位待つてゐて下さつたのか知らと思ふと、お母樣にとてもすまなく思つた。「すゐ分おそかつたわね」とやさしく言はれると涙が出た。

電車の中や停車場（停留場）で、七時のニュースを聞くことは少くなかつた。えりまきにくるまりながら、お母樣は私を待つてゐて下さるのだ。お母樣は私をかこうやうにして家までつれて言（行）つて下さる……（六年Y・M）

愛は愛を呼ぶ。感謝の念は頓て孝心となるであらう。

訓育の方法

一　週間教育

現今では、學校は勿論、一般社會でも、六四齒デー（六月四日）、蠅取デー、幼兒愛護週間、

結核豫防週間、運動週間等々のデーや週間が行はれてゐる。各家庭に於ても之に共鳴して嚴重に實行するのがよいと思ふ。

私の學校では、デーや週間に際して、日誌や感想を書かせるのを原則としてゐる。本年に於ける「母の週間」の直前に、次のやうなことがあつた。

（一七）「私のお母樣」といふ題で、お書きなさいと（先生から）言はれて、今始めて、お母樣のありがたさをしみ〴〵感じるのだつた（五年N・I）

斯く感想或はそれに類似したものを書くことそれ自身が、非常な效果を齎らすことは、右の引用文を見ても略明かであらう。

感想や日誌を書かせると、後に詳述する如く、兒童に反省の機會を提供し、反省は後悔、告白懺悔となり、最後に改善を決心せしめる。無論私共は一旦決心しても、直に其の通り行へる程、意志行爲は無造作なものではないが、其の悔悟し、決心する刹那の神々しい氣持、良心が極度に覺醒して、自分の醜い姿を淺猿しがる、一刹那の心理狀態が、陰に陽に私共の道德生活に及ぼす影響は頗しいものであると思ふ。曾子は「日に三たび我身を省る」と言つたが、三省の三は三度の意ではなく、幾度も〳〵の義であることは何人も知る通りである。修養に志す者は此の反省に努めねばならぬ。

「何々デー」或は「何々週間」は、各家庭各別に設けることが必要であり又可能でもある。本人（兒童）、父母、祖父母等の誕生日、祖先の命日、年末、冠婚喪祭の前後等々に、一定の日或は週間を定めて、子供は勿論、願くば大人も日誌を書き、其の期間終了の直後に、讀合せ會、坐談會やうのものを開催し、茶でも飲みながら、伸んびり、くつろいで語り合ひなどすると、有用な效果をあげ得るのではないかと思ふ。

（一八）　此の間の水曜日に、先生が「何か自分でしようと思ふことを一つきめて、此の週間續けてごらんなさい」とおつしやつた。その後、先生と御一緒に、皆で校庭を見回はつた。其の翌日、お教室の後に紙屑が紙屑箱からはみ出してゐたのを、誰かがふみにじつてあつた。「きたないなア」とは思つたが、直ぐ拾つて入れておいた。あとで、ほんとうにいいことをしたと思つて、嬉しかつた。小さなことでも

白分からして見るとほんとうに樂しみなものだ。それからは、お机の下に落ちてゐる小さな紙切でもよく氣がつくようになつた。只一つばかりの紙屑のために、きたならしく見えたその邊が美しくなるのである。今は努力していいことをしようとしてゐるけれども、今に努力などしなくとも、どうでもせずにあられなくなると思ふ。さうなるまで私は一生懸命續けよう（五年A・T）

（一九）運動場の紙屑箱から紙屑ははみだしてゐるし、落葉は遠りよなくちらばつてゐる。通用門の玄關（裏玄關）の下駄箱から靴袋の紐がぶら下つてゐる。傘がらんざつにおいてある。洗面所にはバケツが轉がつてゐたり、水道の水はだしつぱなしになつてゐる。どこを掃除したらよいのであらう、けんとうがつかない。やうやく玄關の前に定めた。早速箒とピンセット（紙屑・落葉などを挟んで取る大きな鋼鐵製ピンセット）を持つて來て掃除を始めた。こゝがきれいになれば他が又きたなく目立つ。又そこをやれば、あつめた所のごみがちる。幾らはいてもきりがない。八田の葉が澤山落ちてゐる木の下にもぐり込んで、一二枚づゝつかんで出て來て捨てる。あゝ、やうやく少しきれいになつた。皆さんはどこをやつていらつしやるのだろうと考へながら、又根氣よく續けた。暫くするとピー（始業合圖の笛聲）だ。もうピーだ。ほんとうにはアやさん（女小使）が憎らしくなる。又時計もうらめしい。だが仕方がない次の遊び時間も續けて、やつときれいにした。あんなに寒かつた體も段々に暖くなる。働くといふことは本とうによい事だ。これが何時までも續いたら、自分としてはえらいことだ。これからも根氣よく續けよう（五年M・F）。

（二〇）古谷さんと薄暗い洗面所へ行くと、氷のやうな水を見たせいか、そうつと寒くなつた。雜巾は、二・三枚ちらばつてゐるし、葉つぱや花などこぼれてゐて（生徒が教室用活花をこゝで挿す）顏をそむけたいようだ。壁には雫汁がしみてゐるし、水道の栓は雫と油で眞黒だ。婆アやさんから磨粉をもらつて來て、早速雜巾につけて磨き出す。白い磨粉が段々黒ずんで、プクノ〳〵泡が出て來る。二人の手は休まず動く。栓（眞鍮製）はピカ〳〵光つて來る。「壁も磨きませうね」と目で話しながら手を着ける。一・二年生の方が來て、珍らしさうに眺めて行く。六年の方がいらつしやつて、「御苦勞樣」と言はんばかりに、ニコ〳〵笑つて行かれる。又「何してゐるんだろう」と冷笑して行く方もある。心の持ちやう一つによつて、人の行爲がかうもちがつて見えるものかと、つく〴〵思つた。十幾つかの水道の栓がピカ〳〵光つてゐる。丁度其の時ピーが鳴つたので、手早く道具をかたづけてお庭に走り出た（五年Y・M）

（二一）私は、五年生の、お室のお花は、ばかにきれいな時があるかと思ふと、何時までもきたない枯れ

かゝつたお花をさしてある時がある。お部屋の隅の方に、一本でもきれいな、お花が挿してある時は、目に見えなくても何だか氣持がよい。又色々のお勉強も頭に入る。それで私は、お教室のお花が何時も〳〵枯れないやうにしようと決心した。

第一日、今日は實行のはじまりの日だ。朝、五年生の誰も來てゐない頃行つて、もう今にも花びらの落ちさうになつてゐた菊の花と、お家にあつたばらの花と、さしかへておいた。皆さんが「あら、きれいなばらね、どなたがかへて下さつたのでせう」なとゝおつしやる。「私よ」とのどまで飛びでさうなのをおさへ〳〵て、第一日は人に知らさず、無事に終へた。今日は其のおかげか晴やかな氣持で、勉强がよく頭に入つたやうな氣がした。

一週間立つた水曜日、皆々で秘密の實行を言ひ合つた。お庭を掃く人本を片附ける人、など色々あつたが、お花の世話する人はないので、私も「皆さんの眞似をしようかしらん」と思つたのであつたが、先生が「あなたはよい所に氣がつきましたね」とおつしやつたので、何となく嬉しく、又やる氣になつた。先生が、よいくせをつけるようにと、よいことを教へて下さつたのだから、此の實行は何時までも〳〵つゞけようと堅く心にちかつた。（五年K・K）

右は秘密に善行をしたのであるから、「陰德週間」と名づけてよいであらう。

勤儉週間の日誌

一、日曜日＝昭和十年六月十六日

朝早く起き、お庭を一回りはきました。これは朝早く起きてお庭へ出ると、體が元氣になるからと、お母樣がおつしやつたので、一生懸命致しました。其の時お母樣にほめられました。

二、月曜日＝六月十七日

前と同樣。それから學校から歸つて來てから、お母樣や女中達が大變いそがしさうだつたので、お茶の間をきれいにお掃除し、お夕飯のお支度もしました。これは私が勉强がすんで、雜誌を讀む間に一寸やつたものだが、私は眞劍にやつたつもりです。お母樣も女中達も喜んでゐられるのを見ると、私は嬉しかつた。

三、火曜日＝前と同樣。

四、水曜日＝夜、お床を引くお手傳をしたので、お母樣はすぐ御自分のお仕事に手を出すことが出來ました。これは私の面白半分にやつたのですが、お母樣はとても喜んで居られました。

五、木曜日＝お床ひき。今度は一生懸命にしました。お母様は喜んで居られました。

六、金曜日＝お手傳はなにもしませんでした。でもお母様には、私が勉強があるといふことが分つていらつしやるので、だまつてゐらつしやいました。私の心持はよくありませんでした。

七、土曜日＝イ、窓ガラスふき、ロ、廊下ふき、ハ、水まき、ニ、夕飯のお支度、ホ、庭はき

私はこれをした時、私は心から致しました。金曜日の取かえしに私はたくさん致しました。お母様は大へんお喜びになつて下さいました。

私はこの勤倹週間だけお手傳をするのでなく、これからは毎日しようと思ひます。けれども今週は試驗ぜめですから、夏休にたくさんお手傳をしようと思ひます。いつまでも〳〵このことを忘れぬやうに致しませう。

お母様が御手傳をしていけません等とおつしやる時は、私が三時間位勉強しつゞけて、やうやく終り「手傳はせて」といふと、少し運動していらつしやいとおつしやつてやらせて下さいません。私は少し花畠の方へサンポしてかえつて来てやらせていただきます。

デー教育、週間教育を課して、その間の感想や日誌を書かせると、之が爲に反省の機會が與へられ反省は後悔、告白、決心等を喚起して、修養の機會を提供されることになるやうである。

後悔・告白

(二二)　お母様は皆私を立派に育てたい爲に(お小言を)おつしやつて下さるお母様を、まゝ母見たいなと思つたこともある。私は何て馬鹿だらう……欲しいものがあつたりすると、大てい、ためになるものは買つて下さるお母様なのに……(五年H・I)

(二三)　朝は私達の目のさめぬ内から起きて水仕事をなさる。私が寝坊のくせのつかないやうにと(お思ひになつて)起して下さらないのに、少し起きるのがおそくなると、私はお母様のせゐにして、一日中ふくれてゐる。(五年N・S)

(人から起されないで、自分から起きるやうにと、私の學校では言ひ聞してある。)

(二四)　叱られては怒り、御注意されては怒り、「こんなお母様なんか早く死んでしまへ……」と思つたこともある私、あゝもつたいない(五年M・H)。

此の子（M・H）が六年の時には次のやうにかいてゐる。

（二五）御病氣のお母樣なのに……マスクの切など、私の出せるものまでも、御不自由な御懐で出して頂いたりするのに、何か氣に入らないと、プーとほほをふくらまし、お障子やからかみなど、力一ぱいにしめたりして、お母樣をおどかしてしまふやうなことも度々です……末つ子だ〳〵と思ひこんでゐるのでお母樣に對しても、まるで姉妹のやうな口のきゝ方をしてゐるので、今考へて見ると、本とうに〳〵悪いすまないといふ心で一ぱいになつてしまひます。（六年M・H）

（二六）「お母さんたら、私にばつかり用を言ひつけて、ずゐぶん不公平だ」等と思つたことも珍らしくはなく、お母樣をにらみつけることもあつた。今思へば、なぜあんなことをしたのかと悲しい。おろかであつた私が、自分で自分を責めるようになる。お母樣は、朝、顔を洗ふお湯までちやんとわかして下つてゐた事など思ふと、やつぱりお母樣は不公平でも何でもない。さう思ふと一人で嬉しさが込みあげて來る。（六年H・U）

後悔すると同時に自分の薄志弱行を自覺する樣になる。然しながら、此の自覺は、私の調べた所では、五年生には非常に少く、專ら六年生に多いのは注意すべき事實だと思ふ。

（二七）私には孝行が出來ないだろうと思ひ〳〵詰めて、おふとんの中で泣いたりした……（六年Y・H）。

（二八）……房子は、すまない〳〵と思つてゐても、つい〳〵（口答が）口から出てしまふのよ。……でもこの「つい〳〵」といふのが悪いのね（六年F・H）。

このF・Hは修養法の一つを發見してゐる。修養は元來刻々注意して我儘心を抑へねばならぬものと思はれるが、この兒はこの刻々の克己心といふことに心付いたのである。つい〳〵といふ心の弛みが修養の大敵なることを發見したのである。指導者は此の機を逸することなく、此の貴い萌芽を愛育せねばならぬ。

（二九）一年から六年までの間、「今日は母の日だから」等といふ考を起し、その日だけはよい子供でも翌日はといへば、昨日の事は何處へやらといふ顔つきで、朝、目をさました時から、もう我儘をいふ。「此の次きこそ」といつて、もう五回の母の日も過してしまつた。（六年K・K）

（三〇）私は何時も學校から歸ると、直ぐ剛ちやんと喧嘩を始め、幾度となく御注意を受けたのに、どう

して改められないでせう。今日からはきつと〳〵直すことをお契ひします。（六年M・M）

此の兒は、「何うして改められないのでせう」と疑ひ、然かも其の原因を突きとめないで、改心を契つて居る。言はゞ病源を發見せずして患者の全快を受けあふ藪醫にも比すべく、心細い次第である。惡德の治らないのは、意志が薄弱で努力の足らないのによることを發見せしめて、少し宛でもよいから毎日々々改めて行くやう指導すべきである。

兒童は意志薄弱なれども、必しも悲觀すべきではなく、訓育修養の效果が現はれ初めた實例を左に擧げて見よう。

（三一）私は物にあき易く（自分の短所を知つてゐる）、ゴムケシも半分使ふとすぐ又買ふのを、私がまだ一・二年の頃だつたから、鉛筆とゴムケシが、お化になつてお話をするといふお話を讀んで頂いてから、やつと此の頃（六年生）あきつぽいのがなほつて來た。私の澤山の惡いことを、お母樣は知らぬ間に直して下つた。（六年M・Y）

四・五年かゝつて此の癖が直つた。母親が不屈不撓、然かも少し宛矯めて行つたから、知らず〳〵の內に改まりかけた。親も本人も、氣長く、少しづゝ毎日訓育修養することが大切である。私の友人で、三年かゝつて禁酒した人がある。毎晩用ひる所を隔日にし、三日おきにし、日曜毎に、朔日、十五日に用ひるといふ風にしたさうである。之も結構だと思ふ。

靜かに反省する時には理知が活らく故、自分の弱點がよく分るけれども、實際に面しては（例へば叱られる時など）感情許りが高ぶつて、理知の光が掩はれてしまふ。意志の力を以て此の感情を壓服することが肝心である。少し宛でよいから毎日々々、刻一刻と修養の功を積まねばならぬ。

佛教の「悟り」には、頓悟と漸悟との二種があると言はれる。前者は一瞬にして大悟徹底するのであり、後者は長年月間に、步一步、悟入得脫するのだと言はれてゐる。然し私の考では、頓悟も漸悟で、長い〳〵間の苦心煩悶が、何かの機會に爆發的に效果を結ぶのでないかと思ふ。漸悟なくして頓悟はあり得ないのでないかと思ふ。

小結論

デー教育、週間教育を課し、其の期間の感想や日誌を書かせて見ると、自然と反省の機會を與ふることになり、反省は後悔を呼び、意志の薄弱を自覺せしめる。これ等の心的作用は修德の第一歩であるが、然かもそれが我儘心といふ魔物に妨げられて、盛衰消長はあるけれども、此の自覺を好機として助長を怠らない時は、品性卽ち道德的性質を漸次向上させることは敢て不可能でない。手編のセーターを一目づゝ編んでも、毎日繼續してゐたら、終には完成するにひとしい。そして、上に引用した諸例は、此の期待の爲りでないことの一端を證明してゐると思ふ。

（番外）お母樣は、お成績はあまり氣になさらないが、性質を特別氣にして下さる。「女の子として本當によい子になつてれ。お母樣のお願ひよ」……（六年M・S）

此のお母樣は、本當に我校の「性格教育」といふ理想に共鳴して呉れることを、心から感謝する。

感恩

（三二）ふと目をさますと、丁度四時を打つた所であつた。側では泰子ちやん達が手を出したり、ふとんをけとばしたりしてゐる。そうつとふとんをかけてやり、眠らうとしたが中々眠れない。天井の板の數などを數へてゐると、スーツと障子のあく音、どろぼうかしら……おふとんのすきまからのぞくと、お母樣であつたので驚いた。おまけに炭箱をもつていらつしやる。夜中に、私達のお室へ火をつぎにいらしたのだ。私は何だかお母樣が勿體ないやうな氣がした。（五年T・T）

（三三）私のセーターを編んで下さる時でも、毎日々々一目づゝ編棒にかけて、夜おそくまで、編んで下さる。出來上つて、どこか恰好が悪い所があると直ぐバラ〳〵におほどきになるお母樣。手編の暖いセーター、お母樣の苦心と、溫い眞心の入つたこのセーター……（六年F・K）

右は平時の、次のは病中の感恩。

（三四）忘れもしない四年生の秋、機械體操で手を折り、一月の間入院したのを、毎日々々いやな顏一つなさらず、家から駿河臺まで飛ぶやうにしてお見舞に來て下さつたお母樣、つきそひの看護婦さんまで

もぴつくりした程通つて來て下さつたお母樣を、私はどんなに感謝したであらう。退院した後でお母樣が「あの時は何だか自分の體ではなかつたやうな氣がした」とおつしやつた。私も本當に御恩がへしなければ……（六年M・Y）

（三五）私の病氣の時お母樣は、枕元で一心に掌療治（てのひらりようぢ）をして下さつた。夜もお休みにならず、私が一寸せきをしても、寒い夜中でも直ぐお起きになり、のどのシップを取代へて下さつたり掌療治をして下さる。私はこの時程お母樣のありがたさをしみ〴〵感じたことはない。（五年Y・N）

獨逸の或學者は、「母親の其の子に對する愛は先天的、本能的であるが、子女の親に對する愛と感謝とは先天的でなく、努力によりて贏ち得べきものである」と言ふ。東洋の學者、特に孟子は「孩提の童（抱きかゝへる程の嬰兒）も猶其の親を愛するを知る」と言つて、子女の親に對する愛慕の念は先天的だといふ。私は兩方であらうと思ふが、西洋學者の主張にも多大の眞理あることを痛感する。詰り、親の愛が足りないと不孝の子を養ふことになる。孝子を得るのはお安くなく、親の努力で贏ち得る（儲ける）といふ說に對して、經驗上多大の敬意を表したい。

子供は自分を圍繞いてゐるものに對して獻身的愛着を感ずる傾向がある。乳母任せにすると愛慕の情は之に轉向し、甚しきは玩具や飼犬を生みの親以上に愛することもある。某伯爵は「華族の子は親の顏を見ると泣出す」と憤慨したのを直接聞いたことがある。

愛は愛を呼ぶ、子女を愛することが孝を敎ふることになる。

愛は感情であつて、愛情の感受性は人により大に異る。大きな親切に對して僅しか感じないものもあれば、一寸した情けでも強く感銘するものもある。獨逸のケルシエンシュタイナーといふ敎育學者は此の感受性を精かにすることが感情敎育上大事なことだと言つて居る。

支那の范睢といふ人は、「一飯之德も必ず償ひ、睚眦之怨も必ず報いる」人であつた、別言せば、一度の食事を惠まれた位の一寸した恩惠でも必ず恩返しをし、眦を一寸釣り上げて相手を睨む程の、小さい怨恨でも必ず仕返へしをしたといふことである。之は感受性が非常に敏捷な方で

ある。睚眦の怨を必ず報いるのは、雅量も寛容性もない、卑しむべき小人物で、かりにも大國民の爲すべき所ではないが、一飯之德必償ふのは誠に結構である。感受性も敏感に失してはヒステリックになつて大變なことであり、其の邊の手加減は誠に六ケしい所ではあるが、他から加へられる些細の好意をも強く印象せしめるやうにすることを原則とすべきであらう。

兒童の健忘性も亦或場合には結構で、叱られてもたゝかれても、直に忘れて慕ひ寄り、友達同志が犬と猿のやうに戰つても、その直後に、「御免ね」「御免なさい」で妥協してしまふのは無邪氣で結構である。一方では覺えてゐて貰ひたく、他方では忘れて貰はねばならぬ。こゝにも千番、一番のかねあひで、大に手練を要し、臨機應變に處分せねばならない所があるけれども、要するによいことには強く感佩し、悪いことはあつさり水に流すやうな大人物の養成を目標とせばよいと思ふ。

教訓

教訓とは、嚴密な（狹い）意義でいふと、倫理道德の理論を說明することである。

小學校の修身教科書には、例話、教訓、格言などがのせてある。下學年程例話が多くて高學年程教訓が多い。『公民の義務』（尋五第五課）、『衛生』（同七課）、『國交』（尋六の四課）、『國民の義務』（同十八・九・二十課）等の如きは、例話の一つも交へてない、純粹理論的のものに外ならない。

小學校で教へる德目は、全學年を通じて分類して見ると、對己道德、對家族道德、學校道德、一般社會道德等　凡ゆる德目を網羅してゐるのであつて、之によりて道德の理論を體系的に教へることが出來るのであるから、そして知識は自然と實行へ向ふ傾向があるから、教訓も無論大切であるが、それ等は大體學校の方へ任せておいて、お母樣はその（教科書の）內容に一渡り目を通しておけばよいと思ふ。

教訓の外に、お母樣に取りて大事な任務が少くとも二つある。示範と感化とがそれである。（段々と說明して行く）。

德育には、拙著『兒童教育學概論』に述べておいたやうに、(一) 口の教育と、(二) 無言の教育と、(三) 無意の教育とがある。教訓は口の教育であつて、專ら理知に訴へるもの、無言の教育は「示範」である。教育者自身が實行して之に做はしめるのであるから、謂はゞ身を以て教へることになる。確か、獨逸のパウルゼンは、「子供は兩親のする通りにするもので、其の言ふ通りにするものでない」と言つてゐる。「家の子はちつとも言ふことを聞きません」と、世間の親達はよく愁訴すやうであるが、それは殆どあたりまへな話で、人間が教訓通りにするものなら、泥棒の子から正直者も造れようし、聖人を養成することも手間隙要らない筈であらう。訓育は教訓許りに依ることが出來ない以上は、示範といふ教訓以上に有效な方法を用ひねばならぬ。

併しながら、無言の教育即示範は、口でこそ言はね、自ら實行することによりて、周圍の者にそれの模倣を強要することになる。

無意の教育即ち感化に至りては、教育しようといふ意志すらない。大人が、其の天成の美質によるか、若くは又修養の極、完全な人格の光によりて、其言行を見聞する周圍の人々に、自然と其の美德が浸み込むこと、麝香が衣服類にたき込まれるのと同樣であつて、薰陶とか薰化とかいふのがそれに當るのである。

教訓の仕方

(三六)「お友達から手工の道具を借りてゐた。どうしたはづみか、肝心な編針が見つからない。五・六日して、「お道具返して」……「あのね、お友達がいこはいお顏で、『今日は何か惡いと思つたことをしたでせう』……心に傷のある私は、太い釘を胸に打たれたやう……只泣きながらあやまつた。『分りましたれ。本當にこれから正直になさい』……お母樣の日にも熱い涙がたまつてゐた。それからといふものは、うそをつかないやうにと努めて來た。私が惡の方へふみ入りかけた時、何時もよい方へつれ出して下さるのはお母樣だ。(五年 J・M)

(三七) お友達とけんくわをしたりすると、お母樣は、「もう少し氣のやさしい子になつてほしい」……

(六年 A・T)

何たる物柔らかな教訓であらう。「……なつてほしい」と、單に希望を示した許りで、命令強迫の意は更になく、あくまで我子の人格を尊重してかゝつてゐる。

感　化

（三八）寒い夜、毛糸を買ふのに、女中を頼まうとすると、「ねえやは書間働いてゐるのですから」……と御自分でお出掛になる……（六年H・O）

（三九）お父様が、會社からつかれておかへりになると、何時もお母様は氣の立たぬよう、頭をお使ひにならぬようなどゝ、細々しきことまで、私の目で見てはつきり分るやうな位氣をお使ひになる。御自分は頭が痛くても、躰が疲れていらつしつても、顏にもお出しにならず、「肩をもみませうか……」（お父様に算術の問題をもつて行くと、お母様の方で一言二言おつしやつて止められる。（六年T・K）

（四〇）お玄關をあけると、急にプーンと酢の香がする。あゝ、お母様はやつぱり覺えてゐて下さつたのだ。一昨日は私のお誕生日、「今日は忙しいから明後日にして頂戴」……今日だつてお忙しいのだ。それに私の爲にお壽司を作り、お頭（かしら）までつけて祝つて下さる……（五年N・S）

感化とは何ぞや。既述の如く、「子供は大人のする通りにするので、その言ふ通りにするものではない」そして示範は、大人が、教育しようとする意志を以て、行動するのであるが、今、一歩進んで、其の意志すらなく、只その人の人格の發露としての一言一行が、それを圍繞せる人々の性行に浸み込む時、之を感化といふのである。（悪い感化もあるが、私は今、主として善感化の方を考へてゐる）。

實例（三八）は母親の仁慈が、（三九）はその貞節が、（四〇）はその誠實（守約）と母性愛とが、それ〴〵子女に好感化を及ぼすであらうと推定される。

實例（四〇）に就ては、特に一言添加しておきたいことがある。ストラッツはいふ、「母と娘との間は完全に誠實であり、其の間に虚言詐僞があつてはならない。一般世間では虚僞や僞善の行はれるのは止むを得ないにしても、母子の間にまでそれ等が入込んではならない。一度詐ることがあると母子は永久に隔絶（精神的に）して、子供の天國は破壊されるからである。若し父母

親が善良なる教訓を與へておきながら、自分はそれを嚴守しないならば、それは一つの虚言である。母親を信ずる時、若き心は最純最美に發展し、母親を信ずることによりて少女は生存競爭上の最強武器を獲得するのである」と。尙又同氏は、實行不可能のことを、母子の間で約束してはならないとも言つてゐる。

同氏は又、別の書物で次のやうにも言つてゐる。『如何にして私は私の子女を教育すべきか』といふ疑問は、次のやうに書き改められねばならぬ。『私が私の子女を教育する爲に、私は如何なる人物にならねばならないか』と。

有名なニーツエも亦、『子供を持つことによりて、兩親は孜々と自らの人格を改善せねばならぬ』と。

詰りは、その人格が出來上らねば、他人を感化することは出來ないのである。

口答

一、原因が兒童自身に在るもの

（四一）今まで何か氣にくはぬことがあるとすぐにふくれて（口答をする）……私はこれから、癪にさはつても、強情を張りたくても、きつと我慢します。（六年S・S）

（四二）うれしい時はお母樣にとびついたり、きげんが悪いと口答したり。（五年K・N）

本人の氣分（お天氣）次第で我儘をするもの。

（四三）惡いとは知りながら、度に過ぎることをすると叱られる。すると私は「なんていやなお母樣だらう。一寸何かすると直ぐ怒るんだもの。叔母樣などの方がよつぽどいいわ」などいふ。その時お母樣は涙ぐんで何もおつしやらない。內心はどんなお氣持であらう。本當に私は馬鹿なんだ。（六年M・F）

隣りのものは香ばしい。明暮一所にゐるお母樣より、時々顏見る叔母樣の方がよいに極つてゐる。このお母樣も、定めしそれ位の辯解はしたかつたであらうが、涙を溜めて默つていらつしやる。隱忍と苦衷とには、心から同情する。

此の兒は、その我儘心からして、口答は更に嵩じて、惡體な抗辯毒舌を敢てしてゐる。（しか

し母親の隱忍は恐く感化を與へるであらう。）

（四四）　私はお母様に叱られるとすぐふくれ、何といはれても默つてゐることが度々ある。（六年S・O）

之は無聲の口答である。

（四五）　私がお母様にすまない〳〵と思つてゐるのは口答です。いくら直さうと思つても直りません。

（六年H・T）

直さうと思つても直らない。其の直らない原因を考へさせて、修養を積ましめばならぬ。詰り努力心の不足といふことが病因であらう。そして人格修養の唯一方法は努力即「ちいやでもおうでも、我慢してやり遂げることに外ならない。子供は口答がしたくなつても、我慢して、いやでも應でも、否應なしにその我儘心（己）を抑へつける、それが努力である『なにくそ』と力んで、心の惡魔をおしつける、それが努力である。子供はよく「どうしても出來ない」といふが、それは『なにくそ』といふ我慢が足りないからである。修養とは斯くして、努力の異名と言つても殆ど間違はないかと思ふ。段々と秋から冬になると、床離れが惡くなるが、何くそで飛び起きるやうにする。（私は此の主義を實行してゐる）。

『善は急げ』

といふ諺は誠によいと思ふ。「溫い寢床を離れること」を善だと思つたら急いで實行する。萬事さうすれば善良な性格も贏ち得られるので、誠に良い格言だと思ふ。

努力心の養成に關しては、米國の心理學者ゼームスの詞程適切なものは殆ど見當らない。

『毎日自ら進んで練習することによりて、努力の能力を諸君の（心の）うちに、活潑に養へ』

といふのがそれである。

『毎日』である。三日坊主は駄目！　私はこれまで、ちよい〳〵、少しづつでよいから毎日……といつたのは、ゼームスの此の詞が頭にこびりついてゐたからである。

次には、「自ら進んで」である。他人から命令や强制さるゝまでもなく、自發的に努力の練習をする。斯くして、少しづつでも毎日努力の練習をすると、終には努力を用ひないでも出來るやうになる。孔子が、

「心の欲する所に從つて矩を踰えず」と言つたのは、此の大自在の境地に外ならない。（何等努力を用ひず、心の儘に振舞つても、其の一言一行が、ちやんと規則に外れないの意）。

ゼームスのあの格言は、大學總長フオーンス氏が、千の（澤山の）教壇（教會の）に說教せられるものと評した程有名なものである。

Keep the faculty of effort alive in you by a gratuitous exercise everyday ……President Faunce says has been preached from a thousand pulpits.

二　口答の原因が本人以外に在るもの

（1）親し過ぎる家庭

（四六）お母樣が、お室を片附けて頂だい（戴）とおつしやると、「弟がちらばしたのに私が片附けるけんりはないわ」……（五年F・H）

（四七）「通子、今朝は寒いからこのセーターをきていらつしやい」、「いやよ、そんなぼろセーターなんか……お姉樣が「ラヂオ服を持つて來て」……「お姉樣には立派に足がついてゐるでせう」とけんかが始まる、「マア〳〵そんなけんかはよして〳〵」とやさしくおつしやるお母樣だ。（五年M・H）

（四八）私は病氣は餘りしないが口答はずゐぶんする。時には（お母樣に對して）どつちが小言をいつてゐるのか分らないことがある。（五年H・F）

以上三つの場合は、家族間に遠慮がなさすぎるのに因るのは明かであらう。現に（四七）のM・Hは、六年生になつて、

（四九）末つ子だ〳〵と思ひ込んでゐるので、お母樣に對しても、まるで姉妹のやうな口の利き方をして本當にすまない……（六年M・H）

（五〇）又、お父樣が御用をお頼みになつても、私は「自分のことは自分でする、とお修身で習つたわ」（五年S・S）

（五一）この間私が中耳炎になつた時、御心配してよく利くせんじ藥をのませて下さつたのが、餘りにがいので、「お母樣の意地わる、こんな藥をのましたから、一生うらむわよ」（五年K・O）

一寸だらしのない家庭とも考へられるが、和氣靄靄たる點、却て欽羨ましい所さへある。親達

の威壓によりて、是等の無邪氣な抗辯を沈默させることは、何でもない業であるが、濫りに木枯の風を家庭内に吹きまくらせてはよくないであらう。只、賞罰論の條下で述べる如く、寛嚴中を得さへすればよいと思ふ。

（2）諄い教訓

以上本人以外に口答の原因があるもの、内（1）家庭の親し過ぎることを述べたが、茲には、（2）母親等が、餘りにも諄々しい教訓を施すこと、別言せば干渉に失することが却て抗辯を速くことを說かうと思ふ。

（五二）お母樣のありがたい御注意をうるさいとさへ思つて「そんなこと位私にだつて分つてゐるわよ」などゝ申しました。（六年T・K）

（五三）毎朝、學校へ行く時、「學校に行つたら先生のお話をよく〳〵聞いてね、それから遊ぶ時はね、騙け回つてね、汗の出るやうな遊びをなさいね。マスクをかけて道を歩くんですよ」とおつしやる。私の小さい時、「道を橫ぎる時はね、右を見て左を見てから橫ぎるんですよ」とよくおつしやつたのを、よく聞いてゐたお兄樣が、そばから「道を橫ぎる時はね、右を見て、左を見て歩くんですよ」と眞似かするとお母樣は眞面目なお顏で私に言ひ聞かして下さるお母樣を、本當に〳〵ありがたいと思つた。（五年Y・S）

（五四）私が朝、學校へ行く時は、必お玄關へいらつしやつて「氣をつけて、一生懸命勉强していらつしやい」とおつしやる。私にはその詞がおせつかいのやうな氣がしていやでたまらない。私には、お母樣のおつしやる詞が悪い方に取れるやうな氣がする。（六年S・O）

子供はよく、「それ位のこと分つてゐる」とか、「知つてゐます」とか言ふ。然し王陽明も言つたやうに、知識には見聞の知と眞知とがある。「何人も虎の恐いことは知つてゐるが、實際噛まれて見なくては、本當の恐しさは分らない」（陽明の例示）。前者は見聞の知で、後者は自ら苦い經驗を嘗めて悟入した眞知である。子供の知は大抵、薄つぺらい見聞の知で、大人のは概して眞知或は體驗知に屬する。此の眞知は教へることが出來ない。自ら經驗し、ぶつかつて見て悟るの外に道がないのである。

母親の中には薄着して風邪ひいて、肺炎になつて生死の境を見たものも少くはあるまいが、子供は幸か不幸かそんな眞知若しくは體驗的認識がない。「そんなぼろセーター……」などいふのも此の爲に外なるまい。大人はそれ故、餘りに急ぐことなく、子女が自ら眞知を獲得するのを待たねばならぬ。少くとも眞知を獲得するやうに導くことを要する。旅をさすのもその一法であらう。眞知は教へられないのだから、かうする外に其の道がないのである。之が爲には、干渉に失することなく、或度迄の自由を與へることが必要であらう。

ルソーやスペンサーの自然罰主義といふのは餘りにも有名な話である。ル氏の有名な例による と、エミールが自分の室の窓硝子を故意に割つた時、別に叱りもせず、默つて放つておく。秋が去り冬が來て、寒くて堪らなくなる。それが罰なので、「惡戲に硝子を壞したりせぬもの」と、しみ〴〵思ふやうになるとル氏はいふ。一面の眞理は確かにある。然し彈丸込めた銃器の玩弄を其の儘放任しておく譯にも行くまい。それが爲に命を失つたら自然罰を受けた譯だが、それでは教育にならない。現今ではこの自然罰の原理を差支ない限り取入れて、罰を人爲的に自然化せよ

といふことになつてゐる。寢坊と遲刻・懶惰と落第との間には自然的關係がある。遲刻・落第が、絶對に惡とも言へまい——一度落第した後（尋三で）其の後主席で通したといふ實例が、しかも私の親戚中にある。

要するに、經驗の少い子供に對し、口から耳へ大人の眞知を吹き込まうとしても、それは斷然不可能であるから、濫りに諄々しく干渉しても、却て口答や輕蔑の因を供するに過ぎないと言ふことを忘れず、只適當に且つ最善を盡して禍を未然に防ぐことにせねばならぬが、それは臨機應變の手練乃至裁量に待たねばならないことゝ思ふ。

（3）杞憂（取越苦勞）

（五五）お兄樣が山登やスキーをやりたがると、とても心配なさる。お兄樣は「お母樣は神經質だな、そんなに心配するからやせるんだ、僕何處へも行けないや」といふ。そしていたづらなお兄樣は、わざと「なだれにあたつて掘出されるのは夏休」などとおどかして面白がつてゐる。お兄樣だつてきつと何處かで親はありがたいと思つてゐるにちがひない。

右にて明かな如く、杞憂卽ち取越苦勞が子女の侮りを買ふ所以だと思ふ。「可愛い子に旅をさせ」といふ諺もある。教育の爲には思ひきりも大切であらう。このお兄様のいふ如く、このお母様は神經質乃至神經衰弱、ヒステリーに罹りかけてゐるのかも知れない。餘りに取越苦勞が甚しくなるのは、心身異常の徴候でもあるから警戒を要する。

小學生、殊に女兒は、口答、無聲の抗辯などはするが、勇敢に揶揄するものは少い。之を敢てするのはお兄様、殊に中學生以上に限つてゐるやうである。お母様もこんな批評や揶揄に遇つた時には、靜に反省して見るのがよい。「負ふた子に教へられる」こともないとは限らないから。

（4）愛情の露示に反感する口答

（五六）お母様は何時も「寢てもさめても××（娘の名）のことばかし心配て」とよくおつしやるので、「分つてゐるわよ」などと口答しましたけれども、今考へて見ると……（六年K・A）

此の口答は「きまり惡るさのてれかくし」でもあらうが、露骨に恩がけるのに反感を生じたとも考へられる。

（五七）お母様は私をこれまでに、お育て下さるのには、どれ程お困りになり、どれ程苦心されたことでせう……でもお母様は其の御苦心をお顏にも現はさず、私が實行出來るまで一生懸命待つてゐて下さることでせう。（六年M・S）

右兩實例を併せ考へると、どちらが奥床しいであらうか。

（5）嫉妬の口答

（五八）お母様〳〵〳〵〳〵と呼びつゞけると、私の心は明るくなつて來る。だが私は何んでお母様に對して不孝をして來ただらう。御注意をうければ怒り、燒もちをやくことがひどい、弟を可愛がつたり、弟が甘えたりすると私は怒つて、お母様を悲しませたり、弟をいぢめてお母様に怒られる「お母様だつて小さい時さうであつたんだのに」と思つたりする。ほんとうに情ないことだ。修身の親孝行な讀んでゐても、普通の人に出來ない程のえらさ。今日、自分のことを考へて反省して見ると、あつい涙が出て來る。

うれしい時にはお母様にとびついたり、きげんが惡いと怒つてお母様を悲しませたり、何でも自分勝手だ。（五年K・N）

「子女に對しては、各その權利を與へ一兒のみを偏愛せざれ」と西洋の某學者は言つてゐる。父親でも母親でも、それ〴〵自分の寵兒を有することがある。一般に言ふと、心身共に自分に似た子女を偏愛する傾向がある。母親に在りては又、最も虚弱な、從て又一番手にかけた子供を愛するやうであるが、それは自然の話である。併し兩親は共の偏愛の情を子女の前に暴露しては ならない。

何の子供でもそれを表面に現はすと否とに拘らず、嫉妬の萠芽を埋藏してゐるから、兩親は其の感情を刺戟すべきではない。

各兒は、又微妙敏感な正義の念を抱き、自分が疎外され、冷遇されることを、大人以上に感ずる。「末つ子はいいね」などと、偏愛される兄弟を羨んだものは、今度の調査中にも可なり澤山あつた。

可愛いゝものを愛するのは自然の情であるが、直情徑行（思つた通り、感じた通りにして、一寸も前後を考へないこと）は道德でない。自然性は理性の力によりて整理整頓（合理化）せられねばならないのである。

賞　罰

（1）賞

（五九）二學期の終りの頃、先生にほめられたことを、その日家へとんで歸つてお話しした時のお母樣のお顏。あゝ、こんなに喜んで下さるのだから、もつといいことをして、お喜ばせしようと思つたが、その當時はよかつたが、少したつと段々惡いくせが出て來る。これではいけないと思つて、立て直し〳〵しても直ぐ口答や懶け癖が出て來る。私は何んて根氣がないのであらう。（五年T・T）

（六〇）「××ちやんはこんなに手工が上手になつたのれ」と嬉しさうなお顏……。（五年A・T）

修德の工夫は努力の一語に盡きるが、毎日、少しづゝでも向上し、根氣よく、撓まず……。

此の子は手先の極めて不器用な者、母親はそのことを承知してゐて、賞詞を以て激勵したもの

と思はれる。

（六一）母の日に作つて差上げたお前掛をごらんになつて、「マア、××子が、こんなものを作つて呉れて」と、お祖母様やお父様にお見せになつた時、お目には涙が光つてた。（六年Y・O）

（六二）私は、お禮に、一生懸命お襦袢の袖を編んで居ります。もうこれが小學校で最後の、お母様への贈物です。お母様は今迄の私の下手な、でも眞心を盡して作つた贈物を、一つ殘らず大事に抱きかゝへて、もつてゐて下さることを、私は大變に喜んでゐます。私がお母様であつたら、どうしてきつと、一つか二つはなくしてしまふでせう。（六年M・S）

賞詞を與ふることも、單に滿足を表現（破顏微笑等）することも亦廣義の賞である。賞は狹義には金品を與へて善行を表彰することであつて、此の意味の賞を教育上有害として、現今大部分の教育者は排斥するやうであるが、賞詞等を以て刺衝激勵するのは望ましい次第である。

（六三）私が何か一つでもよいことをすると、心から喜んで下さる。そして「これからもしてれ」とやさしくおつしやる。すると私は直ぐ、「お母様はあれだからいやだわ」とすぐだゞをこねてしまふ。何んて私は馬鹿なのであらう。

お母様はよくおつしやるわれ。「私は口から先に生れたんですつて。」でも本當にさうですね。理くつばつかりならべて、行はその萬分一も出來ないのに、でもお母様に（理窟などがよく）言へたものだと感心してしまひます。（五年A・O）

右は「口から先に生れたお嬢さんの方に大に理窟があると思ふ。賞詞そのものゝ中に、「これからも續けてね」の意味は十二分に含まれてゐる。被賞者は賞詞に接すると忽ち、「よし、これからも繼續しよう」といふ決心を起すに相違ない、別言せば、自發的邁進（善に向つて）を心に契ふのが常であらう。そこへ、あゝ言はれて見ると、其の自發心、自尊心が傷けられて、今後の善行を强要せらるゝが故に、不快を感じたにちがひない。口から先に生れた、能辯で賢明な子供さんであるだけに、言下に之を感じ、躊躇なく其の實感を暴露したものであらう。お母様も少し「口から先に生れて」ゐるやうである。

（2）罰

第一章　修身教育

（六四）女一人の私を、目の中へ入れても痛くない程可愛がつて下さるお母様は……けれども度に過ぎることをなすると、直ぐお叱りになる。（六年M・F）

寛嚴其の中を得てゐる。

（六五）私が生れて十三年の間には、どんなお苦しみにおあひになつたことでせう。それだのに私は「それ位、親としてあたりまへよ」……何といふ言葉、何とおろかな私。何と情けない自分であらう。お母様はその時、「あなたが今、おつしやつたことをおぼえてゐれば、今にきつと分つて下さるでせうから」とおつしやつた。ほんとうにさうだ。（六年H・O）

我子に對して最大敬語を用ひてゐるのは、唯これ一つである。小言（最輕の罰）をいふのに、冷靜、嚴格、しかも些つとも怒つてはゐない。

ストラッツは、「適度に賞し、熟慮の後に非難せよ、毆打（體罰）は原則として撤廢する。凡て情の激せる時に罰することなく、怒りの靜まるを待ちて後に處分せよ。所罰に先つて私共は先づ自分自身を吟味せねばならぬ。感情が沈靜し、行爲と共の動機とを入念に調査した後、過不及のない程度を定めねばならぬ。大人は又自分の立場（兒童の立場でなく）から批判するが故に無理が當る。不當の所罰は相手を憤らせ、傷け、最後に教育者に對する信用が破壞されて了ふものである」と。要するに怒を含んで復讐的に處罰するのは禁物である。

（六六）意地の悪い女中に意地められて逃げて來る所は、やつぱりお母様の愛の木かげでした。お兄様とけんかしてかくれる所もお母様のお袖の下でした。こんなにやさしいお母様なのに、私は家中で一番こはいの。だつてお母様は私の悪いことをびし〳〵お叱りになるのですもの。そして、悪いことは大目に見て下さらないんですもの。

此の間だつて、新聞を跨いで行つた私を、お叱りになるんですもの。あんな時は癪だと思つたりしました。「こんなお母様がいらつしたりしては、一生のんびり出來やしない」つて私がいつたので、お母様は心の内でためいきをもらされたでせう。（六年J・M）

前半は寛嚴其の當を得てゐる。後半には問題がある。作法を躾けるのは結構であり、新聞・書籍などを跨かず、敷居や疊の緣を踏まず、箸の持方迄、注意を與へるのは結構であらう。然し此

の實例の如く、卽座に、口八釜しく叱るのはよくあるまい。前揭諸實例中、時々「御注意を受けて……」といふのがあつたことを諸姉は記憶されてゐるであらうが、「叱る」のと「注意」するのとは、自ら別事であるが、兩者の間は「紙一重」で「注意」の口調が少しあら〳〵しくなると、そして注意する人の心中に少しでも怒りを崩すと「叱り」に墮して了ふであらう。箸の上げ下し迄叱る日には、成程のんびりした、穩やかな、上品な子女を養ひ得ないであらう。

只つた今私は、卽座に口八釜しく……と言つた。此の種の細々しい注意は、其の都度々々訓戒することなく、時々、殊に茶話の時など、物和らかに話した方がよいかと思ふ。其の機會や方法を、諸姉が考へて下さるなら結構である。

ストラツツは「絶えず瑣事を叱責非難して規則責にすることを避けよ」といひ、「子供は、どちらを向いても長者で圍繞かれて、八方から八釜しく言はれては堪らない。其の結果はいぢけて了ふか、無感覺になるか」だとも言つてゐる。

（六七）惡い事をした時でも、口答をして泣いた時でも、目に一ぱい淚を溜めて、私を見ていらつしやる時が、私にはとても〳〵つらかつたのです。（六年A・O）

この叱らぬ叱りが最も有効である。

賞罰は被敎育者に强き印象を與ふるが故に、敎育上の一重要手段に相違はないが、其の使用に對しては愼重なる注意を要する。

賞の度數や賞品が多過ぎると、兒童は間接興味のみで動くやうになつて「賞は善行其のものを無言の內に含む所の徽號」だといふことを忘れて、只管功利的人生觀（利益或は快樂を人生の目的とする見方）を植付けられる處があるから。

最惡のものは體罰である。このものは多いか少いか復讐の意味と結合し、犯行者に對して怒を漏らすことになり、罰の改善手段であることを忘れ勝になるからである。西洋では、一般に條件つきで體罰の必要を認めてゐるのであるが、それでも猶、食事と睡眠を奪ふことは絶對に禁じてゐる。

處罰の主義には三つあつて、復讐主義、威嚇主義、改善主義がそれである。復讐主義は、處罰して腹癒をする爲であり、威嚇主義は、周圍の人々の見せしめにする（昔の梟首、市中引廻し等）爲で、謂はゞ犯行者を犧牲にするといふ嫌がある。改善主義は犯行者其の人の人格改善を目的とする、純粋利他的動機に出づるものである。此の意味からして死刑全廢論なども唱へられるやうになつたのである。

修身總括

家庭に於ける修身教育の根柢は母性愛である。私の學校の六年擔任教師は、

「お母様は本當にあなた方を愛して下さる。先生などはそれだけの愛がとても盡せません。」と告白してゐる。此の點、兩親、殊にお母様は教師以上の教育者である。

此の母性愛が學習に向へば、學力と時間とのあるお母様は直接に教授し、さうでないものは愛撫、奬勵等によりて間接に學習を助成する。

道德教育の方法としては、

1　學校或は一般社會に共鳴して「デー」や週間教育を勵行す。
2　家庭に特有な週間等を設け、家族總動員で嚴守する。
3　右の場合には感想・日誌類を書かしめて反省の機會を與ふ。
4　反省の結果はゼームスの格言を服膺して刻々漸進的に、根氣よく意志力を練磨せしむ。
5　教訓、示範、感化によりて人格の向上を圖る。

等々である。

舊約全書詩篇第二十三篇に次の如く出てゐる。

一、エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。二、エホバはわれを綠の野にふさせ、憩ひの水濱に導き給ふ。三、エホバはわが靈魂をいかし、我を正しき道に導き給ふ。四、たとひわれ死のかげの谷に步むとも禍害を恐れじ、なんじ、われと共に在せばなり。なんじの杖、汝の笞われを慰む。……

エホバは、ヘブライ人の神であるが、お母様は兒童の爲のエホバとなりて、蔭になり、日向になり、心は常に子女と同行して、禍を防ぎ、善きに導いてほしいものである。そして エホバの信者は、神（エホバ）に絶對信賴をかけてゐるが、次には、兒童の母に對する信賴の一端を例示して見よう。

（1）私を心の奥底から愛し、又一生懸命育てゝ下さる方が、日本に、いいえ、全世界に二人といらつしやるでせうか。（六年H・T）

（2）もしお母樣がいらつしやらなかつたら？　あゝもうそんなことは考へたくありません。私なんかはほんとうに幸福です。お母樣が私にはちやんといらつしやるんですもの。（六年K・E）

（3）私が悲しい時「お母樣」と、此の一言を心の中でいふと世界に二人といらつしやらない、あのやさしい〳〵お母樣のお顏が、心の中に浮び、悲しいことなどどこかへとんで行つてしまふ。（六年H・I）

（4）私が起きてゐる時は横についてゐて下さり、寢てゐる時も私が安らかに眠れるやうに思つてゐて下さるのは、日本中に、世界中にお一人しかいらつしやらないお母樣……（六年K・O）

（5）何だかお母樣と一所だと、ちつとも寒くないやうに感じた。（六年Y・N）

國家は家庭の大なるもので、家庭は國家の小なるものである。斯くして家庭は對國家道德（のみならず、進みては又）對世界道德養成の苗床である。

國家が家庭の擴大だといふ、世にも嬉しく、誇らしい事實は、明治天皇の

罪あらば朕なをがめよ天つ神
　たみはわが身の產みし子なれば

と宣まひしに徵しても、その單なる空想にあらざるを見るべく、更に又、

長しへに民安かれと祈るなる
　わが代なきもれ伊勢のおほ神

とも詠じ給はれた。何と辱い君主であり、父君であらう。我等の國家はかくして文字通りに家庭である。

諸姉も亦「何とありがたいお母樣」と仰がるるならば、孝子は續出し、忠臣も輩出する。「忠

臣は孝子の門より出づる」からである。

家庭は又、宗教の對象たる宇宙の縮圖でもある。父母はエホバであり、牧者であり、子女は慰ひの水濱に導かれ、死のかげの谷にも禍害を恐れざる羊だからである。

第二章　國語教育

國語は讀方・綴り方・書き方の三分科になつてゐるのみでなく、讀方の中から話方なさへ分けることも出來る。所で、此の小册子では、これ等の凡てを網羅して、うすっぺらくするのは、虻蜂になる虞があるので就中一番六ヶしい綴り方のみを選ぶことにした。讀方指導に就ては、學校教師の參考する教師用（文部省發行）を家庭にも備へ付けておくのがよいと思ふ。

第一節　一學年の綴り方指導

具體的に實例をあげて指導法を明かにする積りである。私はもう二十年以上も、小學兒童の綴り方を指導してゐる關係上、子供の文章は萬を以て數へる程蒐集めてゐるが、本著には尋常科六學年を通じて、僅々五十六文だけしかあげる餘白がない。

兒童の手になる、俳句・短歌・童謠を始め、自作の兒童劇にも一指を觸れることが出來ず、單に散文許りに止めたことも紙數の關係上止むを得ない所である。

私が多少の苦心を拂つた所は、文例の排列である。大體は劣等、中等、優等の順で作品を並べたのであるが、餘りに千篇一律になると讀者を倦ましむることを恐れ、時々排列を變へた所もあるから、實地に就いて判斷されんことを願つておく。

文例は兒童の生ぶの儘を採つた。重複してゐても、無駄な字句が下されてゐても、假名づかひが違つてゐても、凡てその儘にしておいた。之によりて、子供文の眞相も分り、指導訂正上の參考にもなると思ふからである。批評訂正に際しては、成るべく兒童の自然に卽しつゝ、（自然主義教育法）而かも甚しい所だけを、歩一歩と漸次標準を高めながら（理想主義教育法の眞諦）直して行くべきだと思ふ。大人の言ひまはしと趣味と論理とを標準として一躍之に近けようとするのは、所謂苗を拔くの愚を演ずる所以であらうと思ふ。

坊間にひさがれてゐる兒童文集は大分大人の手が入つてゐるやうに思はれる。それだけ文章はよくなつてゐるから、參考にならなくもあるまいが、研究の資料としては多くを期待する價値なきものと信じ、本書には一文をも採擇せず、專ら私の學校兒童のものだけに止めておいた。從て女兒の作品許りであつて多少遺憾の點があるけれども、指導の方法は男女に於て殆ど變りはない。殊に小學兒童は中性期であるから、思想も文體も殆ど同一である。若し小異ありとせば、そして諸姉にして男兒を有つてゐるなら、兩々相比較して研究されることも面白いと思ふ。

（昭和九年十月十二日作）

1）エンソク　（一）タノシイ　タノシイエンソクガ　キマシタ。キレイナシバフノウヘデ　オベントウヲ　タベマシタ。ソシテ　トンボヲ　トツタリ（シタリ）オニゴツコヲ　シタリシテ　オモシロクアソンデ　オカヘリニ　ソノモノヲ（二）ヒロシノ　オミヤゲニシマシタ。

內容貧弱。目的地もかいてない。

（一）「ソノモノ」とは甘藷のこと。その日藷掘りをしたのであるが、文中に説明してない。

（2）エンソク　（前と同日）

エンソクニイッテ　オモシロク　アソンダリシマシタ　オベントウモ　オイシカッタ（文體混合）オイモホリニイッタトキニ　大キイノガ　一パイデマシタ　トテモオモシロカッタ（デセウ）（一）マツノキヤクリノキガ　タクサンアリマシタ　オモシロク　アソビマシタ　プエセンセイ（武衛先生）ニ　クッツイテ　アソビマシタ（二）（トッタリ）ソレカラオニゴッコ　シタリ　オヒロツワリ（不明）シマシタ　ソレカラ　ホリニ　イキマシタ　ズイブントリマシタ　十トリマシタ　エンソクニイツタトキ　ヘビチコロシタノガ　カハイソカツタコトト　トンボトツタコト　ソレカラ××子サントオモシロイコトオ　シテアソンダリ　トツテモ　オモクロイコトヲシマシタ　エンソクツテ　トテモオモシロイト　オモツタノデス　エンソクニ　ナンニモ　モツテイカナイノハアソビドウグデシタ　エンソクハ　タイヘン　ニギヤカデ　オモシロイ　チハリ

長い文章であるが、排列の順序をちつとも考へてゐない。經驗の時間順にでもならべて綴つたらよからう。尚又文章が非常に切れすぎてゐる。（二）は文をつゞける一例を示したものである。尚ほこの詳細は文例3の條下を參照して貰ひたい。（但し一年生の間は餘り嚴しく言はぬことにしたい）。

一・二年生の綴方に對する格言は、

1　經驗せることを、

2　正直に順序よく書く、

ことである。經驗しないことを、想像に訴へて書くことは、下級生には不可能であるから、その經驗を、ありの儘に、順序よく書くやう導かねばならぬ。

（一）「デセウ」は除くべきもの。

（3）エンソク　（同日）

エンソク（エンソク）（一）ト　イツテタ　エンソクモスギマシタ。ワタクシハ　オネエサマト　イツシヨウニ　テルテルボウズオ　ツクリマシタ。ソレデ　テルテルボオズチ　オマツリシマシタ。ユウカタニ

ナッテ　ワタクシト　オネエサマト　イツシヤウニ　テルテルサン　テルテルサン　アシタテンキニ　シテチヤウダイト　オガミタテマツリマシタ。ソレデ　ゴハンヲイタダイテ　八ジニナツテネマシタ。ヨクアサオキテミルト　ヨイオテンキナノデ　ウレシユウ　ゴザイマシタ。ゴハンヲイタダイテ　ママニ　タカタノババ　マデ　オクツテイタダキマシタ。タカタノババニ　ツイタラ　タクサンノカタガ　イラツシヤイマシタ。テンシヤニノツテ　タカタノババヲデマシタ、チヨスイチニツキマシタ。ソレデ　オベンタウオイタダキマシタ。アソンデオイモホリニイキマシタ。オイモガ　タクサントレマシタ。ソレデ　デンシヤデ　タカタノババニツキマシタ。オウチニツイタノハ　六ジハンデシタ。ゴハンヲイタダイテ　八ジニナツテ　ネマシタ。(三)ヨクアサオキテ　ガツコウニイキマシタ。ガツコウカラ　カヘツテキマシタ。キノウ　トツテキタオイモヲイタダイタラ　トテモオイシウ　ゴザイマシタ。

經驗を時間順に排列してあるから、文理が明白になつた。照々坊主・高田の馬場などを大人から見るとうるさい程反復してゐるが、子供はそれ等を省略すると、文意が通じないかの如く感ずる。然し、年と共に漸次自ら省筆の要を感ずるものであるから、指導者は濫りに急ぐことなく、

只一歩一歩簡明に書かすやう導くべきである。

「遠足」とか「動物園」とかの如く、材料がありすぎるものになると、「部分法」によりて、例へば「遠足の前夜」、「電車の中」など題して、その一部分を精しく述べる書き方もある。上級生は殆ど全部此の手法を用ひ、下學年生は大抵全體法を選ぶやうである。本文は、前夜のことから翌日までのことを述べてゐるから、全體法の全體法といふべきであらう。

(一)　括弧内は著者の補つたもの。以下の諸文例中、括弧を施した所があつたら、それは省くべきものであることもあり、補ふべきものである場合もある。そして一々斷はらない場合も多いであらうから、その何れであるかは、その時々により判斷して頂きたい。

(二)　目的地（村上貯水池）が出て來た。

(三)　以下獲物のおいしかつたことを言ひたい爲に、翌日登校し、歸宅したこと迄書いてゐる。この點は注意を與へて省略せしむるがよからう。

尚、本文章は少しく切れ過ぎた所がある。中程の所に「電車に乘つて高田の馬場を出ました。

貯水池に着きました」とあるが「……の馬場を出まして（或は出て）貯水池に着きました」とする。（以下倣之）。

文章は切れ過ぎても、續き過ぎてもよくない。其の中庸を得ねばならない。

（同日）

（4）エンソク

マチニマツタ（一）、エンソクガキマシタ。ワタクシハ　アサハヤクオキテ　オベントヤ　オカシヲモツテ　パパトデカケマシタ。センセイヤ　オネイサマガタ（上級生）トデンシヤニノツテ　タノシイタノシイ（二）イモホリニマイリマシタ。（三）デンシヤノマドカラ　ダイコンノハタケ（大根ノ花盛デアツタ）ヤ　オイモノハタケガ　タクサンミヘマシタ。ソレカラウンドウカイモ　ミヘマシタ。

ソシテ大キナオイケノマンナカニ　オウチ（貯水塔）ガアツテ　ソノオウチニ　アナガアイテ　イマシタ。ソレカラソノオウチニアル大キナアナニ　アチイミヅガ　トテモハヤクナガレテキテ　ナンダカコハクナリマシタ。（四）ソシテソノ大キナオイケノムカフニ　モリガアツテ　ソノムカフニ山ガアチクミヘマシタ。オイケノ上ニ　オヒサマガ　キラキラウツツテ　トテモオモシロウゴザイマシタ。ソレカラシバラクデ　オベントウヲタベテ（五）ミナサント　カケツコヤ　オニゴツコヲシテ　アソビマシタ。ソレカライモホリニ　マイリマシタ。アマリツチガカタイノデ、（六）パパニチヨツト　カセイチシテイタダキマシタ。ソレカラオウチヘカヘツテ、（七）ママニ　オミヤゲノ　エハガキヲミセテ、ケフノオモシロカツタコトヲ、オハナシイタシマシタ。

（一）全文を通じて句讀點が正確に下されてゐる。

（二）甘藷掘りは當日の、ほんの餘興に過ぎないものであつたが、作者は主目的と考へたらしい。

（三）車中の眺望を書いた點は、上級生らしい趣がある。

（四）目的地、村山貯水池が精細に描いてある。

（五）遠足の際、目的地で遊戯したことを精しくかくのは、下級生に相應はしい（から推奨に値する）

（六）パパを點出した所が面白い。幼年生は、誰それ〳〵と、澤山の人名を列擧しても、それ等は文章中で何等の活動もさせられないのが常であるが、本文は此の常套を突

破してゐる所がよい。

（七）お土産の繪葉書を買つたことなどは省略してある。あつたことは何も彼も書かねばならぬ。氣のすまない幼年生としては珍らしい省筆法である。此のお土産を話題にして今日の見聞を語る、團欒の狀態が見るやうである。

本文は要するに、出發前、途中、目的地、歸宅後と、それ〳〵の條件が、各巧みに描き出されてゐる。

綴方と觀察

八決則吉氏著「文語文例少年模範文」（講談社發行八拾錢）一八四頁に、「金魚」と題した應募文が載つてゐる。中學上級程度の作品と思はれる。

机にもたれながら、金魚を見てゐると、美しい緋縮緬のやうな薄い〳〵柔かい、そして幾つもに裂けた鰭や尾をひら〳〵動かしながら泳ぐ。硝子にそつと、口をあてゝ耳めるやうに底から靜に浮上る。そして水面にちよつと口を出して涼風を吸ふとその度毎に小さい波紋が幾つも搖れる。やがて下へ沈むと、粟粒のやうな小さな泡を口からぶくぶく三つ程吐出した。三匹の金魚は頻りするやうに集つて圓い目を光らせて、泳ぎ出す。どうかすると、ぼつちり小さく見えたり、器一杯に、インキを落したやうに廣がつて見えたりする。

八波氏の評に、

よく物を見詰めた結果が、優れた文の內容となつてゐる。

とある。その通りであらう。

一體動物を題材とする時は、それの形態と運動（生態）とを記述すべきであらう。右の文は形態二分、運動八分になつてゐる。金魚のやうに知れ渡つてゐるものはこの割合で結構だと思ふ。併し細かく書くのが必しもよいのではなく、綿密と同時に美しくなくてはならない。泡を三つ吐いた所は、細かくはあるが大して綺麗ではないが、なくても事は缺げぬとも考へられる。此の他は精細と優美とを兼備してゐる。上乘の小品文たるを失はない。

遠足文の最後のもの（4）は、觀察がする分細かい。理科は固より、圖畫や綴方に在りては、觀察力を養ふことが重大目的の一つであらねばならぬ。

（十二月（九年）十九日作）

（5）オ　正　月

ワタクシハ　イツモ　カレンダアヲ　メクッテキマス　ケフカゾエテミタラ　モウ十二ネレバ　オ正月デシタ。ワタクシハ　ウレシクテウレシクテ　タマリマセン。オイシイゴチサウモイタダケルシ　マリツキモデキルシ　ハネツキモデキマス。トテモ　ウレシヤウゴザイマス。ガツカウニイツテ　センセイニオメデタウトゴアイサツヲ　シマスシ　竹ザハサント中村サント　オノサント　イツシヤウニ　アソビマス

嬉しいといふ說明語を濫用するのが幼年生の常套手段である。之を前揭の「金魚」と比べて見るとよく分る。「全魚」の中には、美しいとか可愛いゝとか言ふ語は一つもないが、さて、大に美しく可愛らしい。これは有の儘に描寫したからである。私は小學校の四年生以下を「說明時代」と名け、五・六年生に至りて漸次描寫時代に入るのでないかと思ふ。諸姉その心して此の綴り方

編全體の文例を讀んで貰いたい。

尙文例五は、一年生の中以下の作たることを斷つておく。

三月（十年）十四日

6　ウグヒス

私ハウグヒスガスキデス　大ヘンヨイコヘデ　ナキマス　春ニナルト　ウグヒスガ　オニワニキテ　ナキマス。トテモヨイコヘデ　ナキマス　ソノコヘヂキクト　私ハソウヅト　オエンガハヘ　イツテ　ガラスヲアケテ　見テイマス　ミナサンハ　ウグヒスハ　ホウホケキヨト　ナイタリ　ケキヨ　ケキヨト　ナキマス　ウグヒスハ　トキドキキマス　マイニチデハアリマセン……

一生懸命　眞劍味のある力作である。鶯の聲を心から禮讃し、他人の同感と共鳴とを求めたい爲に皆さんは鶯ハ嫌ひか、そんな筈はない、大に好きな筈だ。ホウホケキヨと鳴いたり、谷渡りを歌つたり、此の可愛い〳〵小鳥が何で憎めようか。況んや毎日來るのではなく、只時々のことだから、大に〳〵愛好せよと、我が鶯の爲に萬丈の氣を吐いてゐる。私が「眞劍味のある文」と言

つたのは此の爲に外ならない。詰り、未だ描寫の能力がないから、説明語を總動員して、愛着心を表現した作品だと思はれる。

（7）六年ノオネエサマへ　（十年三月下旬）

こゝにあげる文例は、小學校卒業生送別會席上で、一年生總代が讀み上げた送別の辭である。

ワタクシノダイスキナオネエサマ、ワタクシガ　ガッカウノ　ハイリダチノトキ、ゴフジョウノアルトコロガワカラナイトイッテ　ナイテキルト　スグアヤシテ　ゴフジョウニ　ツレテイッテ　クダサイマシタネ

ソレカラ　オネエサマタチハ　ワタクシガガッカウニクルノチ　マッテ　イラッシャイマスネ（六年生が校門前に出でゝ入學當初の一年生を出迎へる）。ソシテ　ウワグツヲハカセテクダサイマシタネ。ソレカラワタクシノオトモダチガ　イナイトキナドワ　スグオネエサマガ　イラッシャッテ　カゴメヤシヤカミオニ　ナドナシテクダサイマシタネ。一ネンカンニ　ドレダケ　オセワニナッタコトデセウ。ソノオネエサマガ　ジョガッカウニ　オハイリニナルノハ　ナンダカサミシユウゴザイマス、デモオネエサマ　トキドキ　オカホテ　ミセテクダサイネ　サウ　テ　ジャウブナ　カラダニナッテクダサイネ。

右は私の學校の年中行事の一を紹介する爲に擧げた迄で、文章としては、多少大人の手が入つてゐるかもわからない。

私は一年生の作品だけでも何百千といふ程集めてゐるが、紙面の都合で、僅々七文例だけに止めて、一年生の分は、之にて終りとしておく。

次に一言しておきたいのは、本書に採用した兒童の作例は、（最後の7を除く外）、凡て生ぶの儘で、一字を訂正改竄しないといふことである（二年生以上も同樣）。さうなくては指導法研究の材料として遺憾の點が少くないからである。斯くして例へば、假名遣でも「イモウトオ（ヲ）」とあつても其の儘擧げ、「イマス」を「キマス」ともしなかつた。

尤も現今では、歴史假名遣派の外に、發音式假名遣派がある。元東京高師教授で國文學者である、吉田彌平氏の如きも　發音式に贊成して助詞「は」「を」「へ」を存するに及ばぬ。濁音「じ」

「ず」の外に「ぢ」「づ」は用いぬこと（「發音式要求の聲」といふパンフレット二五頁）と述べてゐる。

私の學校では、國定教科書が歴史假名遣を止めぬ限りは原則として教科書に從ふ方針である。さうでないと、兒童は、例へば、讀む時は「いふ」で、書く時は「ゆう」となると、混亂に陷るから、原則として歴史派による方針であるが、幼年生には餘り嚴しくしないことにしてゐる。

第二節　二年生の綴方指導

（8）春　（十年三月十一日作）

この頃は（一）（春になつて）だん〳〵暖くなつて來ました。（二）きのふはとても暖かでした。春は櫻の花でまんかいです。さうして（三）四月四日は三年生になります。色々な花などがさき、今まではつばだけの木に花がさいたりします。さうして、今までオーバやセーターを着てゐました。けれども春になつたのでいらなくなります。草もはえました。（四）私は春が一番すきです。

無駄もあり、順序も悪い、下等な成績である。

（一）「春になつて」は閑文字（無駄）。

（二）……來ました。と切り、直ぐ次に又……暖かでした。と切るから「た止め」が多くて文章が切れすぎる。最初の方を訂正して見ると、

「この頃はだん〳〵暖くなつて、昨日などはとても暖かでした。」

とすればよいであらう。文は續き過ぎても切れ過ぎてもよくない。

（三）「春は櫻や色々の花などが咲き……」とする。「春は櫻の花で滿開です」も變である。

（四）「四月四日には三年生になります」は結末へ回はす。是迄春の景色を述べ來り、こゝに突然人事關係ともいふべき進級のことを一寸挿入し、次に又敍景になる。前後敍景の中央に人事を挿入して文章を兩斷し、その爲に纏りが悪くなる。（順序か悪いと評したのは、この邊を指す）獨逸の一女流教育家が、「文章はコンクリート塀のやうに、上から下へ、つぎめのないやうに書き下せ」と言つたのは名言だと思ふ。

（五）「私は××が好きです」といふ結末は幼年生の慣用で、大人から見ると誠に平凡な閑文字であるが、尚早的に排斥するのはよくない。子供も平凡だと悟つて、自然に止めるやうになる。私の經驗では、遲くとも三年の二學期頃には、殆どなくなるやうである。

試に訂正文をあけて見るならば、

この頃はだん〳〵暖くなつて、昨日などはとても暖かでした。オーバやセータも、もういりません。春は櫻や色々の花が咲きまして、今までの枯枝も見ちがへるやうになつて、草も段々生えて來ます。そして私達も四月四日には三年生になります。

一・二年生の綴方のモットーを再錄して見ると、

一、經驗せることを（内容規定）——想像や推測せることでなく、

二、正直に（有の儘に）順序よく書く——形式規定

ことであつた。私は二年生になると、形式規定に今、一項を加へたい。

「文の斷續を適當にする」（切地に注意する）。

ことがそれである。文例8の「この頃はだん〳〵暖くなつて來ました。きのふはとても暖かでした」では切れ過ぎるから、前記訂正文のやうに綴らせたいと思ふ。

同じく二年生の某兒は、「日ヨウビ」と題して、（四月九日作、必要の點のみを左に摘錄する）

「……ノドガ　カハイタノデ、ギユウギユウト　オ手ヤヲノミマシタ。オチヤヲノミマシタ。オテラニキマシタ。ソコカラデテサカナオリテ、タキナミマシタ。オテラニ　ズイブンキマシタ……」

と綴つたが、隨分切れ過ぎてゐる。「夕止め」の文章は殊に耳障りになる。

「春が來ました。今日などはとても暖かです。今に花も咲くでせう。」

などは、切過ぎてゐても、割合に快く響く。（「夕止め」を濫用しないから）。兎に角二年以上は此の「文の斷續」といふ方面に注意を拂つた方がよいと思ふ。

（四月廿四日）

（9）　ス　ズ　メ

私ハイツモ六時三十分ニオキマス。ソシテキモノヲオキカヘテ　カオヲアラツテ　オシヨクジヲ　スマシテカラ（キモノ以下無駄ナ閑文字）デカケマス。ソノトキ　オゴモンノトコロヘイクトスズメガピイチク

ピイチクトユツテアルイテキマス

ソシテ私タチガクサヤイロ〳〵ノモノヲトリニユクト　空ノ上デピイチクピイチクトナイテキマス

ユキガフツテキルトキ　スズメハデテキマセン　雨ヤノフツテキルトキハ　ウチノホウハ一ワカ二ワカ三バ　デテクルダケデス　ソレカラテンキノ日ハ　タクサンデテキマス。

この文章は觀察が足りない。ピイチクは雲雀のやうである。雀は又歩かない——一脚を前方に出し、他脚か又前者の前に出すが如く、兩脚を交互に運ばせながら前進することを歩くといふならば——只躍るのである（雀躍）。「空ノ上デナク」とあるが、雀は空中高く飛翔することは出來ない。翼が割合に（身體に比較して）小さいからである。（低い空を、少し飛んでは、屋根や枝で休みながら飛ぶものである——理科に於て、このやうな、雀の生態を研究せしむべきである。

我校では一年生の時から自然科といふ名稱の下に理科を課してゐる。

此の文は全部說明文である。說明文に對立するものは記事文で、後者は或特定の場所や時間に起つた出來事を記述するのであるが、本文例は、或特別時日の記事ではなくて、最近に見た雀どもの事を述べたからである。「春は暖い」は說明で、「今日は暖い」は記事である。指導者は此の區別を頭に入れておくと便利であらう。

「オゴモン」は「おみおび」などと同樣に、上品な、耳障のよい詞だと思ふ。

（10）　ウチノスズメ　（七月二日）

オウチニハ　カハイイ　コスズメガオリマス。（說明）

ケサ四時ゴロ　カハイイコエデ「チイチクチイチク」トナイテキマシタ。（記事）　コスズメハ　ハジメテキマセンデシタガ、コノゴロハ　トテアケテヤルト　オウチノミシナニノツカツテ　アソビマス。（說明）

ミミナロバシデ　ツツイタリ、口ニキテキステ（一）、シマシタリ、アタマノケヲヒツパツタリシマシタ（記事）トキハ、トテモ〳〵クスグツタクテワライソコナリマス（二）。

モトハ　スリエヲヤツテキマシタガ　コノゴロ大キクナツタノデ　ゴハンツブト　ナツパト水ダケアゲマス（三）トキドキムシヤハコベヲアゲマス（說明的記事）。

說明文とは嚴密に言へば、或事物（例へば雀）に永久に妥當まる眞理を記述せるものであるが本文例に於けるが如く、同一狀態が比較的に長時間繼續することを記述せる表現（言語又は文字による表現）をも、同じく說明文と見て差支ない。記事文は之に反して、短時間の、若しくは一刹那の狀態を記述せる徽號的（文字・言語は徽號である）表現である。

本文例は第二の意味の說明と記事とを巧に混用し、全體から見て、小雀の活動をよく描寫して㐧る。別言せば、客觀的に、ありの儘に描き出してゐる。別に可愛い〳〵といふやうな、主觀的說明語は加へられてゐないが、しかも大變に可愛らしく描けてゐる。觀察が精密で、ユーモアもあり、情愛も籠つてゐる。

（一）の句點は省く。

（二）ワラヒソコナリマシタとする方が記事文として適當であらう。ワラヒソコナツタ（將に笑はんとした）といふ反面には、笑つてならないと思つて、可笑しさを忍んだ心持が明に現はれてゐる。若し笑ふと、小雀が驚くことを恐れるからであらう（愛情こもる）。

（三）「……水ダケアゲ（ヤリ）マスガ、マタ　トキドキ　ムシヤ……」として、文章をつゞけた方がよい。

（11）　ウチノオニンギヤワ　（四月十七日）

オウチニ　コナイダカツタ　オニンギヤウガ　アリマス　ソノオニンギヤウハ（駄句）キモノ（和服）オキテオリマス　オビモシメテオリマス（駄句）ガラス（バコ）ニハヒツテアリマス　私ハカハイクテタマリマセン　キノフキモノハ　ウチデツクリマシタ　私ハソノオニンギヤウガ　ダイスキデス　トテモキレイデ　ウツクシイ　オニンギウデス。

少女と人形　ストラッツは其の著「婦人の身體」の第八章に「少女と人形」と題して次の如く述べてゐる。

「母親の子女に對する關係は、少女の人形に對する關係に等しい。人形は少女に對しては道德的實驗（フールズーフスカニン）家兎であつて、此の人形に對して、未來の母親（少女）は、其の母としての使命を憶病に練習する。そして注意深い觀察者は、少女の人形に對する態度よりして、彼の女の將來に於ける

任務遂行力の大小を豫知することが必しも難くない。この際母親たるものは、助成、忠告、教訓しつゝ、大に活躍する餘地が存するのである。何となれば、大人がその仕事振りによりて自分の眞相を發露するが如く、子供はその遊戯によりて之を表現するからである。

以下文例11の批評を試みよう。

「キレイナ」「ウツクシイ」と、貧弱な語彙を總動員して說明してゐる。語數の多い割に（駄句があるから）內容は極めて貧弱であるが、只人形愛を以て全文を一貫してゐるから、兎に角纏つてだけはゐる。

着物や帶の生地や色や柄などを書き立てると美しくなる。お母樣は、かういふ點を敎へて描寫せしむべきである。

前文例が描寫的であるに反して、これは又極端に說明的である。

描寫と說明との區別を、今少し詳しく說明しておきたい。

「美しい」とか「可愛いゝ」とかいふのは說明であるが、其の見聞した儘をそつくり其の儘に寫し出して、なる程美しい、可愛いゝと、讀者を肯かせるのが描寫である。讀者の眼や耳に强い印象を殘す爲には、諄々しく說明するよりは、ありの儘を描寫すること、卽ち繪にして見せる——描寫は元來繪畫上の詞である——に如くことはない。

說明することは、作者が其の物、その事にこびりついて離れないことであるが、描寫は離れて見、見た儘を寫すことである。

幼年時代には、事物を自分といふものに引つけて考へたがる。自分を主として、凡てのものを思ふが儘に感ずるが儘に——見るまゝ聞くまゝではなく——描き且つ語らうとする。併しながら年を重ぬるに從て、漸次、見る時代、離れる時代、描く時代となるのである。私共はこの考を頭にもつて導かねばならぬ。併し既述の如く、本當に描寫の出來だすのは、私の見る所では、五年以上のやうであるから、餘りに急がない方がよいと思ふ。只玆にはよい序であるから、描寫の性質を、一寸、說明するだけと承知せられたい——實は少し早すぎるのかも知れないが。

描寫の實例を、明治以後に於ける大家の作品中から二三を引用しておく。（……を施した所が描寫、其の他は大體上說明）。

（1）庭には古い大きな梅が今か盛りと咲き亂れて、みどりの晴れた空にくつきりとおしたやうに鮮かに見える。（田山花袋）

（2）天蓋のやうに枝を低くさしのべた櫻の木の、すつとのびた若木の枝は幾つも蕾を出し、その一つのふくらんだ蕾にはとびいろの蓼が鋸の齒のやうに切れて、うす赤い花びらは未だ巾着形につぼんでゐて頭の所は僅に白く綻びかけてゐた。（中村星湖）

（3）黃色い菜の花が織物の地で、白い梨の花は高く浮織になつてゐるやうだ。殊に梨の花は密生してゐない。その粗い隙間から菜の花がすいて見えるのが際立つて美しい。（高濱虛子）

（12）私ノコレカラノウレシイコト　（十二月三日）

私ハクリスマスヤ、オ正月ガ、大スキデス。私ハ夜、オコタニハイツテ、キルウチモ、クリスマスノウレシイ〳〵、コト、ガ私ノ心ノ中ニタクサンウカビタシテ來マス。モウ秋モスギ、フユガヤツテクルノデス。クリスマスノ、アス（翌日）ハ、チヨウドオヤスミナノ。デス私ハオ正月モ、大スキデス、ハネヤ、マリヤ、スゴ六、チシタリ、カルタチ、シタリスルノデス。私ハオ正月ヤ、クリスマスガ、一年ヂユウ、デ、ソノ二ツガ、大スキデス。モウ一ツ、オ正月ニ、ナレバ、アソブノヨリ、ダイヂナ年ヲトルノガタノシミデス。ライネンニナルト、私ハ、十二年ガナルノデス。私ガイクラウレシイコト、タノシイコト、ホカニタクサンアリマスカ、私ハドウシテ、モ、オ正月ト、クリスマストチクラベテミレバヤツパリオ正月トクリスマスガ、ヤツパリイイノデス。オ正月トクリスマスハ、一年ニ、一ペンシカナイノデス。デスカラ、クリスマスト、オ正月ト、クラベルト、ヤツパリ、クリスマスノ、方ガ、スキデス。ソウイツテ、モ、二ツデ、イツショニ、シタ方ガ、タノシミデス。

前に說明文と記事文のことを述べたが、本文は說明でも、記事でもなく、それ等と異る、議論文である。

目的は、オ正月とクリスマスの優劣を決定しようとしたものらしいが、論旨は曖昧模稜になつて了つた。然し苦心慘憺、血の浸むやうな力作なることを認めてやらねばならぬ。結局、頭腦は

明澄でないらしいが、餘程根氣のよい子だと思はれる。

此の文を主旨貫徹せるものにする爲には、正月とクリスマスとの各長所を列擧し、差引勘定して軍配を何れかにあげるべきであるから、お母様がその積りで指導したなら、單り文章ばかりでなく、頭のよいお子さんになるであらう。

（13）お店のかんばん　（十二月十七日）

私がでんしやにのつてゐる時ふと、まどの外を見ました。（冒頭）するとあるかんばんに目がつきました。それには、天野、にく店とかいてありました。（一）それで私はつぎの（かんばん）（1）を見ると、ペンキで小さく、何か、かいてありました。（二）その下にでん話番ごうがかいてありました。少しとばしてからまた見ると、クリスマスセールとかいてあつて「そのそばにサンタクロースのゑがかいてありました。（三）私はおもしろくなつてもつと見てゐたいと思つてゐると、そこでんしやが止りました。私はもつと見てゐると、そのそばにおもちやと、大きくかいて（ありました、（2）そして）まどから雪がちら〳〵とふるゑが（四）かいて（あつて）（3）その下にでん話番ごうがかいてありました。（五）つぎのかん

ばんにはとしのいちとかいてありました。

私はそれを見て、じぶんも一度かんばんをかいてみたいと思ひました。（結末）

此の文には、冒頭も結末も具はつてゐる。文章構成の定石から言ふと、冒頭、本論、結末の具はることを貴ぶ。文章は又、之を主部と副部とに分ち、冒頭、結末を副部、殘りを主部と見ることも出來る。私共が他を訪問するときに、『今日は』が冒頭、用向を述べるのが本論又は主部で『左樣なら』が結末である。所で子供がお使にでも行つた時、「今日は」も「さよなら」も言はないで、只用向のみを傳へることもある。文章、殊に子供の作品は、千篇一律に副部を書かしむる如きは、却て形式拘泥の嫌がある。指導者は只、文の形式はこんなものといふことだけを頭に入れておけばよいと思ふ。

本文例は又、「た止め」（過去）が多過ぎて、語路も惡く、干枯らびたやうな氣がするから、時々「す止め」（現在）を混用せしめるのがよい。

（一）「ました」を「ます」に、（二）「何か書いてあつて、その下に……ありました」と改む。

(三)「ます」(四)ゐがの「が」を「を」に改む。(五)「あります」と直す。

(1)(2)(3)の括弧内文字は凡て省く。

此の文は、或時、或處で見たことを、有りの儘に書いたのであるから、無論記事文に屬する。別にこれといふ目的を以て書いのではなく、乘車中の退屈晴らし(消閑)の爲に、見た儘を綴つたのに外なるまいが、取材が奇拔であり、尙又「何でも文の題材になる」といふ一例にもなるから、特に採錄しておいた。

私は一旦此の文の結末、「かんばんをかいて見たいと思ひました」を「……思ひます」と直して見たが、再びもと通りに逆戻りさせた。「ます」とせば、「今も猶さう思つてゐる、眞劍に熱望してゐる」ことになつて、意味が重くなる。それを「ました」にすると、本の一時、その時さう思つただけで、今は何とも思つてゐないことになり、作者の本意も後者であらうし、本章としても、心理の自然としてもその方がよいと信ずるからである。

(14) ありのけんくわ　(九年八月下旬)

私は、うみに(避暑)にいつてでありのけんくわをみようと、おもひましたが、みられませんので、(見られなかつたので)東京にかへつて、おうちのありにおかしを一つ、のはらのありにも、おかしを一つ、おいときました。

おうちのありは黒でありました。のはらのありは、赤ありの大きいのでした。

しばらくすると、私はおにはとのはらにいつてみましたら、どつちにもありが一ぱいいました。私はけんくわをさせようとおもつて　しやべるでおうちのありのたかつてるところをとつて、のはらのありの所へおきました。

はじめ黒が赤のおくわしをとつてしまひました。私は、黒のおくわしを一つ赤のあつまつてるところにおきましたら、まだ一ぴき黒の方がいたので赤が黒をひつぱつたり　おしりでぐるりとまわつてつついたりして黒をころしてしまひました。

それから　あつちでも　こつちでもとつくみあひがはじまりました。こつちの黒のおくわしを少しとられてしまつて赤がゆうせいでした。私はこんど赤のおくわしを黒の所へおきましたら　赤が五ひきおかしについていたので　五ひきともころされてしまひました。

それから私は　うちにかへつて　またきたら黒はあなをほつてその中にゐました。そしてせんそうはやみました。

ほんとうに黒ありはどうしてゐるでせう。

研究方法を案出した點は、大人も及ばない。觀察も亦實に細かい。

複雑な事柄を順序よく、一糸亂れず綴りあげた根氣と手腕とも亦賞讃に價する。

黒の方のみを氣にしたのは、それが自家庭園の住民だからであらう。

文例12が哲學的であるなら、之は科學的であらう。哲學が苦心許りして結果が曖昧に終り、科學が明瞭な結論に達したことも亦面白い對照と言つてよからう。

第三節　三年生の綴り方指導

(15)　子供放送局　（十年七月二日作）

マチニマツタ　ウレシイガ・ゲイカイハ　六月二十六日デ私タチハ皆コウドウニアツマリマシタ　中楯

先生（一）モイラッシャイマシタ　イヨ〳〵子供放送局（二）デ一番始メハJOAKオトギノオドリ、タイサウ、天氣ヨホウ、ジコク（時報）學校ホウソウ、オスモウ（角力中繼）、ブッカ（物價）子供ノ時間デシタ。私ノ（田演シタ）時ハ私ハドキ〳〵シタリハラ〳〵シタリシマシタ。一番ジヤウズト思タノハ田中サンノヨビ出シ（角力ノ）デシタ。

此の文例は、第一、内容が貧弱である。字數は少い方ではないが、其の書いた所は番組の演技事項を列擧したに過ぎないからである。第二、說明が不足であつて、何を何うしたのかゞ極めて漠然である。

諸姉はこの文を讀んで、（一）中楯先生とは何人か、（二）子供放送局は何學年生が演じたのかといふやうな疑問が百出するであらう。

（三）私の時は……とあるが、作者は何を演じたか、といふやうな疑問が百出するであらう。

小學生の綴方は、自分の學友なり、せい〳〵全校内の讀者に分ればよいとも考へられる。然し私は常に「子供雜誌に出しても、全國の讀者に大體分るやうに書け」との注意を與へてゐる。で、中楯先生の上に「おなつかしい」といふ形容詞でもつけたら、諸姉は「舊師かな？」と心附

かれるであらうし子供放送局の上に「私達の」を添加したら、三年生が演じたのだ？　と想像されるであらう。

私の所謂「說明」とは、此の「オナツカシイデタトキハ」などの類で、なるべく短く、しかも大體を髣髴せしむるやうな技巧をさすので、之に依りて、校内の讀者でも「うるさい」と感じぬ許りか、却て骨皮許りの顚列よりも一層面白いと感ずるに相違ない。

時報にしても、出演者は胸に大きな、上體が隱れるやうな、厚紙切抜の時計をかけ、鉦を敲いて「只今のは昨日の今頃でした」と言つたのであるし、料理献立にしても、「ブリキの庖刀と玩具の俎板とを用意して下さい、そしてニンジンとナツバとを少々……」てなことを饒舌つたのであるから、簡單にそんなことを說明したら、未見の人にも興味あることと思ふ。

現に三年生の一兒は、相撲中繼の一班を次のやうに記述したのもある。

「そして龜山さんは「四股ケ嶽」、三浦さんは「ガッチリガ嶽」でした。そして高和さんが「見あはして〳〵」といふと、龜山さんが飛びかゝつていきましたが、三浦さんは「いや〳〵」をして（仕切り直し）取りませんでした。そして四本柱に鹽をもらつてまいてまた向ひました。こんどは三浦さんがとびかゝりましたが、龜山さんが「いや〳〵」をして取りませんでした。そしてとう〳〵本とうに取りまして（立上つて）三浦さんの（カッチリか嶽）がかちました。」

三・四年生のモットーは「見聞し、反省せることを、分り易く、面白く書く」といふのである。三年生にもなれば反省し取捨して、達意の外に趣味あるやうに書くことを目標とせしめねばならぬ。

拙文と銘打つべき作品は、第一、內容貧弱、第二、說明不足である。然かし說明はなるたけ短くしないと、文章がだれる。

東京朝日新聞の夕刊小說の「雪之丞變化」中、雪之丞が、その怨敵、廣海屋と長崎屋が會合してゐる室に現はれ、亡父松浦屋の亡靈の眞似をして兩奸を自滅せしめるといふ件がある。松浦屋の亡靈なるものが雪

之丞の扮裝せるものだといふことは最初から讀者に分つてゐない。それが私に分つたのは、亡靈が「ホ、ホ、ホ」と笑つたからである（雪之丞は女形だから、普通對話の際にもホホホと笑ふ）この「ホ、ホ、ホ」が多大の意味を說明してゐるのみならず、全篇の題意までを說明してゐるのではなからうか。雪之丞は變化の眞似をして敵打をしたから——士部三齋もこの手で自滅した。

說明が不足すると、意味の不通と曖昧とを招く。文例によりて立證して見よう。（二年生作による）

（16）エンソク

（五月六日　二年生作）

「……私ハ學校カラカヘツテキテ　テルテルバウズヲツクリマシタ。ケレドモドンドン雲ガフエテキマス。ソタクシハ、雨ガフツタンダトオモツテ外ヘデテ見マシタ。雨ハポツポツフツテキマス。セツカクイオテンキダトオモツタノニ私ハガツカリシテシマヒマシタ。ゴハンヲタベタアトデリクサクヲダシマシタ。ソシテシンブンヤオカミ（鼻紙）オタクサンイレマシタ。ネルジカンガキマシタノデ　ネマシタケレドモ　ウレシクテ（一）ウレシクテネラレマセン。トウトウネラレマシタ。ヨクアサオキテミルト　イイオテンキナノデ　ウレシユウゴザイマシタ。オシタクガデキルト　ジヨチユウト　オネエサマトイツシヨニ　タカタノパパニツクト　大ゼヒキテイラツシヤイマス。スコシタツテデンシヤニノツテ　タカタノパパオ・デマシタ。デルト　ケシキガヨウゴザイマス。花コガネキニツクト（二）オトコノカタカラ　オハナシヲタクサンシテイタダキマシタ。ソレカラウシヲ見テカラハラツパミタイナトコロデ、オベントウヲタベマシタ。

此の文例は字數の多い割りに內容は依然貧弱だ。「ネマシタ」の「ネラレマセン」の「トウトウネラレタ」の新聞紙や鼻紙を入れたのと、味のないことを並べたてたかと思ふと、「デルトケシキガヨウゴザイマス」と、途中の景はあつさりと說明して仕舞ひ、のみならず、大切な目的地到着の記事は殆ど皆無である。擔任教師は、

「ソレカラアトノコトガ、モツトアルデセウ」

と、朱文字で批評してゐた。其の通りで、本文例は尻切れ蜻蛉に外ならぬ。字數が多いが內容は充實してゐない。

（一）「ウレシクテ」は矛盾である。雨が降つてゐたのだから、心配で〳〵堪らないのがむ

しろ自然であらう。

（二）「ヲトコノ方カラ……」は說明が足りない。話してくれたのは、社長さんであつたが、「ヲトコノ方……」と言つた許りでは、小僧でも人夫でもよいことになる。責めて「ヲヂサマカラ……」とでも書けば社長さんと迄は行かずとも、この敬稱により、少くとも重役級であらうと想像されるであらう。（○印はよい所を示す）

「拙文とは何ぞや」に答ふる爲、左に表示する。

拙文
- 內容
  - 貧弱
    - 素質不良
    - 怠惰
    - 環境不良
    - 內容貧弱の原因を示す
  - 說明不足
    - 意味不通
    - 意義曖昧
    - 說明不足の結果その兩弊に陷る
  - 矛盾
  - 冗漫
    - 輕重を辨ぜずして、省くべきを省かず、省く可らざるものを省くこと多し
- 形式
  - 文の切地——斷續不當
  - 順序混亂
  - 用語不適
  - 句讀點の誤り、

右の表は、學問的に作成されたものでなく、只從來述べ來つた所を纒めたものに過ぎない。

內容貧弱の原因は、作者その人の頭腦が惡いか、頭はよくても根氣が續かぬか（この兩者は大抵相伴ふ）境遇が惡くて材料が乏しいかである。休暇中に避暑避寒したり、日曜祭日に遠足したりすることの出來るのは善境遇である。併し境遇はよくなくても、心掛一つで材料は幾らもある。文例13（お店の看板）14（ありのけんくわ）等は、このことを如實に證明してゐる。

以上、拙文の例として、二年生の作品を挾んだが（三年生には遺にあれ程の名文がないので）以下、三年生のものをあげて見よう。

（17）中楯先生へ　（書翰文）　六月十八日

六月二十六日の學げい會の日に、ぜひ、いらしつて、いただきたいと（一）思ひます。三年生がやるのは子供放送局（二）です。一・二・三年と（合同で）（三）やるのは十五夜のカチ〳〵山です。早く〳〵先生のお元氣なお顏が見たいと、みんなが思つてゐますから、どうぞ（四）（先づ）三年のおへやにおかほをだして下さい（ませ）（五）。お別れした時、あんなにさびしく思つてゐたのに、こんどもきて下さらなかつ

たら、どんなにさびしいでう。學げいの外、時々、いらつしつて、みんなの顔を明るくして下さい（ませ）（六）。

情味たつぷり。これでは先生も來ないではゐられまい。

（一）「思ひます」は希望を述べたので、鄭重な表現である。（二）「す」を省いて、文を續ける。（三）（四）（五）（六）の括弧内は著者の補つたもの。

五分間綴方

以下の五文例は「五分間」綴方の成績である。其の方法は

（一）四つ五つの題を示し、（二）一分間、文題選擇の餘裕を與へ、（三）五分の時間が切れたら、擱筆せしむ。（四）各學年に課することが出來る。

（18）　學校へのいきかへりの道　（六月廿一日）（通學の途中）

私はいつも學校へくる時、一番、目につくのはラヂオ體操です。ラヂオ體操をきくと、毎日學校で朝すること を思ひ出します。又かへりにはいつも目白えきまで歩きます。（一）それから電車でかへります。先はとちゆうでしやしん（時間盡く）。

此の先何を書くのか知らんが、書いた所だけ見ると、面白味はちつともない。

（一）驛まであるいて、それから電車で……」とする。「あるきまして、それから電車でかへります」とせねば惡いやうにも思はれるが、上半はぞんざいに言つても、下半が丁寧なら全體が丁寧に聞える。例へば「あなたさまが來ていらしやつた時……」と言へば「あなた樣がおいでになつていらつしやつた時」と言ふのと略同樣の敬語になる。反之「あなた樣がおいでになつてゐた時」では都合が惡い。序ながら一言しておきたいのは、「何してゐらつしやるの」など、書きたがるが「いらつしやる」の「い」は如何なる場合でも「い」で差支ない。これは「入らせられる」のつまつたものだからである。

（19）　おうちの子犬　（六月廿一日）

おうちの子犬は白と黑とのぶちです。とてもちやめでだれのげたでもくはへてあそんでゐます。この前

虫ぼしの時、おれ（え）さまのきものをひいて（敷いて）その上にねころんでゐます。おうちの犬はかはいい子犬（です）。

（六月廿一日）

（20）か　ほ

かほ、かほ、かほ（一）かほには、め、はな、口、まゆげ（二）、があります。口の所にめがついて、はなの所（に）口がついて、目の所にはながついてゐたらどんなでせう。笑ふと目と目の間にしわがよります。かほはただ見てもふしぎではないが、ふーぎなと思ふととてもふしぎでなりません。私はママやパからかたわなかほをもらはないでよかつた。

（一）黒丸の用法を教へる。（目・鼻・口・眉毛……等とするの類）。

（二）句點を省く。

本文は幾分哲學的である。此の種の作者中には、題材を觀察も玩味もせず、小理屈でお茶を濁すものもあるから、注意人物に屬する。但し此の文の作者（N・T）は眞面目なお子さんである。

（六月廿一日）

（21）スイートピー

おうちのかだん（花壇）には　スイートピーの花がきれいにさきました。赤も藤色も白も桃色もあります。まだつぼみも大（澤）山あります。（ましてとつゞける）みんな元氣にお日樣をみにうけてさいてゐます。

簡潔、美。

（六月廿一日）

（22）ぶらんこ

「ぎいこん〳〵」ぶらんこがゆれると、そこらのけしきが遠くへいつたり又近くにきたりして　おにごつこをしてゐるやうです。そしてスカートがふわりとふくらんで、とてもきれいです。

もう少しと思つて足をあげると、とう〳〵櫻の枝に足がつきました。ぶらんこは私たちのあそびあいてで、たのしくあそばせてくれます。

輕妙、奇拔。

（四月廿三日）（以下五分間小品ではない）

（23）三年生になつて

私は三年になつて　御本があたらしくなつたり筆箱やしたじきなどいろ〳〵のものが代つたので　うれしくてたまりません。おへやも代りました。六年のおねえ樣たちがそつぎようなさつて、新しい一年生が

はいつていらつしやいました。

私は少し（一）おなごりをしいこともありますが、うれしいことでむれが一ばいです。もうさくらも大ていちつて、（二）さくらの花が赤くなつたやうに思ひます（思はれます）。

（三）私はもう下のくみのおれい様です。

（一）説明不足なれども、六年生（卒業生）との別れを惜しむのであらう。私の學校では盛んな送別會をすることが年中行事の一つになつてゐるから、このことが惜別の情を唆るのでないかと思ふ。（二）不明。「芳野は大抵散りましたが、八重はふくらみかけました」などすれば風情を生ずるであらう。（三）得意でもあり責任も感じたのであらう。下級生の姉であるから、良模範を示し、慈愛をも垂れようといふつもりらしい。

（三月廿三日）

（24）がつかりしたこと

本文は二年終了直後の作、形式上は三年生だが、未だ一日も新學年の授業は受けてゐない（春休中の作）

こんど春休に、おんせんに、つれていつてあげると、お父様がおつしやつたので、おつうしんぼを持つと（貰つての誤）いそいでおうちへかへつて來ますと、みんなはもうあしたのしたくをしていらつしやいました。

私は「おくれては大へん」と、すぐお母様やお姉様のおしたくのおてつだひをしました。私はお母様からリクサックを出してもらつて、づが（圖書）とつぎり方のどうぐを入れますと、晳子お姉様が「これを入れて、ちようだいな」と、一ばいにもつをもつていらつしやいました。くみ子お姉様も、にもつをもつていらつしやいました。

するとお父様が「それ××子がもつのですか」（とおつしやいました、そして）「おもくてもてないでせう」とおつしやいましたので「うんもてるよ」とリユクサクをしよつてあちこちをかけづりました。

お姉様もうれしさうに　私のあとをついていらつしやいました。それから、トランクの並んだ所にリクサクをおいて見ました。

お父様はそれから一度しんさつ所に行きましたが、しばらくすると、しんぶんを手にもつていらつしやいました。みんなお父様に「お天氣ですか、雨ですか」としんぱいさうにききますと、お父様は「だめだ

め、あしたは雨がふつて來るさうだ」とおつしやいました。

私は今まで、よろこんでいたちからもなく、かね子姉樣をまくらにしてしまひました。哲子姉樣は、「ああ、つまんないの」とおだい所にいつてしまひましたし、久美子ねえ樣は「雨がふつてもしかたがない」といつて、外の方を見つめてゐましたし、元子姉樣は、おひばちにべつしやんこにはりついて、お火ばしで火をいぢくつてゐますし、かね子姉樣は「あゝ」といつて、おほきなあくびをしてしまうし、お母樣は「ほねがきうにいたくなつた」とおつしやいました。

私はがつかりした心をおさへつけて、みんなに「あした雨といつてもあたらないことがあるよ」といひますと、お父樣は「でもあしたはあらしだといつてゐるから、ほんとらしいんだよ」といひましたので、もりかへした元氣をなくしてしまつて「れよう」と私はおとこの中にもぐりこんでしまうと、みんなもまねして「れよう」「れよう」と、おとこにはいつてしまひました。

前半は少し諄いが、後半は前半の喜びに對照するに失望の感を以てし、秩序井然たるものがある。

登場人物は、作者自身と、兩親と三人の姉と前後六人であるが、銘々の言動を詳細に記憶して細述した許りでなく、或點までは各自の個性をさへ現はしてゐる。殊に作者自身の性格に至りては、末子でありながら、群姉に先んじて、之を統率して行くやうな瀟洒さまで見えてゐるやうに思はれる。人々の個性が漠然ながら現はれてゐるのは、精密に觀察した所を、浪氣よく、想出し〳〵綴つたからであらう。

三年生を終るに臨みて、三・四年生のモットーを再錄しておく。

一、見聞し、反省せることを（内容）

二、分り易く、面白く書く（形式）

第四節　四年生の綴り方指導

（七月三日）

（25）うちのねこ

うちにはかはいいねこです（この所、文なしてゐない）目は（一）ぱつちりとしてゐて　ひげは兩

方で（三）七八本です　おこるとおしりつぼをふつて目をまるくしてつめだしておこります　このごろうちへ來たので「みいこ」といふ名まへをつけましたが　うちの人はねこがすきなので　うちへいれてやつてゐます。そして私はねこをひるまだいたら目がいとのやうになつてゐて、よろだと（三）おだんごのようにまあるかつたので私はねこの目はなんとべんりだと思ひました。色は白とちや（いろ）で　おしりつぼはちやいろです　私はみいこがすきです。

結末に「みいこ」か好きだとあるが、どこが好きなのであらう。別に、可愛いゝ所はかいてない。詰り作者は、猫に就いて何を書かうとしたか——可愛いゝ所か、憎らしい所か、物凄い所か——文の主想を考へず、行き當りばつたりに書いたから、文の纏りが悪い。

この「何を書かうとしたか」といふのが、着眼點の第一だと思ふ。

（一）猫の目を「ばつちり」と形容するのは用語不當である。子供はよく「グル〳〵回つて　にやあにやの目」などいつて、まぶたに皺をよせて不恰好な形にして、（それを猫の目に擬する。バツチリと言へば愛くるしい意味を含め、猫の目の形容には不當である。

（二）ひげが七・八本では、理科の筆記然として無趣味であらう。

（三）「おだんごのやう」も不當たるを免れない。團子には長つ細いのもある。滿月とか玉とかいふときれいに、氣持よく聞えるであらう。些細の點まで注意して事情の許す限り美しく書かねばならぬ。

（26）　私の家の小犬　（七月三日）

私の家の小犬は眞黒でエスといふ名です。この前の日曜につれてきたので、直ぐ弟とブランコの回りやぶどうの木の回はりを　あつちへ行つたりこつちへ行つたりしてならしてゐましたので　一日で家をはなれて（一）外へはこはがつて出ません。私が外へ出て弟とおにごつこをしてると　エスが來て　私のあとや弟のあとをちよろ〳〵くるので　あぶなくて　あまりかけられません　私がつまづくと　エスはその間一人で芝をかんでじやれて　ころ〳〵ころがつては又おきて　又ころがつて何ども〳〵やつてはきやん〳〵ないてゐます（二）それでも今では私がうちへ上れば一人でうんどうしてゐます。

小犬を可愛く動かせてゐる（主想明瞭）。

（一）は少しく曖昧になつてゐる。「うちをはなれて」は無論下句へ續くのであるが、一讀した時、上へつくのかとも思はれた。再讀三讀すれば分るけれども、願くば一讀して分るやうに書かせたいと思ふ。（含蓄の深い文章なら止むを得ないが）。「たつた一日でなれてしまつて、外へ出るやうなことはしなくなりました」などすれば通じ易いであらう。（二）「ゐました」とする。

（二）お家のお庭　（七月三日）

私のお家のお庭には（一）色々の木や池があります　お母様はよく松の葉に水をおかけになつて　ぽたぽたとおちるのをごらんになつてゐます。私はお池の大きな石に水をかけるのが好きです。お池には金魚がゐます　お砂場もあります（二）私たちはよくそのお砂で遊びます。お池のまはりの木に水をかけたりします。お玄關の方にはつつじや（三）いてふがあります。そのいてふはずゐぶん古うございます。お庭にはお花はぽたんとつつじぐらいですけれども　木がたくさんあります、私は又ぽたんのさくのをたのしみにまつております。木には私のしらない木が（しらないのが）一ばいあります。（四）自分の家の木であ

りながらしらないからはづかしく思ひます。

本作品は材料も豊富で、庭内の宏壯なることをも想像せしむるものがあつて、斷然拙文ではない。惜らくは順序が錯雜してゐる。先づ庭園中の池邊から起筆して、母親と作者自身とを活かしてゐる。次には砂場に移り、再び池に歸りて、石に水注ぐことを重複らせてゐる。それから表門の方を述べて、再び庭園にかへつてゐるなど、所謂出たり入つたりする文章になつて了つた。若し、第一、池を中心として花卉草木を細敍し、第二、砂場、第三、玄關方面としたら、良い文章になるであらう。筆はのびてゐて、たちのよい方と思はれるから、僅かに指導せば能文家を養ふことが出來る。

（一）「色々の木や池……」では、池は一つなのか、幾つもあるのか分らない。（色々が池にもかゝるやうだ）。「お池や色々の木」とせば曖昧を免れよう。（二）「お砂場もありまして……とつゞける。（三）「つつぢや、ずゐぶん古い公孫樹があります」に改む。（四）結末のやうな告白を利用して、自然研究（理科）に導入すべきである。

（28）夏休を待つ　（七月三日）

もう直ぐ夏休です。私はつうしんぼが（を）見たくてたまりません。夏休が來ると、（一）海へ行つたり山へ行つたり　水遊びをしたりします。晝御飯がすんでから　本（課外的・娯樂的讀物）を讀んだりしてゐると、方々でせみの聲がします。とんぼもあつちこつちにとんでゐます。夕方頃になると、私はお姉樣と妹達とではだしになつて水まきをします、晩は夜店へ行くと金魚や植木を賣つてゐます。本とうに夏休は面白う御座います。

これは田舍へ行くのか、都市で夏を送るのか分らない。冒頭に、海や山へ行くとあるから、地方へ避暑するのかと思へば、田舍らしい所は殆どなく、夜店などは全然大都市風景である。

（一）「海へ行つたり、山へ行つたり、水遊をしたり」とあるは、作者自身が、年來避暑する例になつてゐることをいふのか、それとも、一般都人士の習慣を意味するのであるかが、曖昧不明である。若し前者とせば、「私は、山へ行つたり……」とせねばならぬ。又、句點の打方も並列せる同種の語句の間には、これを施す規則になつてゐるから、「海へ行つたり、山へ行つたり、水遊……」とせねばならぬ。

作者は筆も伸びて居り、漢字も豐富で、實力もあるやうであるが、材料選擇を誤つた爲、曖昧な、朗らかでない文章になつて了つたのは惜しむべきである。

（七月三日）

（29）私の頭

作者は最近轉校して來た子である。補缺試驗の際、算術讀方は優秀であつたが、綴方は中以下であつた。しかし、本文例は、實感を寫しただけに、佳作たるを失はない。私の學校兒童が、皆おかつぱにしてゐるので、家庭協議の結果斷髮したものらしい。

暑苦しい程のびてゐた私の毛を　この前に切つてしまひました。きる前にお姉さんたちが　すいぶんのびてゐるネといくどもいひました　それでは切りませうといひました　お母樣とこやさんへ行きました。とこやさんの家には　四方にガラスが（を）はつてゐます。私は毛を切るとどんなかほになるかと思つて　毛をまるめて見たりしました　しばらくして私の番がきました　とこやのおぢさんはせつかくのびた毛を　おしみ（をしげ）なく　ちよん〳〵と切つてしまひました。お母さんはおもひきりがいいなあ　と思ひましたが　なんとなく（何げなく）かほを上げると　お母樣の笑ひ顏が前のか

が見にうつりました。まもなくすんで、とこやの店を出ました　かへるとちゆうは　はづかしくて頭をかかへてかへりました　おうちへかへると　お父さんが　見ただけでも涼しくなつた　と、おつしやいました　私はにつこり笑ひましたが　目からはなみだが出ました。

文章が切れ過ぎ、引用符も句讀點も殆どなく、言葉遣も上品とはいはれないが、眞情流露、血のでるやうな文章である。

（昭和七年十二月〔四年生〕）

（30）妹がほしい

「あゝ、妹がほしいなあ」私はよくこんなことをいひます。「ひとりつ子位つまらないものはない」と私はいつもさう思つてゐます。どこかの御兄弟が仲よくあるいていらつしやると、よくお母様に「私ひとりぼつちでつまらない。妹があれば可愛がつてあげるのに。」「でもけんくわをするでせう。」「しないわよお母様」かういひましたがお母様は相手になつて下さいません。

妹があつたらどんなに可愛いいだらう。そしたら私は色々なものをつくつてあげる。近所の小さいお子さんがゐると、あゝ、私はどうしてひとり子に生れたのであらう。おもちやなどたくさんあつてもつまらない。どうして！〳〵妹がないのであらう。妹、妹、あゝ妹がほしい、あつたらどんなに可愛いいだらう。

けんくわなどしないやうに私が氣をつければいいのだもの、私は何でもいいから妹がほしい、私にどうして妹がないのであらう。私は、私は、さびしい〳〵ひとり子なのですもの、妹があれば一日たのしくしてゐられるのに……お友達はあるけれど、私は妹がほしい、可愛いい可愛いい妹がほしい。

空想やら愚痴を打返し繰かへし述べて、纏綿たる情緒を遺憾なく表現してゐる。これ亦眞情流露の文であらう。

所謂のびた文章であるが、愚痴つぽい文章はかうなる所に、やるせない思ひがあらはれるのであらう。

瞳しく打連れて行く姉妹や、近所の少女を敍するあたり、幾分描寫の崩しが見られる。

（六月廿九日）

（31）學藝會

六月廿六日は　私共のまちにまつた學藝會であつた。……一時（午後の）になつてとう〳〵會が始まつた。だんだん（プログラムが）進んで今は楠公のまつさい中である。學校でいつもさらつてゐたから　對話も唱歌の方もうまくできたと思つた。「子供の國」のお醫者様はとてもこつけいなかつかうをしてゐる

ので私はふき出してしまつた。

右は四年生中、口語常體で書かれた唯一の作品である。私は別に文體の注文をしないで、只何時頃から此の文體を自發的に書き始めるかを觀察してゐる。早くて三年生の終りか、四年の初め頃になると大抵書き始める。此の種の作品が現はれ始めた時、全級に注意を與へて、「こんな文體もある」ことを說き聞かすことにしてゐる。

（32）電車の中　（昭和七年度四年生）

越中島で電車に乘つた。席がないので立つてゐると、さかなやさんがあとから乘つて來た。魚屋（肴屋）さんは荷物を下して私のそばに立つた。生臭ひ、いやなにほひがして來る。あんまり臭いので向ふの方へ行かうかと思つたが、魚屋さんが氣をわるくすると思つて我まんしてゐた。もうすぐ下りるだらうと思つてゐたが、なか〳〵下りない。私は我まんし切れないで、とう〳〵くるりと後を向いた。やつと臭ひがしなくなつたので安心した。と、すぐ魚屋さんは下りた。入れかはりにふとつた人が乘つて來た。一人の席では足りない位だ。車掌さんが來た。ふとつた人はふところからがま口を出して、七錢出して車掌さんに渡した。私は、あんなにふとつて（ゐて）も一人分しか拂はないのか知らと思つた。席があいたので（私は）すわつた。飯田橋へ來ると、急に込んで來た（來る）。小さな子供をつれた人が乘つて來た。お隣りにすわつてゐた人は立つて上げたので私も立つた。其の人は先に立つた人にお禮をいつて、今度は私に、「ありがたうございました」といひながら、五・六べんもさいけいれいした（する）。私はほんとうによい事をしたと思つてうれしかつた。

之も口語常體で書いてある。

比較的に長い文だが、殆ど無駄がなく、人情もあり、ユーモアもある。

（一）冒頭が、さつぱりと、氣持よく下されてゐる。三年以下では眞似が出來ない所だと思ふ。

第五節　五年生の綴り方指導

（33）私の泣顏　（五月十六日）

私の泣顏ときたら、頭の先から足の先までゆごかして泣くのです。口を思ひ切り大きくあけて、目を細くして鼻をゆごかし、まゆ毛を上へやつたり、下へやつたりして、目からは雨のやうな涙がおちて來るとそれを知らないで、口へ入れてしまひます。手を目の所へやつてこするからたまりません。目のふちが眞黒になつてしまひます。私の泣く時は、始め、目に涙を一ぱいためてから、すぐお勝手にきて、それから思ふぞんぶんワア〳〵と泣くのです。それが私のきまつた泣方です。目に涙をためて泣きさうになる頃、ワハハと笑ひ、また今度はワアーと泣くのです。これが私の泣顏です。

此の文章は、何を書かうとしたのであらう。別言せば、綴文の動機或は目的は何であらう。單なる滑稽であるのか、淺ましい、醜い自分の姿を告白懺悔して、將來の戒めとする積りであらうか。後者とせば、滑稽の間にも悔悟の情が隱見する筈であるが、本文の關する限り恐く前者であらう。狙ひ所の極らまい、ふわ〳〵した一片の駄洒落に過ぎないものと思はれる。

（九月十七日）

（34）私のひとみ

まあるい瞳の眞中には可愛らしい子供がゐることゝ、あります。青い〳〵空がうつることもあります。優しいお母樣のお顏も、美しい景色も、凡ての物が私の瞳の中に入つたり出たりしてゐます。寫生をする時には私の瞳は、赤い、美しい花或は若々しいはつばが寫ります。そしてクレオンや繪具の色と、實物の色が同じやうになるのをうつします。理科の時には、テノルフタレンを炭酸ソーダに入れると、赤くなることなどを寫します。又讀本や、爲になる御本の字をうつしたり、お習字の手本をうつしたりします。陽炎のもゆる春の野、黄蝶の群れ飛ぶ菜の花畠、白帆の浮ぶ青い海、青々とした松林、とんぼのとぶ秋の山、紅葉のはえる美しい林、銀色の世界、雪の朝、鳥の飛ぶ夕景色（夕燒空）それ等の美しい天然の世界も瞳にうつります。瞳は物にたとへば、色も（色まで）うつる寫眞機とでも言へませう。私達はこんない寫眞機をもつてゐるのですから、これを大切にして惡しくしないやうに氣をつけませう。

前文に比べると、如何に眞面目な力作なるかゞ一層明になる。

文の構造は、最初に總說、次に學習と目、第三、自然界と目といふ順序に述べ、結論として此の貴重の賜を感謝し、これを愛護すべきことを論じてゐる。論文の一種と見ることが出來る。然かも抽象的說明を避けて餘程まで描寫的になり、四年以下の作品とはかつきり區別あるやうに思

はれる。

（35）梅　雨

（六月廿八日）

今まで勉強してゐた私は、ガラリと前のガラス戸をあけて空を眺めた。空は鉛色、地面は水たまりで一杯だ。鉛色の雲は次第々々におちて來るやうに感じられる。外はしと〳〵と雨が降つてゐる。ガラス窓にはいくつかの水玉がくつついては落ちしてゐる。本箱も机も凡ての物がみんなくらく、つまらなさうな顏をしてゐるやうだ。それにたんすも何もかもしめつてゐるやうに私には思はれる。この樣子じやあ、學校へ行つたつて、好きなセンター爪ールだつてなんだつて出來ないと思ふと、この雨がにくらしいと思つて、自然に手をふりあげてドシンと机をたたいた。あゝ、變な日だ、いやな日だ。

五月雨の不快な方面を高調し、これを主想としてゐるから文章はよく纏つてゐる。机を叩いて憤慨する所に、如何に晴天を憧憬るかの情も見えてゐる。併し次の文例と比べて見るのも面白いであらう。

黑點は描寫的傾向ある部分である。

（36）梅　雨

（六月廿八日）

あゝ、（一）今日も雨だ。私は雨はあんまり好きじやないんだけれど、（二）お母樣は「やれ〳〵今日も雨だ、おかげでおハネさん達がおとなしくなる」なんて喜んでいらつしやる。雨でも降らないと遊好きの私には勉強する時がないからだ。それに六月の雨が降らないとお百姓さん達は大變に困るさうだ。雨を喜ぶお百姓さんたちの姿や、赤いたすきをかけた女の人達が、田植唄でもうたひながら菅笠を並べて田植をしてゐる。そして遠くの方には（遠く）紫色にかすんだ山や森が重つてゐる。雨がふると私はいつでも、お緣がはの籐椅子に腰かけて勉強しながら、こんな景色を頭の中に描き出す。そしてハツとして又勉強に取りかゝる。でも私はすぐお百姓さんたちの事か頭にうかんで來る。それにお姉樣が此の間から一週間もかゝつてやつと出來た繪、それはきれいに晴れたお空にちぎれ雲が、二つ三つうかんであて紫に山山がかすんでゐるのが背景に、赤いたすきをかけた女の人達が田植をしてゐる。お姉樣はそれが出來た時大得意で「どう、けいちやん、田植唄が聞えない」なんて（ゐばつて）ジーツとその繪に見とれてゐる。私はおれ樣程うまくないので、せつかくのゆめを破られるのがいやなので、その代り頭の中でそのゐよりもつとゝきれいな景色をかいてゐます。雨が降ると私はお姉樣みたいに晴れた空でなくしと〳〵とふる雨の

中で田植をしてゐるを書かうかなと直ぐあの繪のことが頭にうかんで來る。

前文例は室内と庭園とだけ見てゐたが、本文は、想像又は思惟によりて、眼界が大に開けてゐる。眼界は狹くても、その極限された範圍内で、どんなにも深く書けるのであるから、廣狹を以て良否をきめる事は出來ないが、眼のつけやうは色々あることを心得させてよいと思ふ。そして本文は美しく朗らかに出來てゐる。姉の影響もさることながら、その影響を受け得るだけの素養は作者の側にあるのである。

（一）（二）句點の打方に就いて、次のやうな規定がある。

（1）獨立の感嘆詞及び呼かけの語の下、及び並列的に置きたる時は其の前後に句點を施す。

（イ）ああ、彼は如何にして日を過ごすならんか。

（ロ）お父さん、あなたは何處へいらつしやいますか。

（ハ）向ふに見えるけしきは、まあ、きれいでございませんか。

（ニ）それでも、にいさん、雨が降つたら、しようがないではありませんか。

（2）ども・ば・には・て・時・間・處・際・限・外等の如き接續の語に導かれたる長き語句又は凡て副詞の意趣を有する長き語句の下。

（イ）友達は頻りに上京を勵めるけれども、兄はそれに贊成しない。

（ロ）酒と煙草は衞生に害あれば、之を禁ずるを可とす。

（ハ）知らせによりて巡査が來た時には、賊は既に姿を隱してゐた。（以下略す）

（3）並列せる同種の語句の間。

（イ）此の文は平易に、正確に、且面白く作られたり。

（ロ）みなりは惡い、併し身分はよささうな子。

（ハ）わらびを採るのは春で、茸を採るのは秋だ。

（37）××ちやんへ　（十月廿五日）

（病氣轉地の友人への書翰文）

××子さん御病氣如何。病氣つてずゐ分つらいものれ。私も一學期の終からずつと八月頃まで寢てゐて、

する分つらひといふことがよく分つたわ。學校でも××子ちやんがいらつしやらないのできみしいわ。勉強の方はこの頃れ、讀方で書取をヒステリーになる程やつてゐるのよ。あつ、さう〳〵、○○先生（女先生）はれ、此頃すつと洋裝なのよ、そりやすてきよ。早くからだを直して○○先生の洋裝（姿）を見にいらつしやいれ、さよなら。

病人に、學科のことなどいふのは神經を尖らせること……と氣のついた作者は、「あつ、さうさう」と一轉せる心遣は用意周到。

先生の洋裝見たさに歸心を唆るであらう。他の一兒は、先生の洋服に關して次の如く、

「……あのね、○○先生がお洋服になつたの……此の間讀方の時間に、手紙文をお習ひした時、「候を使つて短文をお作りなさい」といふ問題があつたのよ。その時、私達が考へつかなかつたので、先生が作つて下さつたの。「私事この頃胃下垂にて甚だ困り居り候、醫師の注意によりて意を決し、洋服に致し候」ですつて……」

（38）　××ちやんへ　（十月廿五日）

××子ちやん御病氣はいかゞ。……××子ちやん今お教室の中で皆××ちやんへのお手紙をお書きになつてゐます。檜山さんは目の色かゞやかせながら黒板を見つめてゐます。大山さん、旭さんは首をたてよこにふつて何かお話をしていらつしやる樣子です。石橋さんが頭をかきながら大きなあくびをしました。木の葉や枝からしづくがぽたり〳〵と地面へ落ちて行きます。○○先生はぐる〳〵とお教室をまはつていらつしやいます。茶色のお洋服に目鏡をかけた先生が、おや〳〵黒板の前の（教卓上の）菊の花の香をおかぎになりましたよ。皆、アハ……オホ……と笑ひ出しました。チヤラン〳〵〳〵〳〵、あら××ちやん、かれがなりました。ではもう終りにしませう。御病氣御大切に、さよなら。

輕妙、朗らか、目に見るやう。

（39）　皆樣への御返事　××子

皆樣、お手紙をどうも〳〵〳〵ありがたうございました。

朝飯をいただいてゐましたら、ねえやが「××子樣」と大きな聲で私を呼んだので、何かと思つたら澤山手紙を抱へてお室に入つて來たので、いつも、お父樣ばかりに來るので、おや〳〵今日は何時もより澤山來たなと見てゐたら、「ハイ」といつて私に渡したのでびつくりしてとび上りさうになつてしまひまし

た。とても〳〵うれしくて御飯もたべたくなくなつてしまひました。大急ぎで一つ〳〵封筒の口をあけて「あゝ、これは誰さんのだわどんなことがかいてあるかしら」とたのしみながら封を切りました。おもしろさうな遠足のことを見ると、私も行つて見たかつたなあと思つたり、皆さんがこんなに私を待つてゐて下さるんだから早くよくなりませうと思つたりしながら　む中になつて食後のくすりや八時の熱を取るのを忘れてお母様やねえやに注意されたりしてやつとやつた位です。

夜れる時、皆さんのお手紙をまくらもとに（一）三段にズラリと並べて寝たらお母様やお姉様に笑はれてしまひました。私は何だかおたからがふえたやうな氣がしてうれしくて〳〵今日も出して讀みました。おいしやさんが後、二週間もしたら學校へ行けるとおつしやいました。早く〳〵二週間たてばよいと思つて、學校に行ける日を待つてゐます。皆さまほんとうにありがたう存じました。

（一）「ズラリと三段……」は不明であるが、母なる人の、受持教師に對する禮狀によると封筒の大さにより、三種に分類して、同一のものを一重ねにし、三重ねの手紙を枕頭に行儀よく並べたといふこ
とである。

眞情流露、目頭があつくなる。

以上、手紙の取り遣りによりて、學友相互間は固より、××子の兩親が學友と學校とに對する感謝は實に非常なものであつて、訓練上と家庭との連絡上の效果は、私共の豫期しなかつた副産物であつた。

（三月五日）

（40）先　生

先生！　と只言つただけでは、少しも不思議ではなかつたのに、この頃はすぐ變な事が頭に浮ぶ。それは先生はなぜ私の心を見ぬくことが出來るのだらうと思ふ。算術の時間でも……（數文字不明）私は出來ないで困つてゐる。そして「手をあげようか、でも間違つてゐる」などと、びく〳〵してゐる時に限つて「原野さんその問題はどうやりましたか」などゝさゝれる。又よく出來て、元氣よく手をあげてゐる時に限つて、さして下さらない。私が出來ないのに、出來たふりをしてゐても、先生にはちやんとお分りなのでせう。「出來ましたか」など、笑ひながらこちらの方をごらんになる。私はその時、如何にも私ばかりにらまれてゐるやうな氣がしてならない。又お宿題の分らないのをぬかして來ると「向ふのはじから順々に」などとおつしやつて、間違つてゐる問題がちようど私の番に廻つて來る。きつとおもくし（お默思——毎始業前一分內外の間、師弟ともに默思して心をおちつける）の時に、一回り私共の顏を御覽になつ

て、分つておしまひになるのであらう。讀方の時間でも「書取があるといやだなあ」と思つてゐると、先生がいらつしやつて「皆さん、おけいこしましたか、四頁をあけて」とすぐやられる。お忘物をしてびく〳〵してゐると「お宿題がありましたね」などとおつしやつて、とう〳〵お立ちになつてしまふ。そんな時には先生は少し意地わるだと思ふ。けれども、よく勉強して來た時は得意なものだ。わけでもどし〳〵分るので、時間が終つた時、「皆さん、とてもよく出來ましたね」などおつしやられると、大に自分に言つて下さるやうな氣がする。地理・歴史・理科皆さうだ。綴方の時間の批評の時、分つてゐても手をあげないのが私のくせだ。その時間が終ると○○先生に、「原野さんは勇氣を出さなければ駄目よ」と肩をたたかれてびつくりする。「今日も手を上げたり下げたり、先生が一生懸命、目ではげましたのに、分らないの」などゝ目くばせをなさる。……又學期の面會（學期末に於ける、教師と各兒との個人面會）の時、私がいへないで困つてゐると、「かうなんでせう」と、ほんとうに思つてゐることをおつしやる。私だつて、「あの方、あんな顏をしてゐる、きつと寒いのだらう」位の事は分るけれど、先生のやうに心の底から見拔くことは出來ない。そこが先生のおえらひ所であらう。一生懸命勉強して正直にさへしてゐれば、先生のことをこはいなどとは少しも思はなくなるだらう。

作者の心理・殊にその個性が分る。教育上の參考に資し得ること大なるものがある。

（41）　お姉樣があつたら　（一月廿二日）

私は毎日「お姉樣があれば！〳〵」と考へる。だけれども、幾ら神樣にお願ひしても、かなへない望だ。でも、よその方はいやだ。餘所の方なら本とうに可愛がつて下さらないに違ひない。私は時々「お姉樣がどこかにいらつしやるんぢやないか？」と考へる。又夢にお姉樣があらはれて、一晩中お話の、とても面白いのをして下さつた。それはあざみやすゝきの由來だつた。後で、お姉樣があつたらほんとうにあんな面白いお話が聞けると思ふと、そばで折紙をきざんでゐる妹を見て、この妹がゐなくつて、其の代りにお姉樣が生れゝばいいと考へたりした。そして私はやつぱりどこかにお姉樣がいらつしやるやうで、まだ望をすてゝゐない。

愚痴る所に熱情が現はれてゐる。結末、どうしても諒らめられない氣持がとても深刻であつて短いけれども深みがある。

しと〳〵と花を散らす春雨、若い柳の上にふりそゝぐ五月雨、青空が見る間に黒雲にかき消され、大粒の雨が滝のやうにふる夕立。雨も四季によりて色々に見られる。木の葉がだん〳〵色づき始める頃に降る物淋しい秋雨、櫻やかへでの紅や黄にそまつた葉の上にしと〳〵とふり注ぐ秋の雨は、ほんとうに美しく又物淋しいものである。銀の糸のやうな細かい雨が、さいてゐる野菊にふる樣子はほんとうに秋らしく感ずる（感じられる）。一雨降る毎に山は錦で織りなしたやうに美しくなり、林のそこゝゝにはきのこも出るやうになる。ちら〳〵と花を散らす春雨も美しいが木の葉を散らす秋雨はまことに物淋しいものである。春夏の雨を客として秋雨を喚び出すあたり、理路井然、子供には一寸珍らしい程の思惟過程であり、技巧である。

此の文は併ら、考へた文で、觀た文ではない。別言せば說明的で——「美しい」、「物淋しい」などの說明語が連發されてゐるのもこの爲——描寫的ではない。此の種の兒童に對しては、この頭腦を補ふに、其の目を、今少し盛に活らかすやうに指導する必要がある。そして私共は現にその方針を採つてゐる。此の兒が、翌々年の冬（六年三學期）には次の文を書いてゐる。

（42）たき火

パチ〳〵〳〵、庭を見ると炭俵や紙くずがもえ始めてゐる。私も外に出て見た。とても寒い。はく息が眞白い。セーターのポケットに手をつつ込んでぼんやり立つてゐる弟達の鼻が眞赤だ。炭俵から、眞白い煙がもく〳〵上つてゐる。「エンマクだ〳〵」、弟達はわざと煙の中へとびこんで行く。パチ〳〵〳〵。煙が庭ぢゆうを包んでしまつた。煙の中にポーツと浮ぶ木のかげが美しい。だん〳〵炎が出て來た。かぢかんだ赤い手をみんなたき火の上にかざしてゐる。妹が竹の棒で炭俵をつついた。急に火の勢がよくなつて來た。炎がさつと大きくなる。「おうあつたかい」風向が變つたと見えて炎は私達の方へ向いて來た。皆顏をおほつてにげ出す。縁がはに、先つきお母樣がおいていらつした年賀狀の束を火の中になげ入れる。火の勢がよわる。しばらくすると又もえ上る。煙をとほして見ると、どこの家の屋根にもしもが光つてゐる。軒場（軒端）の物干に雀が二三羽さかんにさへずつてゐる。ザク〳〵〳〵、霜柱があとから〳〵たふれて行く。まるで水晶のやうだ。花だんの草木はすつかり枯れて、黄色い莖にうす白く霜が下りてゐる。（下りてゐて）その横のお池にもすつかり氷がはつてゐる。靴のさきで一寸つゝくとわれてしまつた。つめたいと知りながら指先でつまんで見た。ふと見るともうお庭には誰もゐない。たき火のもえ殘りから

（昭和十年二月　前同人）

すうーつと煙が上つてゐる。もう八時頃らしい。寒いけれども氣持のよい日曜の朝だ。

全然描寫的で、目の文章である。「ふと見ると庭には誰もゐない」時分まで觀察に餘念のなかつた結果の凝集である。作者は最優等兒であるから、指導の效果も著しいのであるが、何の子でも分相應には發達するものである(目下私は、此の種の、綴方發達の縱の研究に着手してゐる)。五年生を終るに臨みて、五・六年のモットーを擧げておく。

(一)　見聞し、反省し、內面的に熟慮せる所を(內容規定)

(二)　眞劍味と新しみと深みとを以て表現す(形式規定)。

文例41には眞劍みが、本文例(42)には深みがあるのではなからうか。そして文例34(私の瞳)のなどは可なりに新鮮味が出てゐると思ふ。

第六節　六年生の綴り方指導

(43)　綴方の時間　(四月下旬)

月曜の四時間目、ピーがなると、あゝ、綴方の時間だ。あゝいやだ。一體こんなもの誰が作つたのかしら(綴り方といふ如き敎科は何人が規定したのか知ら)しやくにさはる。その作つた人何處にゐるのかしら、其の人の所へ行つてだんばんして來ようかしら、でもそんなことをしてゐたら綴方がかけなくなる。もうあきらめて書かう。

題がない。後を向いたり、前を向いたり、お隣に話しかけて叱られたりして、やう〳〵題をさがして書き始めようとすると、何をかいてよいのか分らなくなつてしまふ。私はどうして〳〵こんなに綴方が書けないのか知ら、自分ながらも情なくなる。高岡さんなんかいつも〳〵あんなに可愛らしく、よく出來て。一つ高岡さんの所へ出かけようかしら……

第一段は重苦しい駄洒落で、ちつとも可笑しくない。第二段は幾分落ついて、より眞面目に煩悶の氣持を現はしてゐる。作者の噂した高岡さんは次のやうな文を書いてゐる。

(44)　木枯　(十二月中旬)

木枯さん又今年もやつて來たのね。冬なつれて。そしてお正月やクリスマスのサンタクロースのおぢいさんもさそつて來てくれたでせう。木枯さん遠い國からくたびれた？　そんなに、雨戸をたたいちやだめ

よ。寒さうな木をゆすぶつちやかはいさうよ。これ〳〵木枯さん、かはいさうなお庭の木に、お正月には
きつと〳〵暖い（一）オーバー（雪）を持つて來てあげてね。
木枯さんのいたずらつこ！　お窓の下を通る人の外套のえりを立てさせたり、みんなを驅足にさせたり
して。でもあなたの力は大きいわね。世界中の人を冬へ〳〵とあゆませるんですもの。
木枯さんお庭の落葉たちがきつとあなたを待つてるわよ。いつものやうに今年もあなたと鬼ごつこがし
たいつて。お庭のすみへ、木のかげへ葉つぱさん達を追回はすのも面白い？　冬中淋しい木の葉さん達の
お友達になつて上げてね。

表現法に新味があつて、内容も朗らかだ。

文例43に於て兒童の精神的煩悶狀態を描寫せる作品を擧げた。その文中に、高岡といふ級友の
噂があつたのに因み、一寸道草を喰つて、その高岡の作品をあげた次第であるが、話は本筋に戻
つて、煩悶的文章を尙二文許り擧げて見よう。

（44）女學校面會　（二月下旬）

（女大附屬豐明小學から同上附屬高女へ進入直前に行はるゝ口頭試問のことを面會といふのである）

あゝ、とう〳〵面會の日が近づいた。あと四日だ。前の日（面會前日）の木曜日は、どんな氣持であら
う。それよりも（當の）金曜日は？　金曜日〳〵。いつもは何でもない金曜日だが今週の金曜日は私に取
つて最も恐しい日なのである。女學校へ午後一時から行くのだ（一時までに行くのだ）。面會の時、段々私
の番が近づいた時はどんな氣持であらう。私の番が來て、長い廊下をつたはつて、ドアを開けたとたんに
大勢の先生方がズラリと並んでいらつしやつたらどうしよう。そして若し、先生の問に答へられなかつた
らどうしよう。あゝ、心配だ。先生がお一人ならいいのだ（けれど）（一）若し大勢いらつしやつたらほん
とうに困る。どうか（先生が）（二）お一人ですやうに。そしてよく答へられますやうに。私は心配で〳〵
たまらない。

（一）　括弧内は著者の補つたもの、（二）は省くべきもの。

煩悶が可なり深刻に現はれてゐる。そして同じ意味のことを繰返した、延びた文に屬する。深
い感情を表現する爲にはどうしても延びるものらしい。

八波則吉氏は（『文話文例少年模範文』三四一頁）、詰つた文の適例は、尋常小學讀本卷三の「四方」

といふ課であり、延びた文は其の次の課の「私の村」だと言つてゐる。尚讀本は、小學校のでも中等學校のでも、上記兩種の文章が混ぜてあり、廣告文や通信文は詰つたもの、講演や小説の文は概して延びた方だと附記してゐる。

（45）私のせい（脊）　（二月中旬）

私はどうしてかうせいばかりのびるたち（素質）をもつて生れたのであらう。お母樣のせたけを通りこして、今やお父樣を抜かうとしてゐる。よく、お友達に、頭から押して縮めてもらうがきゝめがない。私のつくづくいやなことは電車の中である。滿員の人込みの中で立つてゐても、自分より高い人はめつたにゐない。（若し）ゐると、私は「何て高い人だらう」と美ましい氣もするし、又自分より高い人がゐるかと思ふと嬉しい氣もおこる。

今朝のことだつた、今日は國史の試驗なので、電車の中で國史の本を見るつもりだつた。さて電車に乘つて腰をかけると、兩方から女學生にかこまれてゐて、私とせいは等しい。二人とも女學校の教科書を讀んでゐる。私は小學校の本を出して讀む氣がしなかつた。暫く女學生のおりるのを待つてゐた。女學生はおりた（とう〳〵その人達はおりたのでとする）。私はほつと胸をなでおろした。それから本を出して、かくすやうにして見ようとしたがどうも氣がおちつかない。前に人が立つてゐてのぞき込んでゐるやうに思へ又色々の人の目が私を見てゐるやうな氣がしてしまひ、本を出したり、しまつたりして迷つた。

私は思つた。もうすぐ女學校へ行く、そしたら今度は大ゐばりで本を見て、小學校の分まで取りかへして見せると。本とうに損だ。私が小さかつたら、もつと本でもどん〳〵見てゐればれるのだがと、つく〳〵思つた。

煩悶のうちに輕妙な所がある。

以上は何れも（44は例外）煩悶を描いた文章を、その深淺に從つて並べたものである。以下理科的題材を文章化する上に必要な注意を述べて、指導者の參考に供したいと思ふ。

（六月廿三日）

（55）私は蟻である　（一）

私は蟻である。冬の中澤山食物をたくはへてゐるので、あとは大へんらくであるが、決して遊んでゐない。今でもあなた方が、學校で勉強を一生懸命してゐらつしやる時、私はせつせと住家へ食物を運んでゐ

る。私たちの住家は或家のお庭にありますが、いたづらな坊ちやんが家の中に水をどん〳〵おいれになるので、苦しくて〳〵たまらなかつた。……私はあなた方に悪いことなどしないでせう。でも私の仲間の中にはあなた方の足や手をちく〳〵さすのもゐるけれど、さう害は加へない。……これからは仲よくして私は食物を貯へ、あなた方は一生懸命勉強して行かうではありませんか。

此の文章は第一、蟻に就いて何を書かうとしたのか、其の目的が明かでない。のみならず、五六年生綴方のモットーには、其の表現形式としては、眞劍味と、新しみと、深味との三つをあげてあるが、此の文の眞劍味が果して何處にあるであらう。作者は要するに、蟻に同情を有つてゐるやうであるが、それならば蟻の長所、美點を根氣よく列擧して、蟻の爲に萬丈の氣を吐き、眞にその愛すべきものといふ考に共鳴せしめる様に書いてこそ、眞劍味ある文といひ得るであらう。例へば蠅や毛虫の死骸を形付ける掃除人夫（の如きもの）だとかいふ有益な方面を大に高調すべきである。作者は「蟻の中にはチク〳〵刺すもの云々」といふけれども、其の毒針は一般に退化して、人を刺すものは極めて稀なのである。然るに極めて稀な例外の場合を態々もつて來て、蟻に對する同情を殺ぐやうな材料を持出すのは拙の極である。蟻は又疊の上にあがつたりして蒼蠅いものであるが、それは子供らが菓子のかけらなどを落すから悪いとでも書いて相互に戒むるなど、蟻の無害、有益な點を高調して、熱心に、眞劍に蟻の肩をもたねばなるまい。此の眞劍味があらば、深味は勿論、或度迄は新味も出るであらう。蟻は本來害虫の内に算へられてゐる。而かもそれに同情したとしても、綴り方としては何等差支ない（蝶も同様）。

蟻といふやうな題で書くならば、大にその形態なり發生・動作（生態）なりを美化してその文藝的價値が發揮するか、或は理學的に、一般人が知らないか、氣附かないやうなことを（例へば蟻の身體のくびれ工合の蜂などと異つた點を擴大鏡で取調べるなど）調査研究した所を書いて讀者を啓發するとか、詰り、美化か、理學化かによりて、讀者を教へるとか喜ばすかする所がありたいものである。

「私はあなた方に悪いことなどしない……」といふが、砂糖を嘗めたり、一般食物を襲つたり、羽蟻が燈火に群がつたりして、隨分悪戯をするではないか。兎に角今少し細心の考慮を費さねば

ならぬ。14文例（三年生「ありのけんくわ」）は、三年生ながら、本文章に絶對的に優るものがないであらうか。

本文は又、詞遣ひから推測すると、蟻を女性と見てゐるやうである。通常そこらに這つてゐるのは職蟻であつて、生殖能力からいへば無性であるが、職蟻は元來「不完全な雌」だと言はれてゐるから、女性としたことは差支ない。兎に角此の種の文に在りては、登場者を男にするか女にするかといふやうな、瑣細な點に迄注意することの必要を見るのである。

世人は又、蟻の卵と蛹と幼虫とを含めて、一口に「たまご」と言つてゐるやうであるが、「私は蟻」といふやうな擬人體文章に於ては、其の變態を觀察精査して、十二分の認識に基いて而も輕妙にユーモラスチックに綴るならば、知解的にして而かも文藝的なよい作品を贏ち得て、新味も深味も眞劍味も加はるであらう。

所謂羽蟻は雄と雌とであつて、體軀のくびれ工合も、單複眼も職蟻よりは非常に發達してゐるのである。

（56）僕は蚊である　（六月廿三日）

僕は蚊である（一）。生れた時は「ぼうふら」といふ蟲で、どぶの中にゐた。僕の兄さん達は大さう僕を歡迎してくれた。僕はどぶの底に落ちてゐる朽つた木の葉や小蟲等を食べて一日〳〵と大きくなつた。いよ〳〵一人前の蚊になることが出來て僕は勢よく飛び出した。あつちにもこつちにも人間がゐる。太つてゐてうまさうなのもゐればやせてゐる人もある。僕はそこにある一軒家へ飛びこんだ。まる〳〵と太つた赤ん坊がすや〳〵れてゐる。これはやはらかさうだと勢こんで針をつきさして思ひ切り吸つた。その隣の室に飛込むと机があつて、その下に脚がぶら〳〵してゐる。これはうまいとそれに針をさし込んだら、何かにひどくたゝかれて脚が曲つてしまつた。びつこを引き〳〵逃げてやつと其の部屋を出た。へんな匂ひがして來る。これは變だと暫くかいでゐると段々目がくらんで來た。氣が遠くなつて來た。（二）僕は之が蚊取線香といふものゝ香だと氣づいたがもうおそい。（三）あゝ、もう何も聞えなくなつた。

（一）雄は血を吸はない。「僕」と言ひ出したのが抑々の誤りである。そして此の批評は生徒の側からも出た。

（二）「僕はこれが蚊取線香……」は無駄な說明で、之が爲に文の含蓄を害する。

(三)　目が見えなく……氣が遠く……と漸層的に出た所はよい。が、も一つ漸層的に出たいもの。「それからあとは何も分らない」とでも結んだらよからう。

本文も亦前文同樣、蚊の理學的研究が大に足りない。子子の研究も、も少しあつて欲しい。その方法は、子子のわいてゐる泥溝水を、コップなどに掬ひ入れ、數日間その折々の運動や變態を觀察したならば面白いであらう。かうすると「ぼうふら一」といふ題で、可なりな長文が出來るであらう。

蚊が赤ン坊の血をウンと吸つて、又隣室で吸ふだのいふことは事實あり得ない（腹がさける程吸つた後は、障子などにとまりて休む）。次の室で又吸ふ爲には、赤ン坊のお母樣にでも追ひまくられた——母親が「可愛相に〳〵」など獨言つ狀景などを添加すると面白からう——ことにでもしなくてはならぬ。

本文は要するに、文藝的には可なり成功してゐるが、理學的には落第の外ない。

女兒は殊にこの理學的方面に關心が少いやうだから、十分指導して興味をこの方面に向けさすべきである。

世界大戰以前は、歐米、殊に米國の自然研究（理科）は、盛に詩歌を引用したりなどして、文學的、宗教的に傾いてゐた。別言せば理學が文學に近づいてゐた。私は上揭一文を餘りにも理學的角度から酷評したやうであるが、理學が文學に近づけたい。さうすることが文學に新鮮味を添へる所以だと思ふからである。今子子を一週間も研究してその敏速に運動する狀態を「輕業をするやうだ」とか、飛行機の變體航空（高等飛行）などの比喩を用ひて綴りこなすならば、古人が曾て指を染め得なかつた領域に突入して新らしい文藝を創始することが出來るであらう。

以下比較的傑作と思はれ文例を、少しく擧げることにする。尤も小學校では、兒童數が極めて少いから（各學年とも五十名内外——總數僅に三百）天才的のものもさう澤山にはない——千萬人中になら、天才も少しはある筈だか——從て傑作と言つた所で、大したものでない。のみな

らず、兒童の生ぶの儘で、少しも手を加へないから、尚更見劣りのすることを斷つておく——併し眞に子供の文章を知りたい人は、却て歡迎して呉れるであらう。

（46）　綴方を返して頂いて　（十二月中旬）

……今度の文もやつぱりいけないのであらうと思つて悲しくなつた。赤い字の批評をそつと讀んで見ると「何時もよりは素直にかけて居る」とある。お机の中にしまはうとしながら「いひつ」と笑つてしまつたので、秋月さんが、前で、びつくりして、私の顏をじつと見つめながらにや〳〵笑つて「どうしたの」とお聞きになつたが、私はだまつてゐた。けれども心の中では「うれしい、うれしい」で一ぱいだ。お家にかへつて直ぐお母樣の所まで走つて行つて、「ハーイ」と渡してピヨン〳〵はねながら自分のお部屋に入つた。だがちつともじつとしてゐられないので、お母樣の所へ行つたり、弟の所へ行つたりしてはしやいでしまつた。夕方、赤くやけた空を見ながら「きつと今度もよく書いて見せるわ」と（心に）ちかつた。結末に於て、作者の喜びが、よく描寫されてゐる（下級生なら、「うれしくて〳〵堪らない」とアッサリ說明して了ふ所なれども）。平素能文家でない作者が、實感を正直に書いたので、この子に取りての傑作が出來た。此の文を讀んで、敎師や生徒は敎へられる所が少くはあるまい。

（九月下旬）

（47）　空想

面白い空想、美しい空想。私は色々の空想をする。一人で花を見てゐれば花のことについて、星を見てゐれば星のことを、次ぎ〳〵夢のやうに考へて見るのは面白い。大きな外國の繪を見てゐると、自分も其の中にゐて動いてゐるやうな氣がする。向ふにある白い建物の中からスーツと一隻のゴンドラ、これに私とお姉樣とが乘つてどこまでも〳〵。私がその中で外の景色を（に）見とれてゐる、と、お母樣に呼ばれてハツとすると、もう美しい景色は消えて、大きな繪の前に立つてゐる。こんな風に空想して見ると、私の前にゐる渡邊さんも眞崎さんも、お伽の國のお姫樣に見えたり、小い兎にも見えて來る。

文藝的・藝術的素質を有する作者の、正直な僞らざる表現と見える。個性に留意して善導せねばならぬ。

（48）　弟の書始め　（冬休中の作）

大きい硯に墨を移す。「しつかりおさへてから少し力を抜いて引くんだぞ、いいか」、「曇をこくして

〳〵」とママの聲だ。すき間もない注意。御本人の弟はさつきから筆ばかり直してゐる。ぢつとお手本を眺めてゐる顏、心配さうな目、引しまつてゐる口元、「あつ、墨が落ちた」、おどろいたのかあわてゝおさへる。「おさへたら引け〳〵にじむぞ」。耳に入るか入らない中に手は動いた。「そこを抑へろ〳〵」。「餘り長くおくなよ」。手を上げた。「あなたがおくなとおつしやるものだから、餘りおさへないうちに上げたぢやないの」、「なにその位よい〳〵」となだめるパパ。「いいか〳〵、點をしつかりやるのだぞ」、「終りをしつかりおさへて〳〵」。打つた點も、筆も直さず引いた棒も、上出來だらうと心に思つた。「いかんぞその棒」、「いい、今度は、日、しつかりしなさい」。「うまいぞ〳〵」、「よく出來てよ」、「このつぎもがんばれ、いいか」。うれしさうな顏で手本を見てゐる弟、得意の「ノ」の字なのだ。「ノもよいぞ、次のをしつかりしろよ」。點を打つ、棒を引く、はねた。「うまい〳〵」、上出來、最後だしつかりしろ」なぐさめるのか、注意か、混ぜこぜの詞が連發して出る（連發される）。思ひ切つて筆をしつかり引いた。上出來。雪白の半紙に墨たつぷりと、大きく又立派にいかめしく、「ハツ日ノ光」と。私もうれしい、自分のことのやうに。外からは羽子の音が暖い春風にのつて聞えて來る。

無駄のない、勢のよい文章だ。大分省筆されてゐるが、句讀點や引用符が正確なので不解の點は先づない。結末は殊によい。今迄皆な夢中で、曾て聞えなかつた羽子の音が、安心したので聽取されたのであらう。

（一月下旬）

（49）新入生のお世話をして

（我校では新一年入學試驗（面會と稱へてゐる）の際、幾名かの五・六年生に志願者の遊び相手をさせ乍ら、一室で（體操室で）嬉遊させ、その間の言動を觀察して、入學許否決定の一資料にする）

恥かしいのを我慢して理科室（入學志願兒童及びその保護者控室）の戸をあけると、さつとお母樣達（保護者）がこちらを御覽になつた。勇氣を出して、「お子樣だけどうぞいらつして下さい」といふと、黒つぽいお着物（紋附羽織が多い）のお母樣達の間から、色々のお洋服を着た、可愛いい新入生が出ていらつしやつた。「さアこゝへ一列に並んで頂戴」と、一人々々並ばしてあげる。何だかふわ〳〵してゐる。さうして先頭の方の手をもつて、お遊戯室の方へつれていつて上げると、あたりを盛に見まはしてゐる。「お手々を暖ためましよう」と先生方もふだんのお聲とまるつきり反對のお聲で（餘處行きのお聲で）おつしやる。手が温たまるか温たまらないうちに、私達は思ひ〳〵の方を一人づゝつれて遊ぶ。私のつれて上げたのは五十三番だ。「風船？　羽根つき？　どつち？」、「羽根つき」と蚊のなくやうな聲でいふ。漸く聞き取つ

て羽根つきをやつた。中々上手。向ふから打つた羽根は忽ち私の頭の上を越えた。大急ぎでひろつてこつちから上げる。少し行きすぎたのではなかろうか、あゝ、大丈夫。又來た。今度こそはおとさない。よいしよ。又こつちから上げる。變な遊ばせ方ではないであらうか。向ふの方で二三人の先生が見ていらつしやる。何だか體があつくなつて冷汗が出て來た。「今度は鬼こつこなしませう、ジヤンケンポン」、「さあにげませう」。鬼が追つて來た。私のついてゐる五十三番さんは、「歩き鬼」なのに、どん〳〵驅け出す。私はひつぱられながら、氣が氣でない。急に「つかまつた」と、とんきやうな聲で鬼の六十四番さんにつかまへられてしまつた。「鬼こつこもうよしませう」と、ゴロゴロストンをしたり、皆歌つたり、遊戯なしたりした。おかへりに、幾ら自分の妹でなくとも、二三時間お遊びしただけでも何となく五十三番さんが好きになり、心の中で一生懸命入れるやうにと願つた。

（一月下旬）

（50）新　入　生

（前文と同一記事であるから、題は適當でない）

新入生、あの可愛い〳〵新入生のお相手をした私は、お友達にしやべりたくて仕方がない。が、話すことはいけないことになつてゐるので、うつかりすると「あのう、昨日の……」といひかけて、ハツと氣がつきそのあとの詞を無理にのみ込む。だがたまらなくなると、一緒の係だつた方（同日の志願者係——面會は一週間つゞく、但し志願者は毎日かはる）とこそ〳〵お話をして氣をすます。家に歸つて帳面を開くと一ばい、二十九番、九十七番、何番々々と記してある。それはお遊び相手をした時に、可愛いい方や、お相手をした方々の番號札（志願兒が各自の胸につけてゐる）である。私はそれを見てはその方々のことを思ひ出してニヤ〳〵と一人で笑ふことが、度々だが私は一つ困ることがある。それは私は今六年生だ。一年生がお入りになると同時に私達は女學校へ行つてしまふ。さうすると一年生と一緒にお遊びが出來ない。女學校の歸りに小學校へよつたつて、もう一年生は小學校にゐないだらう。あゝ、五年生になりたい。此時だけはなりたい。私はほんとうに五年生が羨ましい。

（四月廿二日）

（51）一　年　生

春になつて新しい一年生が入つていらつしやつた。みんな可愛いくて、一人々々ほほずりをしたいやうだ。（最初は）鬼こつこやさくら〳〵をしてよく遊んであげたが、もうなれて獨りで遊んでゐる方もある。ふざける方もおとなしい方もいらつしやる。春風がそよ〳〵とふいて、一年生をなでて行く。鐘が鳴るとかばんを取りに來る。まるでかばんが歩るいてゐるやうだ。「さよなら」といふと、にこ〳〵笑つて

ゐる皆さん。なんて可愛いゝのだらう。

（52）　舞臺係から見た學藝會

「もう蓄音器持つて行つた？」、「お机は？」などゞ、私達は朝からてんてこ舞です。色々の物を運んだり舞臺に雜巾がけをしたり、幕引の練習をしたり、みんな汗だくになつてゐます。だれかが、「もうみんなお辨當をいただいてゐるのよ」と言つたので、急にお腹がすいて頂きました。午後になつて、「最後の學藝會よ、舞臺係はしつかりしませうね」と、固くお約束して講堂へ向ひました。先づ「後のカチ〳〵山」の準備として、草を出したりお月樣を貼つたり、レコードをかけたりしましたが、別に失敗もなくてホツとしました。けれども子供の國の時、五年生が、子守歌のレコードを、幾ら待つても止めてくれません。生憎私は反對の方にゐたので知らせに行くことも出來なければ、いくら言つても聞える筈はありません。もうどうかするととび出しさうになつて、もぢ〳〵してゐるばかり。ほんとうにあの時程はら〳〵したことは、今度の學藝會を通じてなかつたでせう。「楠公」の時私は幕を引くことになりましたが、幕引は始めてです。若し引きそこなつたらどうしようと思つて、五年生に引方を數はつたりして、一人でびく〳〵してゐましたが、やつて見れば何でもありませんでした。もうお客樣も一ぱいです。プログラム（番組）も大分終に近づきました。私達の「友情」も無事にすんでホツトしてゐると、もう閉會の辭と共に學藝會も終つたのです。反省して見れば別にこれといつて殘念だと思ふこともありませんが、何となく物足りないやうな感じがしてなりません。ハツと我にかへつて外を見ると、もう太陽も西に傾いてゐました。

強い責任感よりして、苦心煩悶の情況を、血のにじむやうな思ひで書いてゐる。餘りに神經過敏のやうにも思はれるが、蟻の穴から堤が崩れ、雀を打つにも全力を用ひる細心な用意も、直接事に當るによりて養はれる。

（53）　一週間の日誌　（夏休中）

八月十二日　晴

午後、近所の福永さんの家に行つた……お暇して家に歸ると、お姉樣がお着物（和服）を着ていらしたので急に着たくなつた。早速ヨーヨー模樣のチヂミを着て、日傘をさしながら洗足池を一回りした。多くの子供達がもち竿を持つて頻りに蜻蛉を追つてゐた。

八月十四日　晴

夜のお食事後、皆で笑ひながらお話してゐると、電氣が二三度暗くなつたと思ふ内にすうつと消えた。同時に物すごい音がして硝子窓に異様な光がうつる。「變電所」、かうさけんで皆で、大きいお兄樣のお書齋に飛び込んだ。パチ〳〵〳〵パーン、無氣味な音。變電所から火が出て附近の家や木立が物凄い程美しい。お兄樣と飛出して行つて見た。別段變りなく見えたが、工夫さんや色々の人があはたゞしく歩き回つてゐる（のが目にうつる）。家に歸つたら水道も止つてしまつたとかで、お母樣とお姉樣とがほのぐらい蠟燭の火に照されてお話していらつしやる。昔を想像しつゝ就寢。

八月十七日　晴

十一時過ぎ、小さい兄樣と羽田穴守海岸に貝取りに行つた。立秋に入つたせゐか何時もになく涼しい、よい日。うす水色に晴れた空にはちぎれ雲が眞綿のやうにふわり浮いてゐる。お茶屋に靴をあづけて、大分引いた砂地におりる。ぼこ〳〵と蟹の穴があいて、鳥の足あとがおしるでもしたやうにはつきりとついてゐる。燈臺のあたりには遊覽船が五六艘止つて、白帆が靜かに六郷川を上つて行く。大分來た所で掘り出した。ちつともゐない。只たまに、しほふきがゐるだけだ。小指の爪の半分位な蛤や淺蜊がちよい〳〵ゐただけなのが情けない。何でも氣候のせいで貝が死んでしまつたとか。去年の三分一ぐらゐしかとれなかつた。

八月十八日　晴

午後ケイチヤンが來たので、洗足池の花火を見に行つた。命がけ位の積りで出かけたが、何のその・警官が澤山に出て如何にも大變さうだけど、人は大してゐない。でもボートだけは人で〳〵乘れない。その内にシユツともえながら尾を引いて上つたと思つたらパツと散る。何發も上つた後、仕掛花火の瀧・船・金魚を見た。シユツ〳〵〳〵パン〳〵、畫のやうに明るく目もさむるやう。パーン、物凄い音がしたと思ふとスーツと消える。チンカラ園から花火がよく見えるといふので入つたら、山形さんにあつたのでピンポンをした。家に歸つて、明日ハーバート大學對東京倶樂部の野球を見に行く約束をケイチヤンとした。

（54）夏の一日　（夏休中）

朝

ふと目を覺ますと、もう五時だ。しつとり露を含んで咲き出た朝顏を數へるのも嬉しい。元氣よくカラ〳〵と車を引いて行くのは牛乳屋さん。後から走つて行くのは新聞屋さん。「大納豆に小粒納豆」と何時ものかはいらしい聲もする。近所でも雨戸を繰る。弟は聲をはり上げて本を讀む。私も負けずに、二階に

上つて書取を始めると直ぐラヂオの音樂が朝の空氣をゆすつて清々しい。聞きなれたアナウンサーの號令に妹達とならんで一しきり體操をする。此の頃は妹もすつかり覺えたらしい。

朝飯をすまし、おさらひを始める頃にはもうジー〳〵蟬が鳴き出すけれども、水銀の頭はまだ三十度にならない。

晝

太陽はぎら〳〵目を射る。蟬もジー〳〵〳〵とかまびすしい。御用聞も郵便屋さんも汗だく〳〵だ。

「お暑いのに御苦勞さん」とママがおつしやる。

弟達は蟬取に夢中だ。一寸の間に私も三度も水をのむ。洗面所ではお祖母さんが「やりきれないね——」といひながら汗を流していらつしやる。(一)裏口から鞦韆が上る。蟬が取れたのであらう。表を通つて行く自轉車のベルも、暑い〳〵といつてるやうだ。水銀の頭がぐん〳〵上る。

(一)巧に省筆してある。のみならず、裏口で……とあるから、書生女中やことによるとママまで飛出して騷いでるるかとも想像される。兎に角餘韻がある。

夕方

豆腐屋のラッパ、新聞屋の走る音、(一)臺所からはトコ〳〵と何か刻む音がしてるる。急に人の活動が始つたやうだ。晝の暑さを湯で流して、打水をした庭に緣臺を持出して涼む。何處からともなく吹いてくる風が、庭の木々をゆすぶる毎に(二)露がおちる。お隣から蓄音機が聞える。ふと西の空を見ると、眞赤に燒けてるる。明日は天氣であらう。蚊遣りの煙が細く立ち登つて、簾のやうな月が木の葉をもれて來る。

(一)東京の新聞配達は腰に鈴をつけてるる。

(二)自然の露ではなくて、打水の雫であらう。少し前に打水をしたこととよく照應する。

作者は省筆の妙を得てるる。此の點のみから見ても、範文とする價値がある。